

シナノにおける

古墳時代後期社会の発展から

律令期への展望

西山 克己

シナノにおける古墳時代後期社会の発展から律令期への展望◎目次

序章

1章 シナノの古墳文化二相

| | |
|--------------------------|-----|
| シナノの6世紀代から7世紀代の土器様相…………… | 11 |
| 篠ノ井遺跡群出土小形仿製鏡の性格…………… | 34 |
| シナノの積石塚古墳と合掌形石室…………… | 47 |
| シナノの古墳時代中期を中心とする北と南…………… | 110 |

2章 シナノにおける新来文化の受容

| | |
|-------------------------------|-----|
| シナノで須恵器が用いられ始めた頃…………… | 137 |
| 下伊那地域の古墳時代における新来文化の受容…………… | 159 |
| 7世紀前半を中心にシナノで用いられた円筒形土製品…………… | 171 |

3章 古墳時代から律令時代への展開

| | |
|---|-----|
| 科野で7世紀代から8世紀代に用いられた暗文土器…………… | 193 |
| シナノ(信濃)出土の「鹿」を描いた埴輪と土器 ~原始・古代からの人々と鹿のかかわり~ …… | 212 |
| 信濃国出土の富本銭と皇朝十二銭…………… | 222 |
| 下伊那地域の古墳群形成の推移と伊那郡衙の成立…………… | 250 |

| | |
|---------|-----|
| おわりに …… | 282 |
|---------|-----|

序章

長野県は南北約 212km、東西約 120km、面積は約 13,562㎡で、県域の四囲は北・南アルプス、関東山地や八ヶ岳・浅間山・御嶽山などに囲まれ、また諸山地から流れ出す川は合流し北は犀川や千曲川となり日本海へ、南は木曾川・天竜川となり太平洋に流れている。このような地形・地理的環境にある本県は本州のほぼ中央に位置している。

時代の推移によって本県地域の名称は異なってきたが、当論では、傳田伊史氏の『浄御原令制下に「科野」が用いられたが、大宝 4 年に「信濃」の表記が初めて公定され、宮都で出土した木簡や屋代木簡で確認されるように、この表記が定着したと考えられる。また浄御原令制以前では、「科野」とは別に「斯那奴」のような音三字による地名表記も用いられた可能性が考えられる。』や、続日本紀記載による大宝 4（704）年 4 月甲子条「令鍛冶司、鑄諸国印」などを参考に浄御原令制以前を「シナノ」、浄御原令制以後の持統 3（689）年から大宝 3（703）年までを「科野」、大宝 4（704）年 4 月以降を「信濃」と表記する（文献 1・2）ことを基本としたが、歴史には連続性があり論考の中でそれぞれの名称を輪切りに使用することに無理があることを踏まえつつ、その表記の時代性を大きく外さないことを前提に「シナノ」・「科野」・「信濃」を使用した。傳田氏の研究成果から外れる箇所が多々あることはご理解いただきたい。

また地域の呼称であるが、長野県北域の長野盆地は善光寺平とし、南域の伊那谷南部は下伊那地域とした。

本県地域は長い歴史の中で面積や形状も異なってきたが、先土器（旧石器）以来、東西南北周辺地域からの様々な文化や生活習慣を受け入れ、さらにそれらを独自の文化や生活習慣とともに周辺地域へ発信しながら現在に至っている。

各時代によりそれらの受け入れ方や発信の形は様々であるが、当論は長野県内の長い歴史の中で培われてきた様々な文化・歴史の中の古墳時代中頃から平安時代にかけての約 600 年間の歴史のごく一部について、それも考古資料を中心に限られた資料を用いての考察である。

しかし、発掘調査によって得られた限られた考古資料ではあるが、文献史料には残されなかった、また文献史料の記載を実証しうる重要な事実がこの考古資料には秘められているものとする。

当論が今回扱った長野県内の 4 世紀後半から 10 世紀代のうち、特に 4 世紀後半から 6 世紀前半にかけては、長野県の歴史の中でも非常に特徴的な時期として捉えることができる。その代表的な動きは、4 世紀代から 5 世紀代に長野県の北域である善光寺平を中心に構築されていた前方後円墳が、5 世紀後半以降にはその主流が南域の飯田市を中心とする下伊那地域に移行してしまうことである。

また善光寺平では、4 世紀後半から 6 世紀前半にかけて積石塚古墳や合掌形石室が突如造られ、また 5 世紀中頃には須恵器の使用・カマドの構築・馬具の使用などが始まる。また飯田市を中心とする下伊那地域でも、同じく 5 世紀中頃には須恵器の使用・カマドの構築・馬具の使用が見られるが、加えて馬の殉葬が行われ、また横穴式石室が 5 世紀末葉か

ら6世紀初頭の前方後円墳に構築され始めることを特徴とする。

これらの動き、特に積石塚古墳や合掌形石室の構築については、戦前以来の研究史では渡来人、あるいは渡来系の人々によるものではないという考え方を前提に研究が進められてきた。ここ数年の県内の古墳時代研究者からは、「渡来人がいたこと」・「渡来人の墓」とする意味と「渡来人を含めた外来系の新たな人々・集団による影響による」とでは、地域の古墳時代社会を考える場合にまったく意味がことなるという意見や、考古資料からは積石塚古墳や合掌形石室には「渡来人の存在をみいだすことはできない」などの意見が出されている。

しかし「渡来人がいた」か「渡来人の墓」の表現に、すべての事々が「渡来人」によるものでもなく、また「渡来人がいた」あるいは「渡来人の墓」の存在を肯定したとしても、それは「渡来人」が大勢押し寄せて地域を一変させるほどに定住したものではないことは常識的に考えられることと筆者は認識している。長い歴史の中で、特に弥生時代以来渡来人といわれる人々が新来文化を携え新たな文化を伝え、生活習慣の変化に影響を及ぼしたことは事実であり、今回焦点をあてた時代背景も、1年あるいは10年などの時間単位で新来文化を携えた渡来人や渡来系の人々を含めた他地域の人々の往来があったことが自然であり、そのような時代背景の中で渡来人や渡来系の人々を含めた他地域の人々の存在を想定できるのが考古資料から得られる事実であろうと考えている。

「渡来人」や「渡来系の人々」の痕跡は、多く残らないのが常識であろうと考える。日常生活をするにあたって地域の人々や生活習慣に同化することで何の不自由もなかったはずであり、このような日々の中で地域に根ざしながら新たな文化や習慣を広めたものであると考えられる。だからこそ、わずかな在地的ではない遺構や遺物の発見があった場合、そこに「渡来人」や「渡来系の人々」の痕跡をみいだしていく方が自然と考える。これは弥生時代であっても、律令確立期であってもその事実は考古資料からも文献史料からも読み取れることは事実であると考えられる。

また今回あつかった、後半部分の7世紀から10世紀にかけても、飛鳥地域や畿内を中心に、あるいは東国にいたっても「渡来人」や「渡来系の人々」の痕跡は十分に認識できることが現在の歴史事実であろうと考える。

また今回の7世紀以降の論考については、特に畿内系の土器や銭貨を中心に扱い、飛鳥諸京や藤原京・平城京・平安京と地方（信濃）との関わり的一端を検証してみた。この結果、日本書紀の大化元（645）年の東国国司の派遣記載や天武13（684）年の信濃に使者が遣わされ地勢調査が行われたことなどの記載をはじめ（註1）、シナノ（科野・信濃）の地ではシナノ（科野・信濃）人や東人のみならず都人の動きも活発であったことがうかがえ、これらの記載を明確に裏付けるものとして畿内系暗文土器や銭貨などの考古資料が位置づくことを確認できた。

信濃は畿内と東国を結びつける重要な拠点であり、決して通過点ではなかった。西からの玄関口である下伊那地域、国府所在としての重要な位置にあった、更級～埴科地域、小

県地域、筑摩地域、東への玄関口であった佐久地域には畿内から東国への重要なルートがあったことが発掘調査で得られた考古資料が物語っている。

ただここでお詫びしたいのは、扱った時代関連資料の発掘調査によって得られた考古資料の少なさと筆者の力量不足から木曾地域・諏訪地域への十分な考察ができなかった。このことについては深くお詫びしたい。

今回扱ったテーマや論考が長野県の原始から古代の歴史のすべてを物語るものではない。しかし、今後の研究の中に1つでも生かされることがあれば幸いと考える。

このようなことを前提に「こんな歴史もあったのか」と感じていただければ幸いである。

今回の論考をまとめるにあたっては、明治大学在学中、そして卒業後にご指導いただいた大塚初重先生や指導教授であり平成17（2006）年に現職在任中に他界されてしまった故小林三郎先生、また筆者の勉強にご理解ときびしいご意見をいただいている専修大学の土生田純之先生に感謝し序文としたい。

註

- 1 日本書紀では信濃と記載

参考文献

- 1 傳田伊史「信濃国における行政地名の制定について」『信濃』第51巻第3号 信濃史学会 1999年
- 2 傳田伊史「五・六世紀のシナノをめぐる諸問題について」『生活環境の歴史的変遷』 地方史研究協議会編 雄山閣 2001年



シナノの古墳文化二相

シナノの6世紀代から7世紀代の土器様相

1 はじめに

考古学では時代決定や歴史の諸要素を考える上で、土器編年や土器研究が大きな要因となるため、当論をまず示すこととした。検討するにあたって長野県内を大きく四つの地域に分けることとし、さらに南信地域については二つに分けることとした。この分けかたは、単に行政上あるいは地理的なものではなく、歴史の流れの中で様々な文化様相の違いを示す地域としてとらえることができ、今回の6・7世紀の土器様相についてもその例外ではないからである。

◎ 北信地域（千曲川水系）＝扱う資料については長野市・千曲市・中野市内のものが中心となる。（善光寺平の資料が中心）

◎ 東信地域（千曲川水系）＝扱う資料については佐久市・御代田町・小諸市内のものが中心となる。（佐久平の資料が中心）

北信との接点となる上田市の資料については、出土資料が少ないため今後の調査・研究が必要と考えられる。

◎ 中信地域＝扱う資料については松本市・大町市内のものが中心となる。（松本平の資料が中心）

中信の南域にあたる木曾郡域の資料については、出土資料が少ないため今後の資料蓄積を待たねばならない。

◎ 南信（天竜川水系）＝扱う資料については諏訪市・駒ヶ根市・飯田市内のものが中心となる。（諏訪湖周辺・伊那谷の資料が中心）

ただし、諏訪湖周辺（諏訪郡域）と伊那谷（上伊那郡域・下伊那郡域の資料）の資料は様相を異にするので分けて扱うこととした。特に下伊那地域の土器については別論（＝下伊那の古墳時代における新来文化の受容）で扱うこととした。

2 研究概略

長野県内における6世紀・7世紀の発掘調査例については、ここ数年増加しているものの集落景観や土器様相を明確に示してくれる遺跡はあまり多くない。特に6世紀代の初頭・末葉以外の前葉・中葉・後葉については、集落のみならず古墳についても不明な点が多く、遺跡が少ないのか、あるいは調査例が少ないのか、さらには遺物（特に土器）の資料操作に問題があるのかなどと考えさせられてしまう状況であった。

さてこれまでの研究史を振り返ってみると、長野県の弥生土器や土師器・須恵器の研究において、忘れてはならない人がある。それは笹沢 浩氏である。笹沢氏は6世紀から7世紀の土器についても、これまでの数少ない資料をもとに研究成果を示してきている。

6世紀から7世紀の土器の研究について笹沢氏が県内をリードしてきたことは、言うまでもないが（文献1・2・3）、笹沢氏と同じ頃にいち早く研究成果を示した坂野和信氏（文献4）の業績も大きい。この後5世紀後半から7世紀後半にかけての論考が、青木和明氏（文献5）、原明芳氏（文献6）、直井雅尚氏（文献7）、花岡弘氏（文献8）、千野浩氏（文献9）、竹原学氏（文献10）筆者（文献11・12）らによって示されてきた。

しかし、ここ数年来高速道路交通網の整備などに伴う開発による大規模発掘によって、ここにきてようやく6世紀・7世紀の資料の蓄積をみるようになった。

これまでの長野市教育委員会・松本市教育委員会・小諸市教育委員会・佐久市教育委員会・御代田町教育委員会などによる調査・研究の成果は大きいですが、ここ20年来の長野県埋蔵文化財センターの調査による資料蓄積には大きなものがある。善光寺平での遺跡を見ても篠ノ井遺跡群高速道地点（文献13）、榎田遺跡（文献14）、篠ノ井遺跡群新幹線地点（文献15）、屋代遺跡群高速道地点（文献16）と、たいへん多くの良好な資料の蓄積がみられ、上田市域や佐久市域においても多くの調査が進められ同様な資料蓄積がされている。

また、県内市町村においてもいくつかの資料蓄積がみられるが、その中でも特に注目されるのが、大町市中城原遺跡1号墳・4号墳（文献17）からの一括資料や、松本市出川南遺跡（文献18）での一括資料、そして小諸市竹花遺跡の資料（文献19）であろう。

ここ数年は特に大規模調査により得られた資料から、発掘された各時代の集落遺跡の資料を分析・研究することにより、土器の編年研究等が長野県埋蔵文化財センターを中心に示され、古墳時代後期の土器研究や文化等を考える上で大きな成果をあげている。

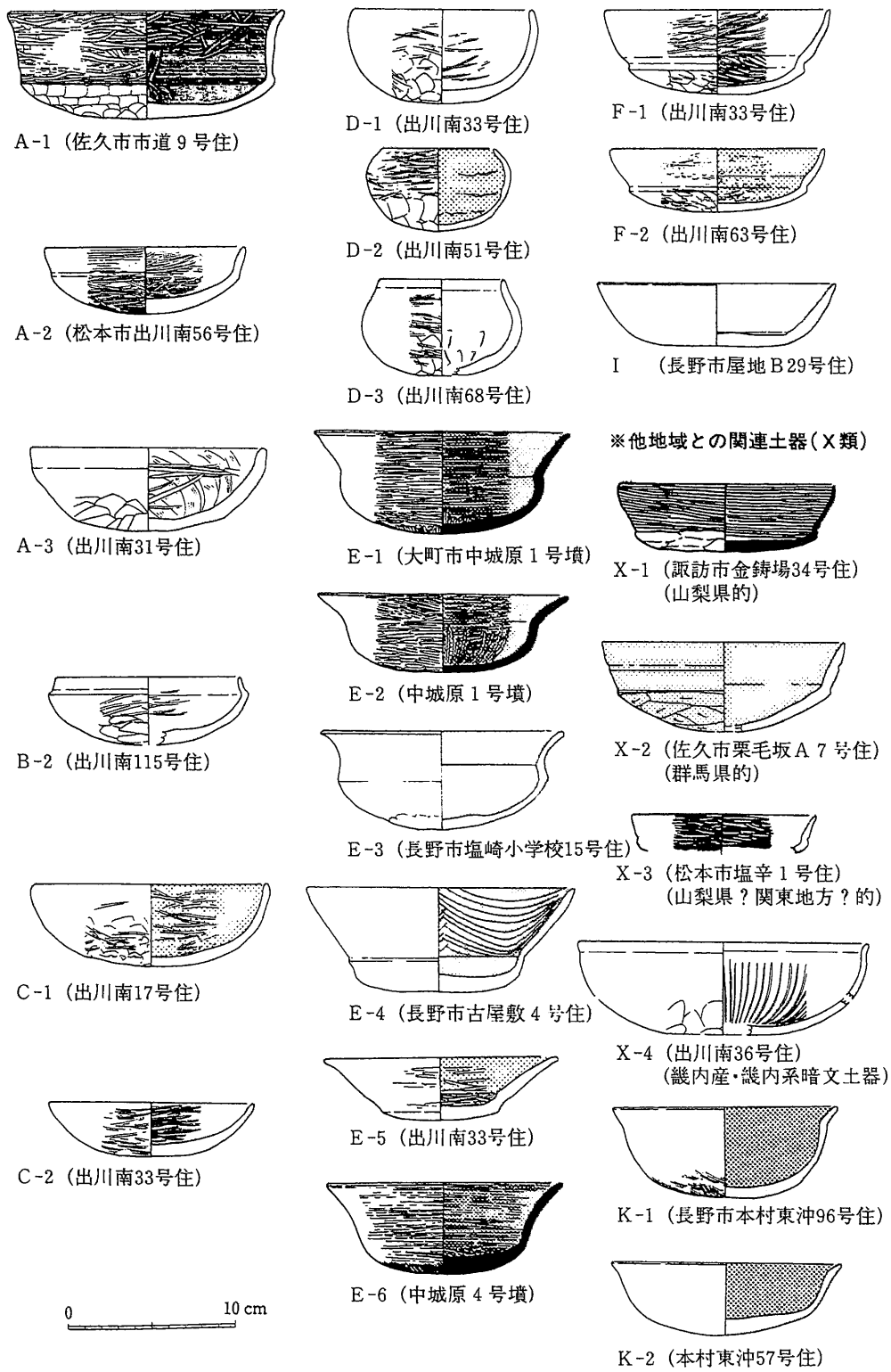
3 時期設定と年代観

長野県では、須恵器に関して言えば先後するような型式の同時使用、あるいは在地色の非常に強い須恵器がここ数年多く見られることから、すべてを須恵器編年によることは難しく、須恵器編年を参考にしつつ土師器の型式変化に重点を置いた編年案を考えることが重要である。

全国的な基軸としての時代および時期の設定は、須恵器を一つの基準とし、6世紀代を田辺昭三氏の陶邑編年（文献20）により、7世紀代を田辺昭三氏の陶邑編年と西弘海氏以来の飛鳥・藤原編年（文献21）に依ることとする。

4 編年基準に用いる土師器杯類の形態的特徴からの器種分類（第1図）

- 杯A-1 = 須恵器杯蓋（TK10以前）の模倣を原形とする。
- 杯A-2 = 須恵器杯蓋（TK43以降）の模倣を原形とする。
- 杯A-3 = 須恵器杯蓋（TK43以降）の模倣を原形とする。ただし杯A-2と異なるのは、口縁部がつままれたように直立あるいは直立ぎみに短くたち、蓋でいう天井部が深い。
- 杯B-1 = 須恵器杯身（TK10以前）の模倣を原形とする。（県内良好な資料が少ない）



第1図 時代推移や地域色を示す土師器杯類 (形態的特徴を主とした分類) (文献38より)

- 杯B - 2 = 須恵器杯身 (TK43以降) の模倣を原形とする。
- 杯C - 1 = 浅い半球形。短い口縁部が立ち上がり丸底形態になるものや、口縁部がわずかに内湾するものも含む。
- 杯C - 2 = 杯C - 1 よりもさらに浅いもので、皿状にちかい。
- 杯D - 1 = 深い半球形のもの。短い口縁部が立ち上がるものや、口縁部がごくごくわずかに内湾するものも含む。
- 杯D - 2 = 深い半球形。口縁部が内湾する。
- 杯D - 3 = 深い半球形。短い口縁部がわずかに内湾した後、つままれたように直立する。
- 杯E - 1 = 口縁部が杯部中ほどで曲線的に大きく外反する。外面は曲線的で、内面に屈曲部がある。
- 杯E - 2 = 杯E - 1 の浅いもの。
- 杯E - 3 = 口縁部が杯部中ほどで屈曲して大きく外反する。内外面に屈曲部がある。
- 杯E - 4 = 口縁部が杯部下位で曲線的に大きく外反する。外面は曲線的で、内面に屈曲部がある。杯E - 1 が変化したような形状。
- 杯E - 5 = 口縁部が底部との接合付近から大きく浅く外反する。杯E - 2 が変化したような形状。
- 杯E - 6 = 口縁部が底部との接合付近から大きく深く曲線的に外反する。
- 杯F - 1 = 口縁部が屈曲し外傾して立ち上がり内湾してのびる。杯A類の一種。
- 杯F - 2 = 杯F - 1 の浅いもの。
- 杯I = やや丸味をもつ底部で、口縁部が外反あるいは外傾してのびる形状。
- 杯K - 1 = 深い半球形を呈し口縁部端部がつままれたように短く外反する。
- 杯K - 2 = 杯K - 1 の浅いもの。
- 杯X - 1 = 杯F類の系譜であるが、内外面を磨いた後、内外面に漆あるいは漆的なもので黒色処理をしている。(山梨県方面の影響)
- 杯X - 2 = 杯A類の系譜であるが、内外面を磨かず、内外面を黒色処理や赤彩されている。(群馬県方面の影響・いわゆる有段口縁杯)
- 杯X - 3 = 杯F類の系譜であるが、内外面を磨いた後、内外面を赤彩している。(山梨県方面? 関東地方? の影響)
- 杯X - 4 = 畿内産あるいは畿内系の暗文土器 (文献 22)。

以上のように分類をしたが、この分類がすべてを網羅したものとは考えていない。今回の論を進めるにあたって、A・B・C類は6世紀から7世紀代の土師器の祖形となるもの、そしてD・E・F・I類はA・B・C類を含め、6世紀から7世紀代の土師器の主流の一端となるものと理解し、さらにK類は5世紀代を代表し主流をなした土器の系譜上にあり、古墳時代中期的土器様相から古墳時代後期的土器様相への変化を見るにあたり、非常に重要な土器であろうと理解し、ここにそれぞれを便宜的に設定したものと理解していただき

たい。

また、杯X類についてはあらゆる意味での他地域からの影響による土器（杯）として明確に理解しえるものとして設定した。

5 他地域との関係が考えられる特徴的な土器

土器の分類の中で杯X類として紹介をしたが、ここでさらにふれてみたい。杯X-1については、いまのところ諏訪市金鑄場遺跡第34号住居跡（文献4）での報告があるが、同じ諏訪市の十二ノ后遺跡（文献4）の中にも見られるようである（註1）。おそらくは山梨県方面の影響のもとに諏訪盆地地域にのみ見られるものであるが、松本市塩辛遺跡1号住居跡（文献23）から出土している杯X-3に見られる赤彩（塗布されているのは朱と考えられる。）に杯X-1と同様な意図を見いだせるのであれば、塩尻峠を越えて松本平南域にまで影響がおよんでいると考えられるが、いかがなものだろうか。松本平南域の中に杯X-1の存在を探る目がより一層必要になってくるのかもしれない。

杯X-2については、いまのところ佐久市栗毛坂遺跡A7号住居跡や同B112号住居跡（文献24）などからの出土が見られる。これらは群馬県の平野部の影響と考えられ（文献24）、この群馬県あるいは埼玉県（北武蔵地域）との関わりが強いことが佐久平の特徴と言えよう。

杯X-3については松本市塩辛遺跡1号住居跡（文献23）から出土している。杯X-1のところでも記したが山梨県方面との関係で考えるのか、あるいは古墳

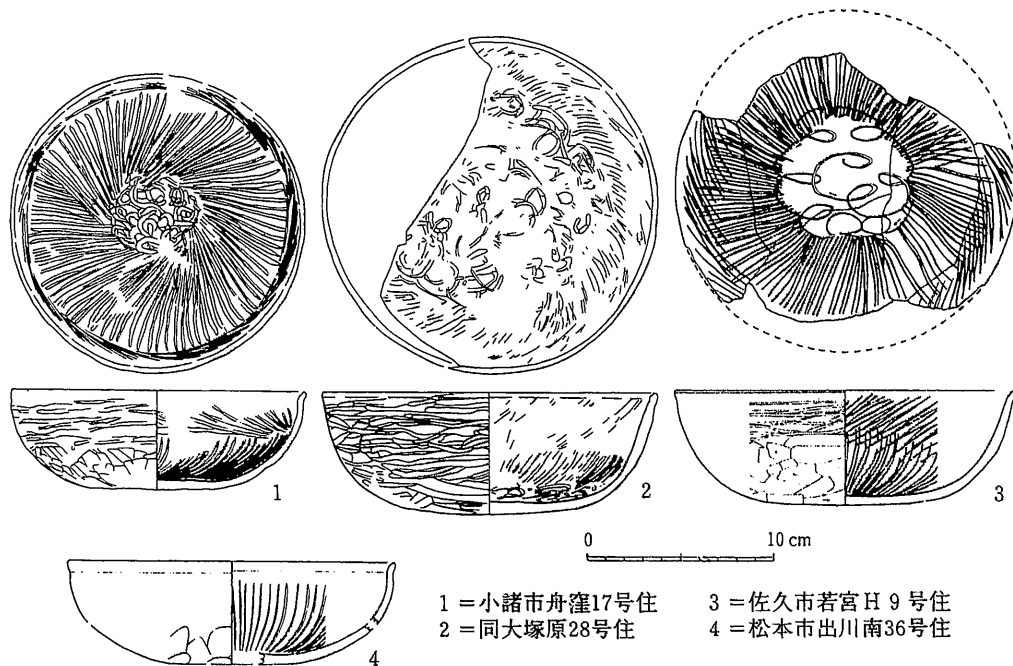
時代後期の杯類に多く赤彩する関東地方の影響と考えるのか、あるいはここに示した以外との関わりで考えるのか、今後の検討が必要であろう。

杯X-3については松本市塩辛遺跡1号住居跡出土資料以外にも未発表資料の中に破片資料としてごくわずかに確認されているようである（註2）。

杯X-4の畿内産あるいは畿内系の暗文土器については確実にどれが畿内産でどれが畿内系とするかは、微妙なところで非常に難しいところであるが、これらの範疇で理解できるものについて若干ふれてみたい。

この杯X-4の初現は飛鳥Ⅱ期からⅢ期にかけての特徴をもつもので、南信地域についての詳細はわからないが、現時点では中信の松本平南域と東信の佐久平にそのいくつかが見られる。（第2図）

- ・松本市出川南遺跡36号住居跡 飛鳥Ⅱ 松本平後期5期（文献18）
- ・小諸市大塚原遺跡SB28号住居跡 飛鳥Ⅱ 佐久平後期5期（文献19）
- ・佐久市若宮遺跡H9号住居跡 飛鳥Ⅱ 佐久平後期5～6期（文献25）
- ・小諸市舟窪遺跡SB17号住居跡 飛鳥Ⅱ～Ⅲ 佐久平後期6期（文献19）
- ・松本市三の宮遺跡SB49号住居跡 飛鳥Ⅳ 松本平後期6期（文献26）
- ・松本市三の宮遺跡SB128号住居跡 飛鳥Ⅳ 松本平後期6期（文献26）



第2図 長野県内出土の飛鳥藤原Ⅲ期以前の畿内・畿内系暗文土器 (文献38より)

以上であるが、飛鳥Ⅳ期以降の畿内産および畿内系暗文土器については、南信地域の飯田市恒川遺跡群A地籍湿地(文献27)や南安曇郡穂高町矢原遺跡8号住居跡(文献28)、小諸市関口B遺跡34号住居跡(文献29)、小諸市竹花遺跡S B 78号住居跡(文献19)、佐久市前田遺跡H 58号住居跡(文献30)など、佐久平を中心に多く出土している。

これらの出土については、恒川遺跡群において信濃国伊那郡衙推定地とされている以外は、役所や寺院以外の集落からの出土である。

さて、杯類から目を転じて土師器の円筒形土製品(=円筒形土器註3)について見てみることにする。

この円筒形土製品については、言うまでもなく山梨県内に非常に多く見られるものであり、山梨県との関係は無視できない土製品であろうと考える。

長野県内におけるこの土器については、助川朋広氏が若干ふれている(文献31)。この中で埴科郡坂城町宮上遺跡での出土状況からカマドの芯材として用いられたものとされている。この使用状況については他遺跡出土資料からも肯定できるものである。

この円筒形土製品についての詳細は、第2章での「7世紀前半を中心にシナノで用いられた円筒形土製品」で述べることにする。

古墳時代後期の甗についてはどうだろうか。

長野県内の古墳時代的甗の初現は、現在のところ長野市石川条里遺跡居住域遺構出土の

把手付き甑と考えられる（文献 32）。この把手付き甑は畿内との関連で考えられると思えるが、矢口栄子氏によると、「初期須恵期との関連において韓式系土器の影響が考えられる。」（文献 33）としている。

それでは古墳時代的甑の終焉はいつであろうか。

小平和夫氏（文献 27）によると、甑は松本市南栗遺跡 SB176 号住居跡や同三の宮遺跡 SB51 号住居跡出土資料、把手付き甑は南栗遺跡 SB224 号住居跡出土の資料を検討し、8 世紀の初頭（第 1 四半期から第 2 四半期前半頃）までは用いられていたようであり、あえて言えば若干早い段階に把手付き甑はなくなっていたようである。

長野県内全体を見ても、佐久平では 7 世紀の後葉から末葉頃にはその姿を消すようであり、8 世紀初頭よりも後の時期に用いられた状況はなさそうである。

6 各地域の 6 世紀、7 世紀の土器を用いた時期区分について

北信地域（第 3 図）

善光寺平後期 1 期

- 須恵器編年 TK47 の時期にあたり、6 世紀初頭頃と考えられる。ただし TK208、TK23、TK47 の須恵器が混在して出土することや、相前後して出土する時期でもある。
- 善光寺平でも松ノ山窯跡で須恵器生産が開始される。この窯で焼かれた須恵器は陶邑製品に類似する特徴をもち、TK47（新）併行と考えられている（文献 34）。
- 土師器には、様々な器種、器形が中期中葉以降同様にみられる。
- 土師器壺は有段口縁壺がなくなり、大型壺は調整の手をはおいたものが多い。
- 土師器杯、高杯の器面にヘラ磨きをおこない、暗文風に装飾効果を意図したものが多くなる。
- 土師器杯には、中期に出現した C-1、K-1、2 そして須恵器杯蓋を模倣した杯 A-1 などがみられる。
- 土師器甕は長胴化し、外面ハケ調整となる。
- 土師器杯、高杯を中心に内面に黒色処理を施したものがある。（共存的）

善光寺平後期 2 期

- 須恵器編年 MT15 から TK10（MT85）の時期にあたり、6 世紀前半から中頃と考えられる。
- 松ノ山窯跡に続く須恵器生産は今のところ確認されていない。
- 土師器には、様々な器種、器形がみられるが、1 期までとは様相が異なり始める。
- 土師器杯、高杯の器面にヘラ磨きをおこない、暗文風に装飾効果を意図したものがみられるが、1 期よりも減少傾向となる。
- 土師器杯には K-1、2 はこの期の中で姿を消し、C-1 は減少する。A-1 が増加し、新に E-1、2、3 が現れ大半をしめ、また E-4、5 も現れ始める。

第3図 北信地域の土師器推移概略 (文献38より)

| 器種 期 | 杯 | 高杯 | 甕 | 甌 | 外来(的) | その他 |
|---------|---|----|---|---|-------|-----|
| 1 | | | | | | |
| 2 | | | | | | |
| 3 | | | | | | |
| 4 | | | | | | |
| 5 | | | | | | |
| 6 | | | | | | |

1期=1・2・4・6~9(長野市本村東沖57号住) 3・5(同榑原小学校7号住)
 2期=10・11(同三輪1次1号住) 12・13(本村東沖86号住)
 3期=14・15(三輪3次14号住)
 4期=16-21・24(同中俣II 1号住)
 22・23(更埴市一丁田S B02号住)
 5期=25-28・30(長野市船地B 29号住)
 29(同田中沖20号住)
 6期=31-33(同塩崎遺跡群市道松筋一小田井神社地点)

10cm No.24, 32, 33は須恵器

- 土師器甕は長胴化し、外面はハケ調整のものに加え、ヘラ削りするものが一般化する。そして平底の甕が増え、底部には木葉痕がみられる。
- 土師器杯、高杯を中心に内面に黒色処理を施したものがある。(共存的)

善光寺平後期3期

- 須恵器編年 MT43 から TK209 の時期にあたり、6世紀後半から6世紀末頃と考えられる。
- 土師器杯、高杯の器面への、暗文風に装飾効果を意図したものがみられなくなる。
- 土師器杯には、A-2が増加し、さらにE-4、5が増加する。
- 土師器甕はさらに長胴化、そして胴の張りが小さくなり、いわゆる烏帽子形となる。外面は2期同様ハケ調整のものに加え、ヘラ削りするものがある。
- 土師器高杯は皿状の杯部(杯C-1)のものが主流となる。
- 土師器杯、高杯を中心に内面に黒色処理を施したものがある。(共存的)
- 善光寺平では、この時期の資料はこれまで特に少ない

善光寺平後期4期

- 須恵器編年 TK217 (古) の時期にあたり、7世紀初頭頃と考えられる。
- 土師器杯、高杯の器面への、暗文風に装飾効果を意図したものがみられなくなる。
- 土師器杯にはC-1、A-2が増加し主流となり、またA-3、B-2も見られる。そして3期で主流であったE-2は姿を消す。
- 土師器甕はさらに長胴化、そして胴の張りが小さくなる。3期同様いわゆる烏帽子形となる。外面は2期同様ハケ調整のものと、ヘラ削りするものがある。
- 土師器高杯は3期同様皿状の杯部(杯C-1)のものが主流となる。
- 土師器杯、高杯を中心に内面に黒色処理を施したものが増加する傾向となる。

善光寺平後期5期

- 須恵器編年 TK217 (新)、飛鳥藤原 I、II の時期にあたり、7世紀前半頃と考えられる。
- 須恵器に宝珠つまみ、かえりをもつ杯蓋が現われる。
- 須恵器杯身(古墳時代型)の法量が最も小さくなる。
- 善光寺平でも茶臼峯9号窯跡(文献34)で須恵期生産がおこなわれる。
- 土師器杯にはC-1、2、A-2、A-3、B-3に、Iが加わる。
- 土師器甕はさらに長胴化、そして胴の張りが小さくなる。3期同様いわゆる烏帽子形となる。外面は2期同様ハケ調整のものと、ヘラ削りするものがある。
- 土師器高杯は3期同様皿状の杯部のものが主流であるが、高杯そのものの数量は減少する。

- 土師器杯、高杯を中心に内面に黒色処理を施したものが多い。
- この時期には畿内産あるいは畿内系暗文土器がみられてもいいがほとんどみうけられない。

善光寺平後期6期

- 須恵器編年 TK46、TK48、飛鳥藤原Ⅲ、Ⅳの時期にあたり、7世紀中頃から後半、末頃と考えられる。善光寺平での土器出土一括資料例をみると飛鳥藤原Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ期の須恵器に宝珠つまみ、かえりをもつ杯蓋が混在して用いられていたようである。このことについては、供給する生産地でのちがいか、あるいは製作する工人のちがいか、あるいはセットとなる杯身の法量のちがいかによるものと考えられる。ただし、かえりをもたない杯蓋は伴わない。
- 善光寺平でも茶臼峯6号窯跡（文献34）で須恵器生産がおこなわれる。
- 土師器杯にはC-1、C-2、Iが主流となる。
- 土師器甕はさらに長胴化、そして胴の張りが小さくなる。3期同様いわゆる烏帽子形となる。外面はハケ調整のものよりも、ヘラ削りするものが多くなるか。
- 土師器高杯は3期同様皿状の杯部ものが主流であるが、数量的にはさらに減少する。
- 土師器杯、高杯を中心に内面に黒色処理を施したものが多い。

古代（奈良時代）の土器へと移行

- 須恵器編年 MT21、飛鳥藤原Ⅴの時期にあたり、善光寺平では8世紀初頭頃と考えられる。
- 須恵器杯蓋は、かえりとして意味をなさないうなわずかなかえりを持つものがいまだに残る。

東信地域（文献35）（註4）（第4図）

佐久平後期1期

- 須恵器 TK23、TK47 を伴い、TK47 の時期で6世紀初頭頃と考えられる。
- 土師器杯はK-1、2とC-1に加え、A-1が現われる。

佐久平後期2期

- 須恵器 MT15 あるいは TK10 を伴い、6世紀前半から中頃と考えられる。
- 土師器甕は長胴化し最大径は胴部下半にある。
- 土師器杯はA-1が主体的になりB-1も見られる。K-1、2は姿を消す。
- 土師器底部多孔小形甗が登場する。

| 器種 期 | 杯 | 高杯 | 甕 | 甌 | 外来(的) | その他 |
|---------|---|--|---|---|-------|-----|
| 1 | | | | | | |
| 2 | | | | | | |
| 3 | | 6期 = 32-35(前田H103号住) 36・37・39・43(佐久市若宮H9号住) 38・40・41(栄毛坂B区112号住) 42(小前市岡口B区34号住) 7期 = 44-49(同竹花38号住) | | | | |
| 4 | | | | | | |
| 5 | | | | | | |
| 6 | | | | | | |
| 7 | | | | | | |

1期 = 1 ~ 5 (佐久市清水田H2号住)
2期 = 6 ~ 9 (同大井城H9号住)10(同H11号住)
3期 = 11・15(小諸市中原4号住)
12(佐久市下壑端H36号住)13・14(同上桜井北H8号住)
4期 = 16~18(中原3号住)19(佐久市上壑端H16号住)
5期 = 20~23・26(大井城H5号住)24・25・27(佐久市前田H33号住)
28~31(同栗毛坂B区117号住)

* { 29-31・40・41 = x - 2
39・42 = x - 4

10cm
・No.43、49は須恵器

第4図 東信地域の土師器推移概略 (文献38より)

佐久平後期 3 期

- 須恵器 MT85、TK43 を伴い、6 世紀中頃から後半頃と考えられる。
- 土師器球胴甕の消滅、甕の長胴化が進む。
- 土師器杯は A-2、B-2、E-4、5 が主流となり、わずかに C-1 が見られる。
- 土師器高杯はいまだ杯部が杯 C-1、2 とならない中期の高杯である。

佐久平後期 4 期

- 須恵器 TK43 を主に、あるいは TK209 を伴い、6 世紀後半から末頃と考えられる。
- 土師器杯は A-2、B-2、E-4、5 がさらに主流となる。

佐久平後期 5 期

- 須恵器 TK217 を伴い、7 世紀初頭から前半頃と考えられる。
- 土師器杯には A-2、B-2、E-4、5 に加え I が現われ、また群馬県からの影響を受けて黒色処理された X-2 が現われる。
- この時期以降に畿内産あるいは畿内系暗文土器 X-4 が見られるようになる。
- 土師器長胴甕底部が突出化する。

佐久平後期 6 期

- 飛鳥藤原 II 期以降の須恵器を伴うが、7 世紀後半頃と考えられる。
- 須恵器に宝珠つまみのかえり蓋が現われる。
- 土師器杯 E-4、5 は姿を消し、A-2、B-2 は減少し、C-1、2、I が増す。赤彩された X-2 も見られる。
- 土師器武蔵甕祖形が登場する。
- 土師器底部多孔小形甗が消滅する。
- 石附窯跡（1 号窯、2 号窯）で須恵器生産がおこなわれる。（I Z 1 期）（文献 36）

佐久平後期 7 期

- 須恵器編年 MT21、飛鳥藤原 V の時期にあたり、宝珠つまみのかえり蓋はこの段階で消滅する。時期的には 7 世紀末葉から 8 世紀初頭頃と考えられる。
- 土師器杯は基本的には C-1 のみとなる。
- 須恵器の環状つまみのかえり蓋（群馬県からの影響）は次の段階まで残る。
- 引続き石附窯跡（7 号窯）で須恵器生産がおこなわれる。（I Z 7 期）（文献 36）

中信地域（文献 35）（註 4）（第 5 図）

松本平後期 1 期

- 須恵器編年 TK47 の時期にあたり、6 世紀初頭頃と考えられる。ただし TK208、

- TK23、TK47 の須恵期が混在して出土することや、相前後して出土する時期でもある。
- 土師器杯は、前代の形態を引き継ぐが、杯K-1、2に口縁部の外反がやや長く、器高も浅めのものが多い。D-1にC-1が加わる。内面に黒色処理をするものが出現している。
 - 土師器高杯は中期的高杯の系譜上にあるが、短脚化し裾部の屈折が不明瞭になる。杯部は腰部の稜が一層不明瞭となり、口縁部も内湾気味に外開し、その量を減らす。口縁部の外接する形態は腰部に稜を有するものがなくなる。新たに須恵器無蓋高杯を模倣したと考えられる形態が出現する。脚部は須恵器同様の形態で透かしを穿つものと、丈の低い裾の緩く開く形態が見られる。また高杯全般に杯と同様、黒色処理をおこなうものが見られる。
 - 土師器壺類は有段口縁壺が僅かに残存し、この段階で消滅する。直口の小形壺や広口壺が存在する。
 - 土師器甕類の実態は不明であるが、おそらく球（卵）胴形を呈すると考えられる。平底のものが存在する。
 - 土師器甗は口縁部が外折し、腰の強く張る単孔の形態が見られる。角状把手を付すものがある。
 - 土師器のいくつかの器種に須恵器模倣のものがあらわれる。

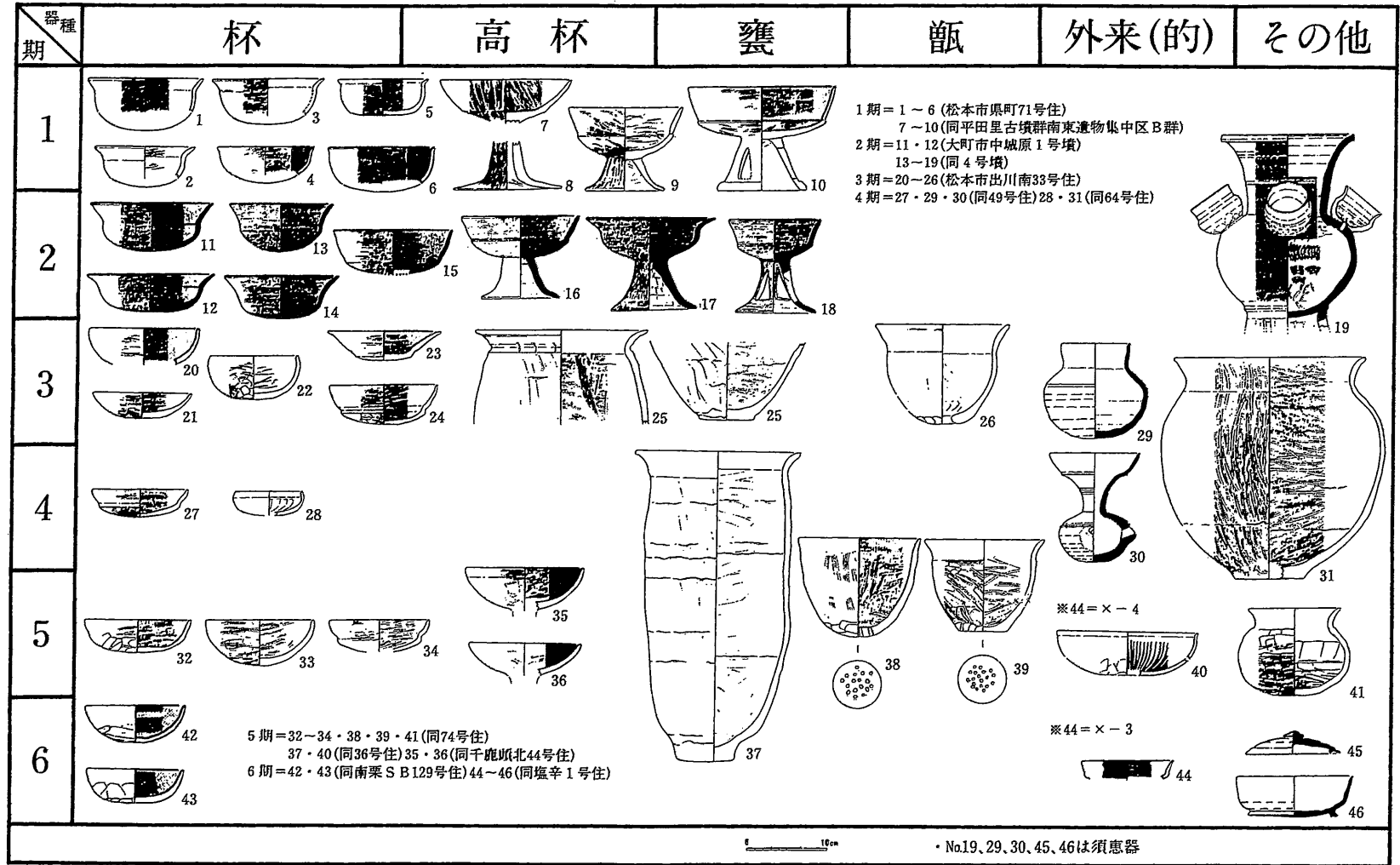
松本平後期2期

- 須恵器編年 MT15 から TK10 (MT85) の時期にあたり、6世紀前半から中頃と考えられる。
- 土師器杯はE-1、2、6が主流となり、杯A-1が加わる。杯C-1は量が少なくはっきりしない。黒色処理が定着する。
- 土師器高杯の脚部は屈折が不明瞭で裾部が短い。杯部は杯A-1とE-1、2の形態が主流である。また須恵器の模倣高杯がある。
- 土師器壺類には球胴や須恵器模倣とも考えられる広口のものがある。

松本平後期3期

- 須恵器編年 MT43 の時期にあたり、6世紀後半頃と考えられる。
- 土師器杯はE-5が現われる。C-1、2、D-1も見られる。A-1、2はその形態をF-1、2と変えている。
- 土師器高杯の脚部は長脚で弧状に開く。杯部は杯A-1ないしE-2が見られる。
- 土師器甕類は張りの強い長胴で平底、筒状のものも加わる。
- 土師器甗は角状把手の単孔（1期のものより口縁部の外反が弱い。）のものや、小形で小単孔のものも見られる。

第5図 中信地域の土師器推移概略 (文献38より)



松本平後期4期

- 須恵器編年 MT43 から TK209 の時期あるいは TK217 (古) にあたり、6世紀後半から6世紀末頃あるいは7世紀初頭頃と考えられる。
- 土師器杯は E-5 が量的には減少し、主体は F-1、2 となる。その他に小数であるが数種の形態の異なる有稜の杯が見られる。
- 土師器高杯は杯部が杯 E-5 と杯 C-1 のものがある。
- 土師器甕は明瞭な平底となる。

松本平後期5期

- 須恵器編年 TK217 (新)、飛鳥藤原 I、II の時期にあたり、7世紀前半から中頃と考えられる。
- 土師器杯には E-5 の内面の段が消失したのが見られる。A-2、3 や F-2 が主流となるが、C-1 あるいは D-1、2、3 なども見られる。
- 土師器高杯は杯部が杯 C-1、A-2、E-2 のものが見られる。
- 土師器壺類は頸部の締りの弱い形態が増し、ミガキ調整が雑になる。
- 土師器甕類は体部の張りの弱いものが増加する。
- 土師器甌類には多孔で小形のものもある。
- この時期以降に畿内産あるいは畿内系暗文土器 X-4 が見られるようになる。

松本平後期6期

- 須恵器編年 TK46、TK48、飛鳥藤原 III、IV の時期にあたり、7世紀中頃から後半、末頃と考えられる。
- 須恵器では、小形化した杯身、杯蓋に加え、宝珠つまみにかえりを持つ蓋が加わる。
- 土師器杯ではもはや A-2、E-5 は見られない。C-1、2 が主流となる。その中で X-3 が単発的に出現する。
- 土師器高杯の杯部は、杯 C-1、2 のほか、杯 A-2 や杯 E-5 の退化したのが見られる。
- 土師器甕類は、体部の張りの弱いものが多く、その張りも上位にあるものが加わる。また張りも上位にあるものに器面をハケメ調整するものが加わる。

古代(奈良時代)の土器へと移行

- 須恵器は、かえりの消失した蓋があらわれ、高台付き杯が伴う。
- 土師器杯 C-1 が主流となる。
- 土師器甕類は、張りの上位にあるもので器面をハケメ調整するものが増す。

南信地域(今回は諏訪湖周辺から下伊那地域までの資料を示したが、下伊那地域につ

第6図 南信地域の土器器種推移概略 (文献38より)

| 器種 期 | 杯 | 高杯 | 甕 | 甌 | 外来(的) | その他 |
|---------|---|----|---|---|-------|-----|
| 上伊1 | | | | | | |
| 下伊1 | | | | | | |
| 下伊2 | | | | | | |
| 諏訪3 | | | | | | |
| 諏訪4 | | | | | | |
| 不明 | | | | | | |

※32 = x - 1

伊那谷(上伊那)1期=1・2(駒ヶ根市中通り下21号住)3・5(同22号住)4(同20号住)
 伊那谷(下伊那)1期=6~12(飯田市天伯B2号住)
 伊那谷(下伊那)2期=13~24(同22号住)
 諏訪3期=25~28(諏訪市金銅場21号住)29(同28号住)30~32(同34号住)
 諏訪4期=33・34・40(同22号住)35~39・41(同25号住)

0 10cm No.01~24の実測図は長野県史遺構・遺物編(1988年)より

いては別論＝‘下伊那の古墳時代における新来文化の受容’で詳細に扱うこととした。）

(第6図)

諏訪湖周辺

諏訪後期1期

- 5世紀代と考えられる資料については多いが、6世紀初頭から中葉頃の良好な資料は見あたらない。

諏訪後期2期

- 良好な資料は見あたらない。

諏訪後期3期

- 須恵器編年 TK43 から TK209 の時期にあたり、6世紀後半から末頃と考えられる。
- 土師器杯については、A-2、F-1、2が主流であり、これに加えB-2、C-1、D-1、さらにはD-2、D-3、E-5的なものなどが若干加わる。この時期に山梨県からの影響によるものと考えられるX-1があるが、その数量からすると特異なものである。全体的にミガキを丁寧におこなう。
- 土師器高杯は、中期的高杯の系譜の最終段階となり、杯部の稜が退化しその形態が杯C-1に近い形態となる。また杯部が杯E-5的なものもある。
- 土師器甕類には、外面に削りを残すものとハケメを残すものがあるが、削りを残すものが多いか。

諏訪後期4期

- 須恵器編年 TK217 (古) の時期にあたり、7世紀初頭頃と考えられる。
- 土師器杯については、A-2、F-1、2が主流であり、これに加えC-1、2がある。E-5的なものは姿を消す。F-1、2を中心に3期よりも法量が縮小し、ミガキが粗くなる傾向となる。
- 土師器高杯は、杯部の形態が杯C-1となり、杯E-5的なものもわずかにある。
- 土師器甕類は、最大径が胴部中央にあり外面に削りを残すものとハケメを残すものがあるが、ハケメを残すものが多いか。

諏訪後期5期

- 良好な資料は見あたらない。

諏訪後期6期

- 良好な資料は見あたらない。

第1表 長野県内各地域の6・7世紀の各期相対表 (文献38より)

| 年 代 | 陶 邑 | 飛鳥藤原 | 善・後 | 佐・後 | 松・後 | 南・後 | 畿・土 |
|-----|------------------|------|-----|-----|-----|--------|-----|
| 500 | TK 23 | | ! | ! | ! | ! | |
| | TK 47 | | 1 | 1 | 1 | 伊 1 | |
| | MT 15 | | 2 | 2 | 2 | | |
| | TK 10 (MT 85) | | | 3 | | 伊 2 | |
| | TK 43 | | 3 | | 3 | 諏 3 | |
| 600 | TK 209 | | | 4 | 4 | 3 | |
| | TK 217 | | 4 | | | 諏 4 | |
| | | I | 5 | 5 | 5 | | |
| | | II | | | | | |
| | TK 46 | III | 6 | 6 | 6 | ? | |
| 700 | TK 48 | IV | | | | | |
| | MT 21 | V | | 7 | | | |
| | | | | | | | ⋮ |

※善光寺平と松本平は6期の土器様相をもって古墳時代後期の土器様相は終わる。年代では7世紀代となり、8世紀に入り飛鳥IV・V的土器様相へと変化していく。

※佐久平では、7期の土器様相をもって古墳時代後期の土器様相は終わるようであるが、年代ではやはり7世紀代と考えてよさそうである。しかし、7世紀末ころに飛鳥IV・V的土器様相へと変化していくようである。

伊那谷

伊那後期 1 期

- 須恵器編年 TK47 の時期にあたり、6 世紀初頭頃と考えられる。
- 土師器杯については、上伊那地域と下伊那地域とでは様相を異にし、上伊那地域では A-1、C-1 が主流となるが、下伊那地域では K-1、2、C-1 が主流となり、A-1 や B-1 が若干加わる程度となる。

伊那後期 2 期

- 須恵器編年 MT15 から TK10 の時期にあたり、6 世紀前半から中頃と考えられる。
- 土師器杯については、1 期同様上伊那地域と下伊那地域とでは様相を異にすると考えられるが、上伊那地域では良好な資料が見あたらない。下伊那地域では C-1 と E-5 的なものが主流となる。

伊那後期 3 期

- この期以降を含め別論で示すこととした。

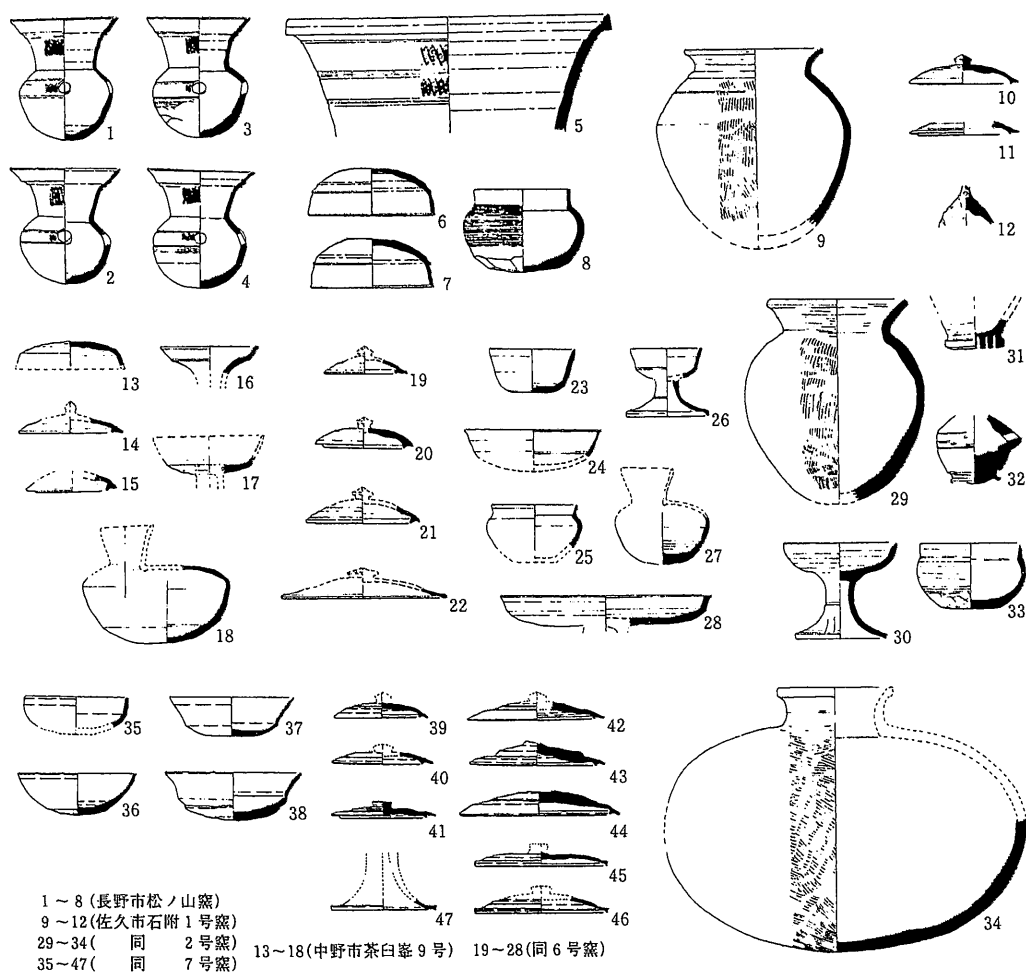
以上、各地域における様相を示してきたが、ここでそれぞれの大きな画期について見てみたい。

第一の画期とは、古墳時代中期的土器様相を脱却して新たな古墳時代後期的土器様相へと変化した時期で、北信では 2 期、東信では 3 期（若干 2 期で見られるかもしれない）、中信では 2 期、南信では 2 期と考えられる。第二の画期とは、古墳時代後期的土器様相からいわゆる先律令的土器様相へと変化した時期であり、北信では 5 期、東信では 5 期、中信では 5 期、南信では 4 期の次の段階以降と考えられ、さらに第三の画期は各地域ともに奈良時代的土器様相へと変化する時期である。

7 須恵器生産について（第 7 図）

当時、陶邑とならび一大須恵器生産地であった東海地域と地理的に非常に近い南信地域（特に下伊那郡域）は、特に北信地域あるいは東信地域にくらべ須恵器の入手が容易であったせいも須恵器模倣の土師器杯はたいへん少なく、逆に北信地域あるいは東信地域では須恵器模倣の土師器杯が非常に多く見られ、東信地域の佐久市や御代田町での出土資料については、関東地方で言う鬼高式土器の様相を思わせる。

現在確認されている長野県内最古の須恵器窯は長野市松ノ山窯である（文献 35）。松ノ山窯で焼かれた須恵器は、非常に陶邑的であるが、松ノ山窯以前の善光寺平における須恵器の入りかたは、善光寺平の南域（更埴市を中心とする埴科郡、更級郡）には陶邑的な須恵器が入り、善光寺平の北域（長野市北部以北の上水内郡、上高井郡、下高井郡）では、



第7図 長野県内の須恵器生産 S = 1/8 (文献38より)

陶邑的ではない東海的（東山系的）あるいは東海的な在り須恵器がみられる。このような状況が善光寺平後期土器様式にどのような影響をおよぼしていったのであろうか。今後の資料蓄積をまちたい。

さらに、飯田市内の遺跡より陶邑あるいは東海地域の須恵器にはまったく見られない特徴を有する初期須恵器（杯・他）が発見されている。今後の資料蓄積による資料の評価のしかたによっては、5世紀後半以降6世紀代にかけての伊那谷における須恵器生産の可能性が非常に強くなった資料と言えよう。（註5）

この後、長野県内における須恵器生産は、現在確認されている限りにおいては7世紀前半頃まで待たねばならない。

この7世紀前半頃以降の須恵器窯は、北信地域での中野市茶臼峯9号窯（文献34）（善光寺平後期5期）、同茶臼峯6号窯（文献34）（善光寺平6期）、東信地域の佐久市石附1号窯（文献36）（佐久平後期6期）、同石附7号窯（文献36）（佐久平後期7期）などが見られる。これらの一括資料を見てみると、飛鳥藤原I期からIV期あるいはV期に該当する

ような資料が混在して見られ、これが生産活動による時間幅を示すものなのか、あるいは短期間内における器種のバラエティーによるものなのかは興味深いことであるが、たとえば善光寺平後期6期の住居からの良好な一括資料を見てみると、どうやらある期間の生産活動は考えられるものの、この形式差の幅が示すほどの時間幅ではなく、ある短期間内における器種のバラエティーによるものと考えられる。このことが、善光寺平後期6期あるいは佐久平後期6期の時代性や地域性を示しているものと言える。

8 土器への黒色処理について

長野県では他地域よりもかなり早い段階で土師器の杯あるいは高杯の内面に黒色処理がおこなわれる。時期的にはTK208あるいはTK23の須恵器が伴う時期と原明芳氏（文献6）によって明らかにされている。ただ長野県内の須恵器の出土の状況がTK208、TK23、TK47が混在して出土することからすれば、その時期判断は難しいが、土師器の様相から考えると5世紀末頃にはその出現を考えてもよさそうである。

この黒色処理は6世紀から7世紀代の土師器の杯や高杯に多くおこなわれ、同じ器種の中に黒色処理されるものとされないものが共存することとなる。

この黒色処理された土師器について、その出現から7世紀代のものは土師器生産の延長上で、8世紀から9世紀以降のものは須恵器生産との関わりでとらえようとする原明芳氏（文献6）の考えがあるが、筆者は黒色処理をする目的・技法・（原料）から、その意図は土師器製作そのものの技術的な変化とは別にとらえ、5世紀末頃から9世紀代の黒色処理について、長野県内では一連の系譜のものであろうと考える。

註

- 1 笹沢 浩氏の御教示による。
- 2 竹原 学氏の御教示による。
- 3 円筒形土器といわれてきた土器について、カマドの芯材として用いられていることから、文献37において「円筒形土製品」の名称を提唱した。
- 4 東信地域については堤 隆氏、富沢一明氏の研究成果をもとにし、中信地域については竹原 学氏の研究成果をもとにした。
- 5 小林正春氏の御教示による。

参考文献

- 1 笹沢 浩「第五章 第二節 古墳時代の土師器とその編年」『上水内郡誌・歴史編』上水内郡誌刊行会 1976年
- 2 笹沢 浩「Ⅱ 4 古代の土器（2）古墳時代の土器」『長野県史 考古資料編 全一卷（四）遺構・遺物』長野県史刊行会 1988年
- 3 笹沢 浩「3 須恵器の編年 6 中部高地」『古墳時代の研究 6 土師器と須恵器』雄山閣 1991年
- 4 坂野和信「Ⅲ 2 金鑄場遺跡3）ア古墳時代後期の時期区分」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－諏訪市・その4－』長野県教育委員会 他 1976年

- 5 青木和明「5 土口將軍塚古墳出土土師器の編年的位置」『土口將軍塚古墳』 長野市教育委員会 他 1987 年
- 6 原 明芳「長野県における黒色土器の出現とその背景 - 5 世紀末の食膳具様式の成立との関連で - 」『東国土器研究』第 2 号 東国土器研究会 1989 年
- 7 直井雅尚「第 5 章第 2 節 2 古墳時代後期の土器」『松本市千鹿頭北遺跡』 松本市教育委員会 1989 年
- 8 花岡 弘「2 土師器の編年 6 中部高地」『古墳時代の研究 6 土師器と須恵器』雄山閣 1991 年
- 9 千野 浩「第 5 章 3 本村東沖遺跡における古墳時代中期以降の土師器編年について」『本村東沖遺跡』 長野市教育委員会 1993 年
- 10 竹原 学「第 3 章第 3 節 (3) 古墳時代後期の土器」『松本市出川南遺跡Ⅳ、平田里古墳群』 松本市教育委員会 1994 年
- 11 西山克己「信濃の国で須恵器が用いられ始めた頃」『信濃』第 40 巻第 4 号 信濃史学会 1988 年
- 12 西山克己「信州における須恵器出現の頃」『考古学ジャーナル』No.316 ニュー・サイエンス社 1990 年
- 13 西山克己 他「篠ノ井遺跡群」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書』16 (財)長野県埋蔵文化財センター 他 1997 年
- 14 廣田和穂 他「榎田遺跡」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』12 (財)長野県埋蔵文化財センター 他 1994 年
- 15 田中正治郎 他「篠ノ井遺跡群」『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書』4 (財)長野県埋蔵文化財センター 他 1998 年
- 16 寺内隆夫 他「屋代遺跡群」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』24 (財)長野県埋蔵文化財センター 他 2000 年
- 17 島田哲男 他『中城原』 大町市教育委員会 1992 年
- 18 竹原 学 他『松本市出川南遺跡Ⅳ、平田里古墳群』 松本市教育委員会 1994 年
- 19 花岡 弘 他『東下原・大下原・竹花・舟窪・大塚原』 小諸市教育委員会 1994 年
- 20 田辺昭三『須恵器大成』 角川書店 1981 年
- 21 西 弘海「V B 土器の時期区分と型変化式」『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』Ⅱ 奈良国立文化財研究所 1978 年
- 22 西山克己「東国出土の暗文を有する土器 - 東国出土の暗文土器 - 」『史館』第 18 号 弘文社 1985 年
- 23 竹原 学 他『松本市塩辛遺跡Ⅱ・Ⅲ、矢作遺跡、松蔭寺遺跡』 松本市教育委員会 1993 年
- 24 宇賀神誠司 他「栗毛坂遺跡」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』2 (財)長野県埋蔵文化財センター 他 1991 年
- 25 林 幸彦 他『若宮遺跡』 佐久市教育委員会 1984 年
- 26 小平和夫「総論編 - 第 3 章第 5 節 古代の土器」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書』4 (財)長野県埋蔵文化財センター 他 1991 年
- 27 小林正春「恒川遺跡群発掘調査概要」『長野県考古学会誌』44 長野県考古学会 1982 年
- 28 市川隆之 他『矢原遺跡』 穂高町教育委員会 他 1987 年
- 29 花岡 弘 他『関口 A・関口 B・下柏原』 小諸市教育委員会 1991 年
- 30 林 幸彦 他『前田遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』 佐久市教育委員会 1989 年
- 31 助川朋広『宮上遺跡』Ⅱ 坂城町教育委員会 1993 年
- 32 飯島哲也 他『石川条里遺跡』6 長野市教育委員会 1992 年
- 33 矢口栄子「Ⅳ 2 遺物」『石川条里遺跡』6 長野市教育委員会 1992 年
- 34 笹沢 浩 他「長野県下出土の須恵器 (上) (下)」『信濃』第 26 巻第 9 号・第 11 号 信濃史学会 1974 年
- 35 堤 隆・富沢一明・竹原 学 他「東国土器研究会 発表資料」東国土器研究会 1994 年

- 36 竹原 学 他『石附窯址群Ⅲ』 佐久市教育委員会 他 1991 年
- 37 西山克己「7世紀代に用いられた円筒形土器」『長野県考古学会誌』79 長野県考古学会 1996 年
- 38 西山克己 他「信州の6世紀・7世紀の土器様相」『東国土器研究』第4号 東国土器研究会 1995 年

篠ノ井遺跡群出土小形仿製鏡の性格

1 鏡の出土状況

篠ノ井遺跡群高速道地点からは3面の鏡が出土している。いずれも古墳時代前期の仿製の小形鏡に属するものである。長野県内の弥生時代から古墳時代にかけての鏡は現在119面ほどが知られているが(文献1)、高速道地点から出土した3面の鏡はどのようなものなのであろうか。若干の所見を交えて紹介してみたい。

竪穴住居跡 SB7250 からは、素文縁で内区には三重の円圈が巡る重圏文鏡が出土している。径3.2cm・重さ3.36gを測る極小の鏡であり、鋳上がりはあまりよくない。多く用いられたせい、内区の一部に穴があいている。床面からはかなり浮いた埋土中から出土しているので竪穴住居に直接関わるものではないと考えられる(文献2)。

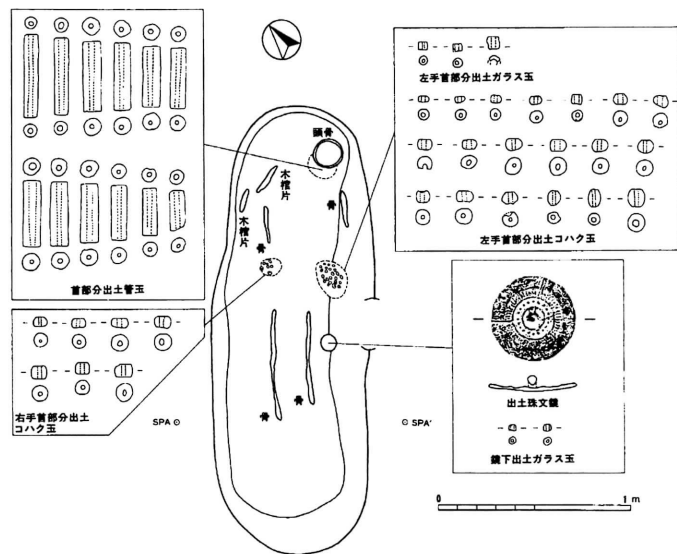
木棺墓 SM7006 からは、外区は素文縁・外向鋸齒文・素文で構成され、内区にはもはや獣を表現したとは思えない獣形が四つ配された獣形鏡が出土している。径8.2cm・重さ42.21gを測る小形鏡であり、鋳上がりはあまりよくない。多く用いられたせい、鈕がかなり摩耗し、また鈕の下の内区もかなり摩耗し穴があいている。所々に朱の残存が確認できる。木棺墓の副葬品であり、瑪瑙の勾玉・碧玉の管玉・スカイブルーのガラス小玉とともに出土している(文献2)。

木棺墓 SM7016 からは、素文縁で内区の外側には櫛齒文が巡り、内側には20個の珠文が一重に配された珠文鏡が出土している。小林三郎氏の言うA類の珠文鏡である(文献2)。



第1図 篠ノ井遺跡群(高速道地点)出土鏡 木棺墓 SM7006 出土獣形鏡(左)
木棺墓 SM7016 出土珠文鏡(右上) 竪穴住居跡 SB7250 出土重圏文鏡(右下)
(文献10より)

径4.4cm・重さ13.31gを測る小形鏡であり、鑄上がりはよく白銅色をしている。ほかの珠文鏡にくらべ特徴的なことは、鈕が非常に小さく作られていることである。土圧のせいかわずかなひびが鏡面に入っている。木棺墓の副葬品であり、琥珀の小玉・碧玉の管玉・スカイブルーのガラス小玉がともに出土している。またこの鏡を包んでいた布と鏡を入れた木箱の残片がわずかではあるが鏡に付着していた（文献2）。



第2図 木棺墓 SM7016 遺物出土状況（文献10より）

2 小形仿製鏡類の出土状況

竪穴住居跡 SB7250 出土の重圏文鏡は、長野県内では初めての出土例である。全国的にも確実に古墳時代のものは59例ほどしか知られていない（文献1）。これらの出土傾向をみると、墳墓からの出土が33例で、集落内や祭祀場といった墳墓以外からの出土は27例であった。これらの傾向からするとSB7250出土重圏文鏡も住居に伴うものとして扱ってよいように思えるが、木棺墓 SM7006・SM7016 出土例や遺跡の密集度を考えると、墓に副葬されたものが何かしらの状況で掘りあげられた結果として竪穴住居跡 SB7250 の埋土に混入したものと考えたい。

さて重圏文鏡とはどのような鏡なのであろうか。その系譜等についてはここでは追究しえないが、小形仿製鏡である以上はもとになる母型があるはずである。小林三郎氏によると、その母型は中国戦国時代末葉から前漢代にかけて制作された「重圏素文鏡」や「重圏清白鏡」ではなく、前漢代に制作されたであろう「日光鏡」・「明光鏡」の類か、「四蛇鏡」と呼ばれる類のものではないかと推定されているものの、中国鏡の中にその母型を特定できない鏡種であるとしている。また小形の内行花文鏡などとともに、弥生時代からの「小銅鏡」の系列のものであることを指摘している（文献3）。

これまでの全国の出土例は上記した通りであるが、分布についてはどのようなものであろうか。

最も多く出土しているのは千葉県と愛媛県の6面である。次いで静岡県5面、兵庫県・岡山県4面、群馬県・三重県・大阪府4面と続く。資料数が多くないための確な表現ではないが、畿内の周辺地域や東西の主要地域に多く出土する傾向が見られる。

篠ノ井遺跡群出土鏡は面径3.2cmと極めて小さなものである。これに近い面径のものが滋賀県坂田郡近江町の高溝遺跡より1面（文献1）（註1）、香川県高松市居石遺跡より1

面出土しているが（文献4）、いずれも内区に一重の円圏を持つものであった。

木棺墓 SM7006 出土の獣形鏡は、長野県内では8面目の出土例である。この8面の分布を見ると、善光寺平で3面、諏訪湖周辺に2面、伊那谷に3面となり、全国的にはかなりの面数が出土している。しかし県内には同形あるいは類似した獣形鏡の出土はないが、県外には類似例として京都府鏡山古墳出土鏡、面径9.7cmがある（文献3）。

さて獣形鏡とはどのような鏡であろうか。その系譜等については重圏文鏡同様に追究しえないが、樋口隆康氏によれば、一般的に獣形が崩れているが、その母型は中国での半肉彫獣帯鏡を模倣したもののようなものである。また古墳時代を通して仿製鏡中最も数の多い鏡式であるようである（文献5）。

木棺墓 SM7016 出土の珠文鏡は、長野県内では17面目の出土例である。この17面の分布を見ると、善光寺平に10面、伊那谷に6面となり、善光寺平では古墳時代前期から中期にかけての出土例があり、伊那谷では古墳時代中期から後期の出土傾向となる。確実に古墳時代のものと考えられるものは全国で259面ほどが見られるが、重圏文鏡にくらべれば古墳時代の小形仿製鏡として多く用いられていたことがうかがえる。

長野県内では、長野市川田条里遺跡において、水田跡の道路跡に置かれた状況で発見されるなど、古墳への副葬品以外での使用方法もみられる。

さて珠文鏡とはどのような鏡であろうか。小林三郎氏によると、中国鏡の中にその母型を特定できない鏡種であるとされている（文献3）。

これまでの全国での出土例は上記した通りであるが、分布についてはどのようなものであろうか。最も多く出土しているのは福岡県で29面である。次いで兵庫県の18面、静岡県・長野県の17面、広島県の16面、岡山



第3図 長野市川田条里遺跡出土鏡（径5.6cm）
（文献11より）

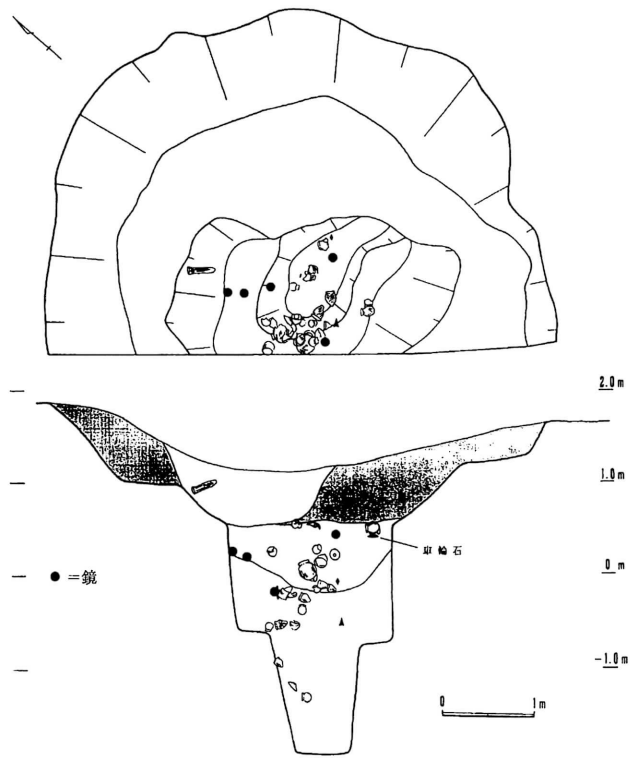
山県の11面と続く。このように出土傾向を見ると、重圏文鏡以上に畿内の周辺地域や東西の限られた地域に多く出土する傾向が見られる。

SM7016 出土の珠文鏡のような素文縁+櫛歯文+20個の珠文という文様構成の鏡は、面径や鈕の形状は異なるものの香川県高松市居石遺跡から1面出土している（文献4）。

以上篠ノ井遺跡群高速道地点より出土した鏡個々について見てきたが、この3面に加え、遺跡が立地する篠ノ井塩崎地域、さらには3面の鏡が出土した住居跡や木棺墓と同時代の古墳が築造されている隣接の篠ノ井石川地域より出土した鏡についても見てみることにしたい。

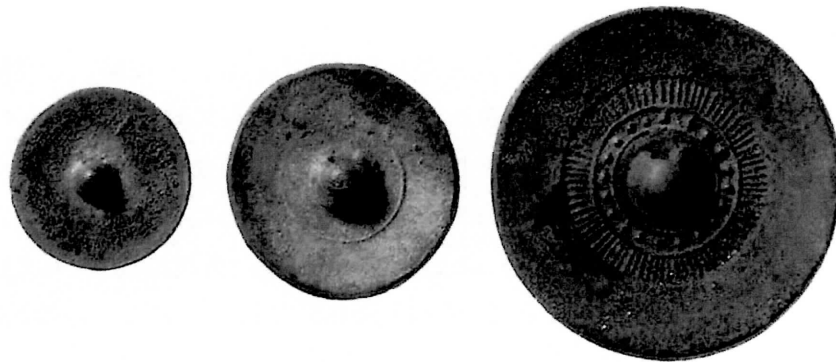
篠ノ井塩崎地区では、篠ノ井遺跡群高速道地点の3点に加え、松節（伊勢宮）遺跡の豎

穴住居跡から内行花文鏡と考えられる鏡1面が出土し、径約17mの円墳である八幡宮古墳から変形四獣鏡1面、石川条里遺跡（祭祀場）から内行花文鏡と考えられる鏡片1面が出土している。篠ノ井石川地区では、径約17mの円墳である飯綱社古墳から素文鏡2面、全長約93mの川柳將軍塚古墳からは伝川柳將軍塚古墳鏡を含めて、方格規矩四神鏡1面、舶載内行花文鏡1面、内行花文鏡3面、乳文鏡2面、捩文鏡1面、獣形鏡1面、珠文鏡1面ほかが出土している。このように塩崎・石川地域には重圈文鏡、珠文鏡、素文鏡、獣形鏡、乳文鏡、捩文鏡、内行花文鏡といった小形仿製鏡が集中していることがわかる。全国での代表的な諸



第4図 兵庫県明石市藤江別所遺跡の井泉祭祀
●=鏡出土状況（文献7より）

例をみてるならば、東日本例では、千葉県草刈遺跡で集落内のいくつかの竪穴住居跡から重圈文鏡1面、珠文鏡3面、素文鏡1面、獣形鏡1面が出土している（文献1）。祭祀遺跡関連では、東京都伊興遺跡で重圈文鏡1面、珠文鏡1面、素文鏡1面、捩文鏡1面が出土し（文献1）、静岡県元宮川神明原遺跡では重圈文鏡1面、珠文鏡1面、素文鏡1面が出土している（文献1）。古墳出土例では、径約20mの円墳である千葉県島戸境1号墳



第5図 香川県高松市居石遺跡出土の素文鏡（左）・重圈文鏡（中）・珠文鏡（右）
（文献4より）

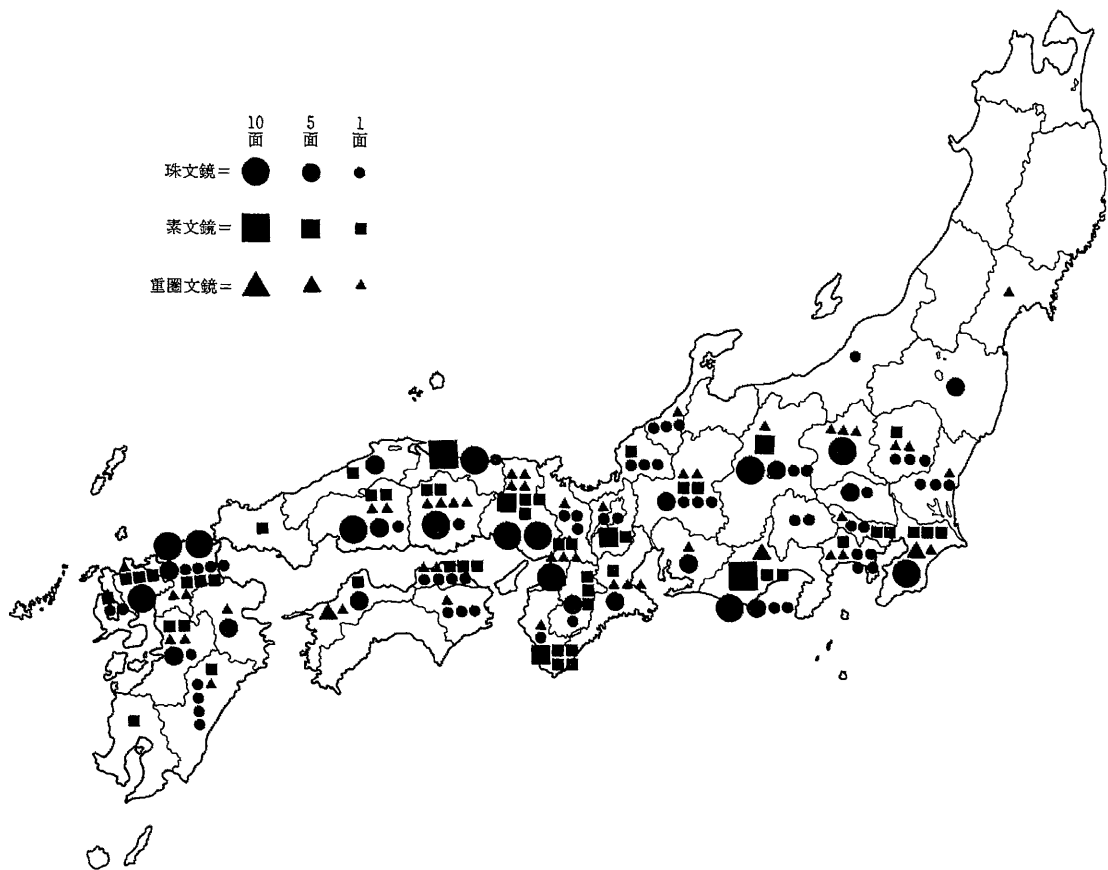
から珠文鏡1面、捩文鏡2面、内行花文鏡1面が出土している（文献1）。西日本はどうか。祭祀遺跡関連では、兵庫県藤江別所遺跡で井泉祭祀に用いられた重圏文鏡2面、珠文鏡2面、素文鏡2面、櫛歯文鏡3面が車輪石などとともに出土し（文献1・6・7）、香川県居石遺跡では祭祀に用いられたものとして、河川底より並んだ状況で重圏文鏡1面、珠文鏡1面、素文鏡1面が出土している（文献1・4）（註2）。古墳出土例では、径約16から17mの方墳である奈良県新沢千塚古墳群48号墳から珠文鏡2面、四獣形鏡1面、捩文鏡1面が出土し、和歌山県大谷古墳では石棺内から素文鏡9面、四鈴素文鏡5面が出土している（文献1）。

高倉洋彰氏は白石太一郎氏他らの「共同研究 日本出土鏡データ集成」の成果から（文献1）、「内行花文鏡を主文にせず、祭祀の可能性の強い遺構や祭祀の結果とみられる出土状況を示す例があり、これらの鏡はおしなべて面径がきわめて小さい。そこから弥生時代小形倣製鏡はやがて古墳時代に儀鏡として終焉していく」と見通している（文献8）。このような視点から祭祀遺跡および集落や包含層など明らかに古墳・墳墓ではない遺跡・遺構から出土した銅鏡で面径が6cm以上の銅鏡は少なく、小形であることにこの種の鏡の特徴があるとした（文献9）。ただし、和歌山市大谷古墳の内部主体である家形石棺出土鏡14面については例外的な使用であることを紹介した（文献9）。

その他第5表を見てもわかるように、古墳副葬品のみならず集落内（集落内祭祀）や祭祀場における祭祀行為に珠文鏡を中心とする小形倣製鏡類が多く用いられ、それも古墳時代前期を中心にしながらも、中期、後期と古墳時代を通して用いられていたことがわかる。

以上から、塩崎・石川地域に持ち込まれた小形倣製鏡は、古墳時代前期より珠文鏡+重圏文鏡（櫛歯文鏡）+素文鏡を代表として、珠文鏡+獣形文鏡+捩文鏡、珠文鏡+獣形文鏡+捩文鏡+内行花文鏡などの組み合わせを中心としながら、それぞれが在地豪族層にセットとして配布されたようである。また古墳や集落・祭祀場で用いられているものの、特に珠文鏡・重圏文鏡（櫛歯文鏡）+素文鏡の組み合わせについては祭祀に用いられることが多かったようであり、他の小形倣製鏡類とも一線を画していたようにもうかがえる。

高倉洋彰氏は、重圏文鏡・珠文鏡・素文鏡について、「弥生時代小形倣製鏡、ことに重圏文日光鏡系倣製鏡第Ⅲ型b類が素文鏡を生み出すにいたる段階」を示され、その中で、「第1段階（重圏文鏡段階）は、弥生時代後期終末にあらわれ -中略- 文様帯部分を2~4重の円圏のみとする重圏文鏡を創り出し、一方で小粒の珠文を強調した珠文鏡を生む。洗練された意匠の珠文鏡は主として古墳副葬鏡として使用され、儀鏡からは外されていくが、重圏文鏡は双方の道を歩んでいく」としている（文献9）。小形倣製鏡類全般にも言えることかもしれないが、特に珠文鏡・重圏文鏡（櫛歯文鏡）・素文鏡については、大形舶載鏡や大形倣製鏡類のような‘隔絶した祭祀に用いられた宝器的性格’を帯びた鏡ではなく、‘身近な穢れを祓い身を守ってくれる儀鏡的性格’が強かったと考えられる。それは篠ノ井遺跡群をはじめとして、藤江別所遺跡出土鏡・居石遺跡出土鏡に見られるそれぞれの紐の摩耗状況を見ても理解されることである。篠ノ井塩崎・石川地域の在地豪族



第6図 素文鏡・重圈文鏡・珠文鏡分布図（文献2より）

層や人々にとってみれば、それは将来を約束された大和政権から賜った儀鏡であったと考えられる。

それでは小形鏡の出土分布傾向はどうであろうか。珠文鏡・重圈文鏡・素文鏡にはその分布に特徴が見られる。先にもふれたが、畿内では大阪府域以外にこれらの鏡の出土は見られず、特に古墳時代前期から中期には大形の船載鏡や大形の仿製鏡が多く分布する地域以外の地域に多く配布された鏡類であることがわかる。畿内を挟んで、東日本では静岡県や長野県で特に多く出土し、次いで千葉県・群馬県となる。西日本では兵庫県・岡山県・広島県・鳥取県に多く見られ、九州地方では福岡県で多く見られる。

小林三郎氏によれば、重圈文鏡や珠文鏡A類は、「畿内地方を中心とする三角縁神獸鏡や、大形の仿製鏡の製作とも、ことなった様相を示すものと理解しなければならないであろう。」と述べている（文献3）。

3 まとめにかえて

以上見てきたように、素文鏡や重圈文鏡などの小形鏡は弥生時代終末から古墳時代にかけて祭祀用としての儀鏡化し、祭祀具としての性格を強く持つ鏡となっていったこと

第1表 長野県内出土の小形仿製鏡（古墳時代前期から後期）

| 鏡式名 | 遺跡名 | 所在地 | 面径(cm) | 遺構 | 時期 | |
|--------------|--------------|----------------|-------------|--------|-------|----|
| 珠文鏡 | 金鑑山古墳 | 中野市大字日野字新野 | 9.3 | 円墳 | 後期 | |
| | 林畔2号墳 | 中野市大字長丘字田麦 | 7.9 | 円墳 | 中期 | |
| | 本郷大塚古墳 | 須坂市大字日滝字宮原 | 8.1 | 円墳 | 後期 | |
| | 戸谷古墳 | 須坂市大字八丁字戸谷 | 7.6 | 円墳 | — | |
| | 川田条里遺跡 | 長野市大字若穂綿内 | 5.6 | 水田道路跡 | | |
| | 大室古墳群196号墳 | 長野市大字大室 | 推定 約 10.0 | 積石塚 | 中期 | |
| | 舞鶴山1号墳 | 長野市松代町大字西条字舞鶴山 | 8.8 | 円墳 | 中期 | |
| | 川柳將軍塚古墳 | 長野市篠ノ井上石川 | 7.3 | 前方後円墳 | 前期 | |
| | 篠ノ井遺跡群SM7016 | 長野市篠ノ井塩崎 | 4.4 | 木棺墓 | 前期 | |
| | 大峽2号墳(北山古墳) | 更埴市大字倉科 | — | 円墳 | 中期 | |
| | 岩屋堂岩窟遺跡 | 小県郡丸子町大字依田 | 6.9 | 曝葬 | 中期 | |
| | 若宮2号墳 | 下伊那郡高森町大字下市田 | 8.4 | 円墳 | 後期 | |
| | 新井原6号墳 | 飯田市大字座光寺字新井原 | 9.3 | 円墳 | 中期 | |
| | 座光寺地区内 | 飯田市大字座光寺 | — | — | — | |
| | 獸形鏡 | 殿垣外4号墳 | 飯田市大字桐林字殿垣外 | 6.8 | 円墳 | 後期 |
| 権現3号墳 | | 飯田市大字上川路権現 | 7.1 | 円墳 | 後期 | |
| 宮の平2号墳 | | 飯田市大字竜江字宮の平 | 欠損 7.7 | 円墳 | — | |
| (伝)川柳將軍塚古墳 | | 長野市篠ノ井上石川 | 欠損 10.5 | 前方後円墳 | 前期 | |
| 篠ノ井遺跡群SM7006 | | 長野市篠ノ井塩崎 | 8.2 | 木棺墓 | 前期 | |
| 姫塚古墳 | | 更埴市 | 9.3 | — | — | |
| 兼清塚古墳 | | 飯田市大字桐林字兼清塚 | 11.8 | 前方後円墳 | 中期 | |
| 殿村1号墳 | | 飯田市大字上川路字殿村 | 10.45 | 円墳 | — | |
| 石原田古墳 | | 飯田市大字伊豆木字青木 | 8.7 | 円墳 | 中期 | |
| (変形六獸形鏡) | | 糠塚古墳 | 岡谷市湊大字小坂 | 10.8 | 円墳 | 中期 |
| (変形獸形鏡) | | フネ古墳 | 諏訪市神宮寺 | 7.6 | 円墳? | 中期 |
| 振文鏡 | | 姥懐古墳 | 中野市大字小田中字更科 | 12.2 | 円墳 | 中期 |
| | | (伝)川柳將軍塚古墳 | 長野市篠ノ井上石川 | 8.1 | 前方後円墳 | 前期 |
| | | 矢先山1号墳 | 更埴市大字八幡字郡南前 | 欠損 6.8 | 円墳 | — |
| | | — | 更級郡内 | 6.9 | — | — |
| | 内行花文鏡 | 岩下古墳 | 須坂市大字豊丘字野下窪 | 8.3 | 円墳 | 後期 |
| 和田東山3号墳 | | 長野市大字若穂綿内 | 11.2 | 前方後円墳 | 前期 | |
| (伝)川柳將軍塚古墳 | | 長野市篠ノ井上石川 | 6.5 | 前方後円墳 | 前期 | |
| — | | — | 7.3 | — | — | |
| 石川条里遺跡 | | 長野市篠ノ井塩崎 | 推定 9.6 | (祭祀) | 前期 | |
| 松節(伊勢宮)遺跡 | | 長野市篠ノ井塩崎 | 欠損 6.7 | 竪穴住居 | 中期 | |
| (伝)市田地区内 | | 下伊那郡高森町大字下市田 | 9.8 | — | — | |
| 兼清塚古墳 | | 飯田市大字桐林字兼清塚 | 9.1 | 前方後円墳 | 中期 | |
| 塚原10号墳 | | 飯田市大字桐林字塚原 | 8.2 | 円墳 | — | |
| 新道平1号墳 | | 飯田市大字立石字新道平 | 10.1 | 円墳 | — | |
| 金堀塚古墳 | | 飯田市大字山本字西平 | 13.4 | 円墳 | 後期 | |

| 鏡式名 | 遺跡名 | 所在地 | 面径(cm) | 遺構 | 時期 |
|-------|--------------|---------------|---------|-------|----|
| 内行花文鏡 | 宮の平2号墳 | 飯田市大字滝江字宮の平 | 6.5 | 円墳 | — |
| 乳文鏡 | 村北3号墳 | 長野市松代町大字豊栄字平林 | — | 円墳 | 中期 |
| | 川柳將軍塚古墳 | 長野市篠ノ井上石川 | 7.8 | 前方後円墳 | 前期 |
| | (伝)川柳將軍塚古墳 | 〃 | 12.2 | 〃 | 〃 |
| | 県山古墳 | 更埴市大字森字県山 | 7.8 | 円墳 | 後期 |
| | 平地1号墳 | 飯田市大字座光寺字平地 | 7.1 | 円墳 | 後期 |
| | 新井原7号墳 | 飯田市大字座光寺字新井原 | 8.4 | 円墳 | 中期 |
| (五乳鏡) | 城山古墳 | 上田市殿城字殿城 | 10.0 | 円墳 | 後期 |
| 素文鏡 | 飯綱社古墳 | 長野市篠ノ井上石川字大和田 | 8.75 | 円墳 | 中期 |
| | 飯綱社古墳 | 〃 | 4.48 | 〃 | 〃 |
| | 爾ノ神古墳 | 塩尻市爾ノ神 | 欠損 9.25 | 円墳 | 後期 |
| | 片山古墳 | 諏訪市大字大熊 | 6.3 | 方墳 | 中期 |
| | 殿村1号墳 | 飯田市大字上川路字殿村 | 4.2 | 円墳 | — |
| 重圏文鏡 | 篠ノ井遺跡群SB7250 | 長野市篠ノ井塩崎 | 3.3 | 竪穴住居 | 前期 |

第2表 全国重圏文鏡出土遺跡・墳墓 (古墳時代前期から後期の墳墓)

| 県 | 墳墓名 | 墳形 | 規模(m) | 面径(cm) | 出土遺構 | 時期 | その他 |
|-----|----------------|-------|---------|---------|------|------|----------------|
| 宮城 | 御山古墳 | 円 | 50 | 2寸2分 | — | 中期 | 鏡式? |
| 茨城 | 勅使塚古墳 | 前方後円 | 64 | 7.8 | 木棺直葬 | 前期 | 後方部 |
| 栃木 | 茂原古墳群愛宕塚古墳 | 前方後方 | 50 | 7.2 | 木棺直葬 | 前期 | 舟形木棺 |
| | 藤本所在古墳 | 不明 | 不明 | 7.3 | — | 前期 | |
| 群馬 | 淵名第1号墳 | 円 | — | 6.6 | 竪穴式 | 後期 | |
| 千葉 | 多古台遺跡群No4地点1号墳 | 円 | — | 欠損 5.0 | 木棺直葬 | 中期 | |
| 神奈川 | 軽井沢横穴 | 横穴 | — | — | — | 終末期 | |
| 岐阜 | 龍門寺14号墳 | 円 | 18 | 5.3 | 木棺直葬 | 前期 | 割竹形木棺 |
| | 美濃観音寺山古墳 | 墳丘墓 | 20.5 | 9.5 | 木棺直葬 | 古墳時代 | 組合式木棺 |
| 静岡 | 女池ヶ谷古墳群26号墳 | 円 | 7.2~8.2 | 5.0~6.0 | 木棺直葬 | 中期 | 割竹形木棺 |
| | 小深田西1号墳 | 方形周溝墓 | 10~11 | — | 木棺直葬 | 古墳時代 | 第1主体部 舟形木棺 |
| | 長崎遺跡SX510 | 低墳丘墓 | — | 7.1 | 周溝内 | 中期 | |
| 愛知 | 寺林第1号墳 | 円 | 20 | 5.3 | — | 前期 | |
| 三重 | 善応寺山古墳 | — | — | 欠損 6.0 | — | 古墳時代 | |
| | 向山古墳 | 前方後円 | 72 | 5.9 | 粘土槨 | 前期 | |
| | 八重田8号墳 | 円 | 24 | 欠損 9.1 | 粘土槨 | 中期 | |
| 京都 | 離湖古墳 | 方 | 34~43 | 7.5 | 木棺直葬 | 中期 | 第2主体部 組合式木棺 |
| 大阪 | 御旅山古墳 | 前方後円 | 50 | 6.8 | 石槨 | 前期 | 後円部 |
| | 板持第3号墳 | 前方後方 | 40 | 8.0 | 木棺直葬 | 中期 | |
| 兵庫 | 大滝2号墳 | 前方後円 | 20 | 欠損 5.0 | 木棺直葬 | 中期 | 組合式木棺 |
| 岡山 | 一宮天神山2号墳 | 前方後円 | 60 | 6.0 | 竪穴式 | 前期 | |
| 広島 | 山ノ神第1号墳 | 円 | 12 | 6.4 | 箱式石槨 | 前期 | 第2号石槨 |

| 県 | 墳墓名 | 墳形 | 規模(m) | 面径(cm) | 出土遺構 | 時期 | その他 |
|----|-----------|------|-------|--------|------|-------|----------------|
| 広島 | 毘沙門台遺跡 | 墳墓 | — | 6.0 | 箱式石棺 | 古墳時代 | |
| 徳島 | 宮谷古墳 | 前方後円 | 40 | 7.3 | 竪穴式 | 前期 | 割竹形木棺 |
| 香川 | 鉢伏山古墳 | 円 | — | 5.4 | 竪穴式 | 前期 | 木棺 |
| 愛媛 | 雉之尾1号墳 | 前方後円 | 30.5 | 5.7 | 木棺直葬 | 庄内～前期 | |
| | 唐子台第5丘7号墓 | 土壙墓 | — | 5.7 | 土壙墓 | 庄内～前期 | |
| | 一助山古墳 | — | — | 6.6 | 箱式石棺 | 古墳時代 | |
| 福岡 | 鬼首古墳 | 円 | — | 欠損 7.6 | 箱式石棺 | 中期 | |
| | 老司古墳 | 前方後円 | 75～76 | 7.9 | 横穴式 | 中期 | 3号石室 |
| 佐賀 | 中隈山4号墳 | — | — | 欠損 7.1 | 礫槨 | 前期 | 第3主体部 割竹形木棺 |
| 熊本 | 舞野2号石棺 | 石棺墓 | — | 4.2 | 箱式石棺 | 前期 | |
| 大分 | 亀甲山古墳 | 円 | — | 5.8 | 箱式石棺 | 前期 | |

第3表 全国重圏文鏡出土遺跡・墳墓以外（古墳時代前期から後期）

| 県 | 遺跡名 | 性格 | 遺構 | 面径(cm) | 時期 | その他 |
|-----|------------|-------|----------|----------|-------|-------------|
| 群馬 | 神保下條遺跡 | 集落 | 竪穴住居 | 6.1 | 前期 | |
| | 新田東部遺跡群 | 集落 | 遺物包含層 | 4.0 | 前期 | |
| 千葉 | 駒形遺跡 | 集落 | 土壙 | 6.1 | 前期 | |
| | 大竹遺跡群二又堀遺跡 | 集落 | 竪穴住居 | 7.3 | 前期 | |
| | 戸張一番割遺跡 | 集落 | 竪穴住居 | 6.3 | 前期 | |
| | 草刈遺跡 | 集落 | 竪穴住居 | 5.4 | 前期 | 重圏文系 |
| | 片野向遺跡 | 集落 | 竪穴住居 | 残存 3.8 | 後期 | 鏡式？ |
| 東京 | 伊興遺跡 | 集落・祭祀 | 表面採集 | 9.3 | 前期～中期 | |
| 神奈川 | 梶山遺跡 | 集落 | 表土層 | 欠損 5.6 | 古墳時代 | |
| 長野 | 篠ノ井遺跡群 | 集落・墳墓 | 竪穴住居 | 3.2 | 前期 | 本来は木棺墓のものか？ |
| 静岡 | (伝)鎌田 | — | — | 7.3 | 古墳時代 | |
| | 元宮川神明原遺跡 | 祭祀 | — | 4.4 | 後期 | |
| | 姫宮遺跡 | 祭祀 | 祭祀場 | — | 中期 | |
| 滋賀 | 高溝遺跡 | 集落・祭祀 | 大溝 | 3.5～3.65 | 前期 | |
| 大阪 | 久宝寺遺跡 | 集落 | 竪穴住居 | 6.7 | 前期 | |
| 兵庫 | 下坂部遺跡 | 集落 | 遺物包含層 | 欠損 3.8 | 前期 | |
| 和歌山 | 不明 | — | — | 6.0 | 古墳時代 | (伝)熊野那智大社 |
| 岡山 | 津寺遺跡 | 集落 | 竪穴住居 | 5.9 | 前期 | |
| | 津寺遺跡 | 集落 | 土壙 | 6.5 | 前期 | |
| | 備前高島遺跡 | 祭祀 | 岩盤山山頂石群間 | 欠 | 後期 | |
| 香川 | 居石遺跡 | 祭祀 | 河川底 | 3.55 | 前期 | |
| 愛媛 | 鷹取山西方尾根 | — | — | 欠損 5.9 | 古墳時代 | |
| | 大木遺跡 | 祭祀 | 遺物包含層 | 4.0 | 後期 | |
| | 火内遺跡 | 集落 | — | 欠損 5.3 | 前期～中期 | |
| 熊本 | (伝)菊池・阿蘇郡内 | — | — | 欠損 5.3 | — | |
| 宮崎 | 不明 | — | — | 18.2 | — | (伝)岩戸神社 |

第4表 重圏文鏡・珠文鏡・素文鏡の県別出土数 (古墳時代前期から後期)

| 県 | 重圏文鏡 | 珠文鏡 | 素文鏡(註1) | 計 | 県 | 重圏文鏡 | 珠文鏡 | 素文鏡(註1) | 計 |
|-----|------|-----|---------|----|--------|-------|-----|---------|-----|
| 宮城 | 1 | 0 | 0 | 1 | 大阪 | 3 | 10 | 2 | 15 |
| 福島 | 0 | 5 | 0 | 5 | 兵庫(註2) | 4(註3) | 20 | 8 | 32 |
| 茨城 | 1 | 3 | 0 | 4 | 奈良 | 0 | 9 | 3 | 12 |
| 栃木 | 2 | 3 | 1 | 6 | 和歌山 | 1 | 1 | 9(註4) | 11 |
| 群馬 | 3 | 10 | 0 | 13 | 鳥取 | 0 | 11 | 10 | 21 |
| 埼玉 | 0 | 6 | 0 | 6 | 島根 | 0 | 5 | 1 | 6 |
| 千葉 | 6 | 10 | 3 | 19 | 岡山 | 4 | 11 | 2 | 17 |
| 東京 | 1 | 2 | 2 | 5 | 広島 | 2 | 16 | 2 | 20 |
| 神奈川 | 2 | 4 | 1(鉄) | 7 | 山口 | 0 | 0 | 1 | 1 |
| 新潟 | 0 | 1 | 0 | 1 | 徳島 | 1 | 3 | 0 | 4 |
| 石川 | 1 | 3 | 0 | 4 | 香川 | 2 | 4 | 3 | 9 |
| 福井 | 0 | 3 | 1 | 4 | 愛媛 | 6 | 5 | 1 | 12 |
| 山梨 | 0 | 2 | 0 | 2 | 福岡 | 2 | 29 | 3 | 34 |
| 長野 | 1 | 17 | 5 | 22 | 佐賀 | 1 | 10 | 3 | 14 |
| 岐阜 | 2 | 8 | 2 | 12 | 長崎 | 0 | 2 | 1 | 3 |
| 静岡 | 5 | 17 | 12 | 34 | 熊本 | 2 | 6 | 2 | 10 |
| 愛知 | 1 | 5 | 0 | 6 | 大分 | 1 | 5 | 0 | 6 |
| 三重 | 3 | 5 | 1 | 9 | 宮崎 | 1 | 4 | 1 | 6 |
| 滋賀 | 1 | 2 | 6 | 9 | 鹿児島 | 0 | 0 | 1 | 1 |
| 京都 | 1 | 3 | 0 | 4 | 合計 | 61 | 260 | 87 | 408 |

- 註 1 素文鏡は面径10cm以内のものとした。
 2 参考文献はすべて文献1によるが、兵庫については文献6の数も加えた。
 3 高倉洋彰氏分類の櫛歯文鏡は含まれていない。
 4 四鈴素文鏡5面は含まれていない。

第5表 小形仿製鏡類のセット関係 (古墳時代前期から後期)

| 県 | 遺跡・墳墓名 | 出土遺構 | 時期 | セット関係(註1) | | | | | | | | |
|-----|---------|-----------|-------|-----------|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 重 | 珠 | 素 | 獸 | 振 | 内 | 乳 | 他 | |
| 山形 | お花山古墳群 | 円墳×2 | 後期 | | | | ① | ① | | | | |
| 栃木 | 茂原古墳群 | 前方後円墳×2 | 前期 | ① | | ① | | | | | | |
| 埼玉 | 入西石塚古墳 | 前方後円墳 | 後期 | | ① | | | | | | ① | |
| 千葉 | 大竹古墳群 | 円墳+竪穴住居 | 前期・中期 | ① | ① | | | | | | | |
| | 新皇塚古墳 | 前方後方墳 | 前期 | | ① | | | | | ① | | |
| | 草刈遺跡 | 円墳+竪穴住居×7 | 前期 | ① | ③ | ① | ① | | | | | ② |
| | 下方丸塚古墳 | 円墳 | 前期 | | | | ① | ① | ① | | | ① |
| | 島戸境1号墳 | 円墳 | 前期 | | ① | | | ② | ① | | | |
| 東京 | 伊興遺跡 | 表面採集(祭祀) | 前期~中期 | ① | ① | ① | | ① | | | | |
| 神奈川 | 加瀬白山古墳 | 前方後円墳 | 前期 | | ① | | | ① | | | | |
| | 勝坂祭祀遺跡 | (祭祀) | 古墳時代 | | ① | ① | | | | | | |
| 新潟 | 飯綱山10号墳 | 円墳 | 中期 | | ① | | | | | | ② | ② |

| 県 | 遺跡・墳墓名 | 出土遺構 | 時 期 | セット関係(註1) | | | | | | | | |
|-----|---------------------|--------------|-------|-----------|---|---|---|---|---|---|---|-----------|
| | | | | 重 | 珠 | 素 | 獸 | 振 | 内 | 乳 | 他 | |
| 石 川 | 和田山 5 号墳 | 前方後円墳 | 中期 | | ① | | | | | | ① | ① |
| 長 野 | 川柳將軍塚古墳 | 前方後円墳 | 前期 | | ① | | ① | ① | ③ | | ② | |
| | 飯綱社古墳 | 円墳 | 中期 | | | ② | | | | | | |
| | 八幡宮古墳 | 円墳 | 中期 | | | | | | | | | ① |
| | 篠ノ井遺跡群 | 木棺墓×2 + 竪穴住居 | 前期 | ① | ① | | ① | | | | | |
| | 石川条里遺跡 | (祭祀) | 前期 | | | | | | ① | | | |
| | 松節(伊勢宮)遺跡 | 竪穴住居 | 中期 | | | | | | ① | | | |
| | 上記6遺跡 篠ノ井塩崎・石川地域 | 集落・墳墓・祭祀合計 | 前期～中期 | ① | ② | ② | ② | ① | ⑤ | | ② | ① |
| 岐 阜 | 前山古墳 | 円墳 | 前期 | | ② | | ① | ① | | | | |
| 静 岡 | 女池ヶ谷古墳群 | 円墳×2 | 中期 | ① | ② | | | | | | | |
| | 元宮川神明原遺跡 | (祭祀) | 後期 | ① | ① | ① | | | | | | |
| | 洗田遺跡 | 遺物包含層 | 古墳時代 | | ① | ① | | | | | | |
| 三 重 | 善応寺山古墳群 | (古墳) | 古墳時代 | ① | | | ② | | | | | |
| | 向山古墳 | 前方後方墳 | 前期 | ① | | | ① | ① | | | | ② |
| | 八重田 8 号墳 | 円墳 | 中期 | ① | | | | ① | | | | |
| 滋 賀 | 高溝遺跡 | 大溝 | 前期 | ① | | ① | | | | | | |
| 大 阪 | 御旅山古墳 | 前方後円墳 | 前期 | ① | ① | | | | ⑭ | | | ⑥ |
| | 経塚古墳 | 前方後円墳 | 中期 | | ② | | ③ | | | | | |
| 兵 庫 | 敷地大塚古墳 | 円墳 | 中期 | | ② | | ① | ① | ① | | | ② |
| | 藤江別所遺跡 | 井泉 | 前期 | ② | ② | ② | | | | | | (註2) ③ |
| 和歌山 | 大谷古墳 | 前方後円墳 | 中期 | | | ⑨ | | | | | | (註3) ⑤ |
| 奈 良 | 新沢48号墳 | 方墳 | 前期 | | ② | | ① | ① | | | | |
| 鳥 取 | 長瀬高浜遺跡 | (祭祀) | 古墳時代 | | | ⑩ | | ① | | | | ③ |
| 岡 山 | 一宮天神山 2 号墳 | 前方後円墳 | 前期 | ① | | | ① | ① | | | | |
| 香 川 | 居石遺跡 | 河川底(祭祀) | 前期 | ① | ① | ① | | | | | | |
| 福 岡 | 鋤崎古墳 | 前方後円墳 | 中期 | | ① | | | ① | ① | | | ② |
| 佐 賀 | 追頭古墳群 | (古墳) | 中期 | | ② | ① | | | ① | | | |
| 熊 本 | 鞍掛塚古墳 | 円墳 | 古墳時代 | | ② | | ① | | | | ① | |

- 註 1 すべて文献1・6による。
 2 櫛齒文鏡3面は、その他に入れた。
 3 四鈴素文鏡5面は、その他に入れた。

以上 第1表～第5表 (文献2より)

がわかる。そしてその使用あるいは出土年代は4世紀後半から6世紀代が主流となり使用年代には幅があるものの、篠ノ井遺跡群での竪穴住居跡 SB7250 出土重圈文鏡・木棺墓 SM7006 出土獸形鏡・木棺墓 SM7016 出土珠文鏡や全国で出土している小形鏡の紐や鏡面の摩耗・摩滅状態を考えれば、かなり使い込まれたか、長期間にわたり使用されていたこ

とが考えられ、大和政権が国づくりのための基盤整備を進めるにあたり、4世紀後半の一時期に各地域で祭祀行為を担った中小在地豪族層へ配布したものと考えられる。そしてその後それぞれの中小在地豪族層は武人としても成長することとなるが、その結果これらの鏡を祭祀行為に使用し、また古墳の副葬品として用いた地域は、中期以降の馬具の出土数が多い地域と重なる結果となる。このことから結果論ではなく大和政権が押さえておかねばならない重要な軍事拠点の中小在地豪族層に4世紀後半という早い段階から分け与えたものであったと考えられる。大和政権は4世紀代の早い段階から三角縁神獸鏡・画文帯神獸鏡・方格規矩四神鏡などの大形鏡を配布する豪族層と素文鏡や重圈文鏡あるいは珠文鏡などの小形鏡を配布する中小在地豪族層の差別化をはかり、身分の序列のみで配布したのではなく、将来的な大和政権での職務分担を明確にする意味においても活用したものと考える。また宝器としての大形鏡とは異なり、小形鏡は中小在地豪族層個人、あるいはムラ全体を守る‘儀鏡’として重宝したとも考えられる。

長野市川柳將軍塚古墳に埋葬された在地豪族は全国的にも類をみないほど方格規矩四神鏡・船載内行花文鏡ほか小形鏡を多く保有したようである。この在地豪族を頂点に治められた篠ノ井塩崎・石川地域には、豪族を頂点にピラミッド形のムラや地域構造があったと考えられるが、川柳將軍塚古墳へ埋葬された豪族は保有した多くの小形鏡を地域やムラの有力者、あるいは職務分担された実力者に分け与えられたと考えられ、篠ノ井遺跡群の木棺墓に埋葬された人々は、生前には祭祀行為に用いたかも知れないが、大切な鏡として自信の埋葬に際し副葬されたものであったと考えられる。

註

- 1 近江町教育委員会の宮崎幹也氏にご教示いただいた。
- 2 高松市教育委員会の山元敏裕氏に多くのご教示をいただいた。
- 3 高倉洋彰氏は、文献5の中で重圈文鏡を、幅広平縁+直行櫛歯文帯+重圈文帯（2～4の円圈）のものを重圈文鏡とされ、櫛歯文帯+円圈（1重）のものは櫛歯文鏡とされている。討論では居石遺跡・藤江別所遺跡記載以外では、これらの鏡は一括して扱った。

参考文献

- 1 白石太一郎 他「共同研究 日本出土鏡データ集成」2『国立歴史民俗博物館』第56集 国立歴史民俗博物館 1994年
- 2 西山克己「篠ノ井遺跡群出土の小形倣製鏡の一考察」『篠ノ井遺跡群』（財）長野県埋蔵文化財センター 他 1997年
- 3 小林三郎「古墳時代初期倣製鏡の一側面－重圈文鏡と珠文鏡－」『駿台史学』第46号 駿台史学会 1979年
- 4 山元敏裕 他『居石遺跡』高松市教育委員会 1995年
- 5 樋口隆康「倣製獸形鏡」『古鏡』新潮社 1979年
- 6 明石市文化博物館「発掘された明石の歴史展－藤江別所遺跡－」1994年
- 7 稲原昭嘉「藤江別所遺跡」『日本考古学協会 1996年度三重大会シンポジウム1 水辺の祭祀』日本考古学協会三重大会実行委員会 1996年

- 8 高倉洋彰「弥生時代小形仿製鏡について（承前）」『考古学雑誌』第70巻3号 日本考古学会 1985年
- 9 高倉洋彰「弥生時代小形仿製鏡の儀鏡化について」『居石遺跡』高松市教育委員会 1995年
- 10 西山克己 他『篠ノ井遺跡群』（財）長野県埋蔵文化財センター 他 1997年
- 11 鶴田典昭 他『川田条里遺跡』（財）長野県埋蔵文化財センター 他 2000年

シナノの積石塚古墳と合掌形石室

1 はじめに

積石塚古墳の研究については、明治時代以来おこなわれ、石で築かれた特殊な古墳として、ヨーロッパなどでの類例から、‘ケールン’(積石塚)と呼ばれ、その研究が進められた。

そしてそれは、「大陸起源説」あるいは「環境自生説」とする2つの大きな説が論じられ、今日にいたっている。いずれにせよ、どうして石積みなのかとする疑問は古くて新しいテーマである。

また合掌形石室の研究は大正時代以来おこなわれ、積石塚古墳同様、特殊な石室として位置づけられた。

昭和に入り、朝鮮半島における百濟の古墳での類例が紹介され、これらの類例と関連づけられる研究が進められたが、平成に入り大室古墳群などの調査成果から新たな視点での研究が進められている。

2 積石塚古墳

①日本における研究史

日本国内におけるいわゆる古墳といわれるものの多くは土でマウンドが築かれ、さらには築かれたマウンドに葺き石が用いられたものが一般的である。しかし九州地方から関東地方にいたる地域において、それぞれ地域性を持ちながら石でマウンドを築く古墳がみられる。これが‘石塚’・‘石築墳’・‘積石塚’などと呼ばれたいわゆるここでいう‘積石塚古墳’である。

ここで改めて『積石塚』とはどのようなものであるかを振り返れば、「土を盛って墳形を作った土塚に対して、石をつみあげて墳形を作ったもの」(文献1)や、「土壌をもって棺槨を覆い墳丘(Tumulus)を作る代わりに、礫石を積み上げたもの」(文献2)、あるいは「墳丘を礎石を用いて盛った塚・古墳の総称」(文献3)とある。

各地域における定型化した前方後円墳出現以前の弥生時代墳墓の中に、積石を施したものが見られたり、また中・近世の塚の中にも積石を施したものが見られることから、前回の論考(文献4・5)や当論ではあえて『積石塚古墳』と呼ぶこととした。

積石塚古墳の研究史を概略的に記すと以下の通りである。

1887(明治20)年に佐藤勇太郎が香川県に積石塚古墳が存在することに触れたことが(文献6)、積石塚古墳研究の出発となる。

1900(明治33)年には坪井正五郎氏がヨーロッパ各地のケールン(積石塚)を参考にしながら世界の‘積石塚’についてふれ、その中で日本の‘積石塚’についても紹介している。

その中で、日本における積石塚は讃岐・阿波・相模に限られる点に注意すべきと述べ、その形状を饅頭形・摺鉢形・瓢形・両頭瓢形などに分類している（文献7）。

1916（大正6）年、大正期に入り中国大陸・朝鮮半島での資料が紹介され始める中、笠井新也氏はこれまでの研究を整理し、石塚とは土をもって築く古墳に対し、石をもって築くものであるとしたが、順石塚・半石塚もあると指摘し、石塚築造の方法については、任意に不規則に積み上げた積石塚と、表面を石垣状に築いた築石塚の二種類があることを述べ、阿波や摂津の多くは積石塚で、また讃岐での石清尾山のほとんどは築石塚であろうとした。今でいう積石塚古墳への名称として積石塚と築石塚の呼び分けが正しいか否かは別として、同じ石によって築造されたものに、二種類の築造方法があることを指摘した意義は大きい（文献8）。

1923（大正12）年、唐沢貞次郎氏・岩崎長思氏によって上高井郡鎧塚古墳について記述し、この中で「石塚のよき標本」、さらには「之を保有して研究の資料たらしむるを可とす」とした（文献9）。

1924（大正13）年、矢沢頼道氏は現在の長野市松代町にある皆神山の東北側山麓に十数カ所あるいはさらに多くの積石塚古墳が存在していたこと、また長野県内の積石塚古墳に、今で言ういわゆる合掌形石室を埋葬施設として用いていることを紹介している（文献10）。

同年、鳥居龍藏氏は明治24年に調査された茅野市大塚古墳について、地元郷土史家によって残された資料を紹介し、発掘前の記憶図から「所謂積石塚に属する古墳であつたらしい」と述べている（文献11）。

1925（大正14）年、岩崎長思氏は、積石塚古墳として土石混合墳の金鎧山古墳を紹介している。またこの中でニカゴ塚古墳についても紹介している（文献12）。

1926（大正15）年、森本六爾氏により金鎧山古墳の報告書が刊行され、この中で土石混合として石を用いたのは、石室の天井が屋根形に組まれているため、堅牢とするためのものであるとし、多分に環境の影響によるものでもあるとしている。また周辺の合掌形石室についても示している（文献13）。

このように大正期に入ると長野県内における積石塚古墳や、さらには合掌形石室の研究が活発化してくる。

昭和に入るとさらに国内外の資料が蓄積され、積石塚古墳の起源や系譜をさぐる調査や論考がおこなわれる。

1928（昭和3）年、岩崎長思氏は和栗古墳について報告をおこなっている。調査当時すでに道路敷石搬出のために墳形はまったく失われていたが、土や輝石安山岩の破片を用いた円墳であると報告しているが（文献14）、小林秀夫氏はこの記載や古墳の実地調査から、積石塚古墳であろうとした。長野県内における一番北に位置する積石塚古墳となる（文献15）。

1929（昭和4）年、松代町史では、積石塚古墳について、石塊が多く産出しない所にも

構築されていることを指摘し、環境自生説には否定的な所見を述べている。また盛土古墳と積石塚古墳の間には民族性の異なるものがあるのではないかとし、積石塚古墳は高句麗からの渡来人が松代地方に移住したことによって遺されたものであろうとした（文献16）。

1933（昭和8）年に出された「讃岐高松石清尾山古墳の研究」で（文献17）、梅原末治氏は、豊富な前期の副葬品をもつ猫塚などを調査し、積石塚古墳の年代が古く遡ることを確認し、また積石塚古墳の出現の意義について、朝鮮半島との連鎖はさておき、その概念的思想が影響したとしても、石塚の築造を古式古墳造営の風習が盛行していた段階のものとする以上、積石塚古墳出現の主因を石が多く産出する地理的条件にあると考えた。

同年、笠井新也氏は積石塚古墳の出現の要因については、梅原氏の地理的条件に対して、その主因を思想的背景とし、地理的条件を従因とした（文献18）。

同年、後藤守一氏は同年の笠井氏の論考へコメントする中で、盛土古墳と積石塚古墳は別の存在と位置づけ、その解釈の仕方について、「これが時代の相違か、部族の相違か、地方色かといふ風に考えて行くところに問題はあらうと思ふ。」と述べている。また、「積石塚は其の本流をなすと考えられる西日本、殊に北九州に於いて周囲の地形と合致してゐるが、末流をなす東日本では、決して周囲の地形と合致するものではない。関東平野にあるものの如きは、周囲見渡す限りローム層の中に態々これを築いてゐる。そして其の積石塚と併行共存して積土塚が行はれてゐるといふ事が考慮さるべきものではあるまいか。」とした（文献19）。

1938（昭和13）年、栗岩英治は日本後記の記載から、信濃への高麗系渡来人と積石塚古墳の関連を想定し、その根拠として積石塚古墳が多く存在する埴科郡から上高井郡の地形が渡来人達の祖国の地形に類似しているとした。また大室古墳群について、1935（昭和10）年に同村保存会によって調査された資料も示している（文献20）。

1939（昭和14）年、藤森栄一氏は茅野市大塚古墳について、古墳の立地に近い河原に豊富にある石を周辺古墳同様に用いたものであるとしながらも、大塚古墳および周辺古墳は帰化人（渡来人）かその文化の下にいる一族の墓であらうとした（文献21）。

1947（昭和22）年、大場盤雄氏は森本六爾氏や梅原末治氏の環境説に対し、「森本氏の説く屋根形天井石室と積石とが、不可分的関係を有するとするならば、かかる石室を有たざる積石塚に対しての説明を如何に説くべきか、前期多数の積石塚は、その数数百千に達してゐるが、屋根形天井石室を有するものはその中の一小部に過ぎない。故に石室の補強策とする積石の発生は当然撤回せられるべきであらうと思ふ。次ぎに梅原博士の所謂地理的条件論に就いては、石塊の存在しない地方に積石塚を造営すべからざるは、常識論として異議の無い所であるが、さりとて積石塚の群集地に、同時に土塚が来在して居り、石材が得らるる地方では積石塚の存在しない所があり、又同じ信濃国内でも特に奥信のみに限って積石塚の分布すること等は、単なる地理的条件のみでは説き難き様に思はれる。」（文献22）と今後の積石塚古墳研究の方向性を示す論考を示した。

この論考以降、長野県内の積石塚古墳に視点をあてたが活発化し、特に論考が増すこと

となる。

1951（昭和26）年、大場磐雄氏は積石塚古墳や合掌形石室について、かつて調査した東筑摩郡坂井村安坂將軍塚古墳群の調査や新撰姓氏録などの記載から、高句麗系渡来氏族との関連を示した。また東筑摩郡の積石塚古墳については、善光寺平の積石塚古墳の延長ととらえた（文献23）。

1952（昭和27）年、栗林紀道氏によって大室古墳群における第四回基礎調査の結果として大室古墳群畧図が作成した。この中で、積石塚古墳について「石塊のみで築かれた、いわゆる積石塚」、「内部は土で、上部を石塊で覆ったもの」、「内部は石で、表面を土で覆ったもの」、「石塊に土を混ぜたもの」と4分類した。この分類は大室古墳群のみならず、これ以降の長野県内積石塚古墳研究の一指針となるが、積石塚古墳の認識を広範囲なものとしてしまう結果となり、善光寺平の古墳実態を極端なイメージに作りあげてしまうこととなった（文献24）。

1953（昭和28）年には、水野清一氏・樋口隆康氏・岡崎敬氏による対馬での調査の中で、積石塚古墳はその地理的位置関係から朝鮮半島における積石塚の影響もあったであろうとしながらも、その主因は地理的条件とする環境説を説き、香川県の石清尾山古墳群での積石塚古墳を代表例として、西日本の積石塚古墳は自然地質条件下に成立する場合が多いとした（文献25）。

1955（昭和30）年、大塚初重氏は「大室古墳群の最大の特殊性は積石塚と所謂合掌形石室の存在であるが、この両者が大陸墓制の再現であるか、自然発生であるかの問題は、この大室古墳群の性格の一端をさし示すであろう。各地発見の積石塚すべてが大陸のそれとの連繫を示すものとは思わないが、後裔のそれは、構造上、地域的特殊性の上からも大陸墓制との結びつきを肯定せしめるようである」とした（文献26）。

1956（昭和31）年、信濃資料（信濃考古総覧）が刊行され、長野県内における古墳の集成もおこなわれた。積石塚古墳の分類については、昭和27年の栗林紀道氏の分類が踏襲している。この中で、大室239号墳・同220号墳・安坂將軍塚古墳群・麻績塚古墳について方形積石塚古墳とした。あわせて積石塚古墳の分布図が示された（文献27）。

1959（昭和34）年には、永峯光一氏、亀井正道氏は大正12年に紹介された鎧塚古墳を調査した。その調査はトレンチによるものであったが、1号墳・2号墳ともに盗掘を受けていたようである。そして1号墳・2号墳ともに多少の変形はしているものの原形に近い形状を残すとした。さらに鎧塚1号墳出土の鏡片や水字貝製釧・碧玉製釧などを検討し、その年代を5世紀代に遡ると位置づけ、信濃における積石塚古墳の初現とした。また鎧塚2号墳については、獸首面金銅製帯金具が百済公州宋山里2号墳及び5号墳や高句麗の一古墳から出土していることをあげ、交流を示す有力な資料であろうと位置づけた。そして1号墳の被葬者を「軍馬補給の必要に迫られた大和朝廷が、飼馬の法に長じた帰化人を信濃に配置し、牧場の開発や馬の飼育にあたらせたのではないであろうかと想像するのである。そのような初期集団の首長の墓」とした（文献28）。

1961（昭和36）年、尾崎喜左雄氏は、葺石の意義や石室及び石室的構造物の壁外側の裏込め石を置くべきものであったと考え、「横穴式石室ではこの裏込め石の詰め込まれた部分の外側に封土が積まれるのであるが、裏込め石が雑然と詰め込まれていて、それが直接封土に接しているものと、裏込め石の外側に石が積み上げられて、石室を囲んで半卵形に、あたかも積み上げられた葺石状に整えられたものがある。」と指摘し、横穴式石室の構築方法から積石塚古墳構造についての視点を示した。そして「有瀬2号墳において、墳丘の内部に土を多少使用する傾向が現れたものと解し得よう。これがいずれかの継受であるかは長野県の積石塚、殊にその横穴式石室との間に微妙な関係が存在しているのではなかろうか。」とした（文献29）。

1962（昭和37）年、大塚初重氏は大室古墳群4支群中の尾根上の2支群（現在の北山支群、金井山支群）に盛土古墳が主体となり、この両尾根の中間に位置する谷頭面に深く入り込んだ2支群（現在の大室谷支群・霞城支群、北谷支群）に積石塚古墳が集中することは、4支群が形成された歴史的過程に極めて注意すべき問題が含まれていることを指摘し、また大室古墳群に認められる考古学上の問題点、（1）積石塚古墳の分布と生因と合掌形石室の考古学的究明。（2）大室古墳群形成の歴史的背景。（3）方法論に立脚した古墳群の分析。（4）監牧との関連を考古学的に推論。（5）古墳群の実態を十分に把握。と5項目をあげた（文献30）。

1964（昭和39）年、斉藤忠氏は西日本の積石塚古墳を「地理的環境ということが、積石塚をつくらしめた第一義であり、最も大きい要因とみるべきであろう。」また東日本については、「一様に円墳であり、時期的には後期、とくに終末期の姿相をし、六世紀から八世紀の頃までの時期におかれる。－中略－かなり無理をして石材を運び築いた場合のものも見受けられる。」この場合、寒冷地にあるものが多く、凍りついた土を積みあげるには石を積み上げた方がやりやすいのではないかとした。

また、政府の方針によって大陸からの移住者を定着させ、移住した渡来人が、郷土の習俗の一墓制を採用したとしても不自然ではないとしながらも、高句麗からの移住者は、ピョンヤン（平壤）遷都以降のことであり、この頃には積石塚よりはむしろ盛土墳を多くつくる風習となり、「恐らく忘却したであろう積石塚の習俗を特に採用したとするには、よほどたしかかな傍証資料をもとめなければならないのである。」とした（文献31）。

同年、1942（昭和17）年に一志茂樹氏が、1944（昭和19）年に大場磐雄氏が調査した長野県東筑摩郡坂北村安坂將軍塚古墳群について、坂井村の主催として大場磐雄氏・原嘉藤氏・寺村光晴氏・桐原健氏は再調査し、方形積石塚古墳の存在や日本後紀などの信濃への渡来人記載との検討から高句麗系渡来人との関与を示した。また積石塚古墳の内部施設について、竪穴式石室・横穴式石室・組合式棺・合掌形石室の4種類があることを示した（文献32）。

1966（昭和41）年、大場磐雄氏は本郷村（現在の松本市）浅間古墳の調査に関連して、松本市域の積石塚古墳の集成と日本後紀による信濃への渡来人記載との検討から、当地域

の積石塚古墳も高句麗系渡来人との関わりで論じた（文献 33）。

1968（昭和 43）年、大塚初重氏・小林三郎氏・下平秀夫氏らによって長野市長原古墳群の調査成果が示された。この中で大塚初重氏は、ニカゴ塚古墳が古墳群内の高所に位置し、さらに積石塚古墳への合掌形石室であったことから、古墳群中他の古墳例とは異質な様相として注意しなければならないとし、古墳群中他の初期的なものに合掌形石室が採用されていないことから、渡来人との関係を考えた。また長原古墳群や吉古墳群での合掌形石室の在り方から、地域集団内の帰化（渡来）族と、非帰化（渡来）族の構成を示している可能性を指摘した。また渡来人との関係については、馬匹生産から渡来人関与説と関連させ、さらに合掌形石室を採用していることから百済系渡来人とむすびつけた。さらに積石塚古墳の性格について、「積石塚の築成が、山石や河原石の豊富な地理的な条件も原因の一端になっているとすれば、積土か積石かの差異のみで、特殊な性格の古墳と断定するのは早計と思われる」と積石塚古墳研究の原点を示した（文献 34）。

1969（昭和 44）年、大塚初重氏は昭和 26 年に後藤守一氏が中心となって明治大学考古学研究室がおこなった大室古墳群の調査成果（墳丘・石室の実測調査 17 基、内発掘調査 2 基）を発表した。この中で大室古墳群の古墳個々の立地や特徴から古墳群を北から北山支群・大室谷支群・霞城支群・北谷支群・金井山支群の 5 支群に分け、大塚氏の覚書をもとに成果をまとめ、古墳群の年代論や性格にもふれた。大室古墳群研究における記念すべき学術調査報告書である（文献 35）。

同年、長野県考古学会誌上で、「積石塚をめぐる諸問題」が特集された。

その中で、斉藤忠氏は積石塚古墳の定義について、「墳丘は土ではなく石－山石・海岸の石・河原石などの自然の石塊、あるいは山石などを打ち砕いたもの、または切石をもって築きあげた古墳」と考えられ、また積石塚古墳の年代については、石清尾山の古墳群を 4 世紀代とされ、長野の鎧塚 1 号墳や安坂將軍塚 1 号墳を 5 世紀代と考えた。そして長野の地には渡来人が早くから足場を築き、8 世紀以降の文献に見られる記載については、新しく後続してきた渡来人の記載で、考古学から文献内容を逆に批判することのできるものではないかとした。

また大場盤雄氏は、積石塚古墳の定義について、藤田亮策氏や梅原末治氏の論をあげ、石清尾山のような大形の段築をもつものを石塚、長野県下のような比較的小さな礫で築いたものは積石塚というべきであろうか、と定義について問題提示している。また年代については、岩清尾山や鎧塚 1 号墳の年代には異論はないものの、対馬や白岳、宮崎県の櫛遺跡などをあげ、あたらしい時期の積石塚との関係については問題としながらも、積石塚とするものの上限については弥生時代まで遡るのではないかとしている。そして岩清尾山などの例をみても渡来人と結びつけるよりは、日本本来の盛土墳と結びつけた方が妥当と考えているが、安坂將軍塚 1 号墳については、高句麗人と結びつきたい気持が捨てきれないとした。

三上次男氏は、「高句麗形の石築墳はもっと南の百済地方の初期の墓制として現れるこ

とも注意する必要があります－中略－日本で積石塚的なものを大陸の影響と考えるならば、高句麗的なものばかりではなく、百済や新羅における積石塚的要素というものも考える必要があるのではないか。」とした。

また森浩一氏は、「実は葺石は積石塚を造ろうという意欲の表れではないかと思うのですよ。」と類例を示しながら広義での積石塚古墳論を示した（文献36）。

同年、宮坂光昭氏は鳥居龍蔵氏や藤森栄一氏が報告した茅野市大塚古墳について、遺構・遺物についてさらに詳細にまとめ、墳形は河原石を用いた方墳であることを示した（文献37）。

1970（昭和45）年、米山一政氏・倉田芳郎氏らによって県農業試験場等建設に伴う大室古墳群北谷支群の調査報告書が刊行された。この調査では用地内32基の内21基が現状保存され、11基が記録保存される結果となった（文献38）。

1971（昭和46）年、桐原健氏は長野県下の積石塚古墳を総括する中で、積石塚古墳は文献面からも、また合掌形石室や胴張り形の横穴式石室との関係から大陸的要素が濃厚とし、渡来人との関連を示した（文献39）。

1975（昭和50）年には、小林秀夫氏が墳丘の構造面から積石塚古墳について論考している。

この中で、栗林紀道氏が幅広い範囲まで積石塚古墳と分類したことをその後の長野県内の研究が踏襲した結果、「土石を混じえた古墳さえも積石塚ととらえられた結果、善光寺平は極めて特殊な古墳文化を持つ地域であると考えられるところとなったのである。」と指摘した。

そして、横穴式石室の調査例の増加から、「墳丘の築造状態にもわかに把握される機会が多くなって来たのである。これらの面から考えても善光寺平に広く行われている積石塚古墳の概念も再検討されるべき時期に来ているものと思われるのである。」とした。そして、長野市長原古墳群での調査例などから、構築方法からの積石塚古墳の検討がされていることから「何が積石塚古墳かという概念を明らかにしたうえでの問題であるが、前述してきたように、それは発掘調査によってさえ2通りのものが存在していると言えよう。また表面的な分布調査では、正確な積石塚古墳の存在は確認しえないことはその調査事例が明らかにしていることである。」と指摘した。

そして、墳丘構造から、

A型＝「安坂將軍塚古墳を標識とするものであった、長野県内の積石塚古墳のなかでは、比較的分布が広がっているものである。その立地は傾斜面または自然地形を利用してのもので、どこまでが墳丘であるか区分しにくい場合が多い。墳丘構造も特別な施設もなく、傾斜面に対して石垣状に積み上げて、斜面と平坦にして後、内部主体を築き、その上に傾斜面に合わせて礫石を盛り上げる。」

B型＝「比較的大きな10m以上の円墳で、最も多い。大室古墳群、長原古墳群、長野市松代王塚古墳群に構築されている古墳を標識とするものである。－略－」

C型 = 「これは 10 m 以内の小円墳で、高さも 1 m 前後といわれるように非常に小型である。上高井群雁田古墳群、長野市吉古墳群に構築されている古墳を標識として略す」

と 3 分類した。

さらに土石混合墳については、「横穴式石室の控え積みに行われている場合もあろうし、外表施設として葺石に行われる場合も考えられる。また墳丘をとりまく外護列石も礫石のあり方として考える必要があると思う。」とし、「土石混合墳というものが、善光寺平にのみ限定されて分布する特殊な古墳であるのか、また積石塚古墳、とりわけ B 型との関連の面も含めて、単なる墳丘構築の技術的なあり方の差であるのかを知ることは今後の大きな問題であると言えるのではなかろうか。」とした。

そしてこれまでの研究史をふまえる中で、その「起源論や高句麗文化との比較論は、善光寺平でのわずかな 10 数基ばかりの発掘調査事例や、先学の研究のトレースでは結論づけることができるものではありえない。」と、日本国内や朝鮮半島での調査資料の蓄積をふまえた今後の慎重な研究への方向性を示したものといえよう（文献 15）。

1980（昭和 55）年、坂詰秀一氏、亀井正道氏、杉山晋作氏、桐原健氏他によって積石塚の研究史や日本全国の地域相がまとめられた。この中で桐原氏は中部山岳地方（長野県・山梨県）の積石塚古墳についての集成や概要をまとめ、長野県の積石塚古墳については、考古学資料と文献資料との提携により論を進めている（文献 40）。

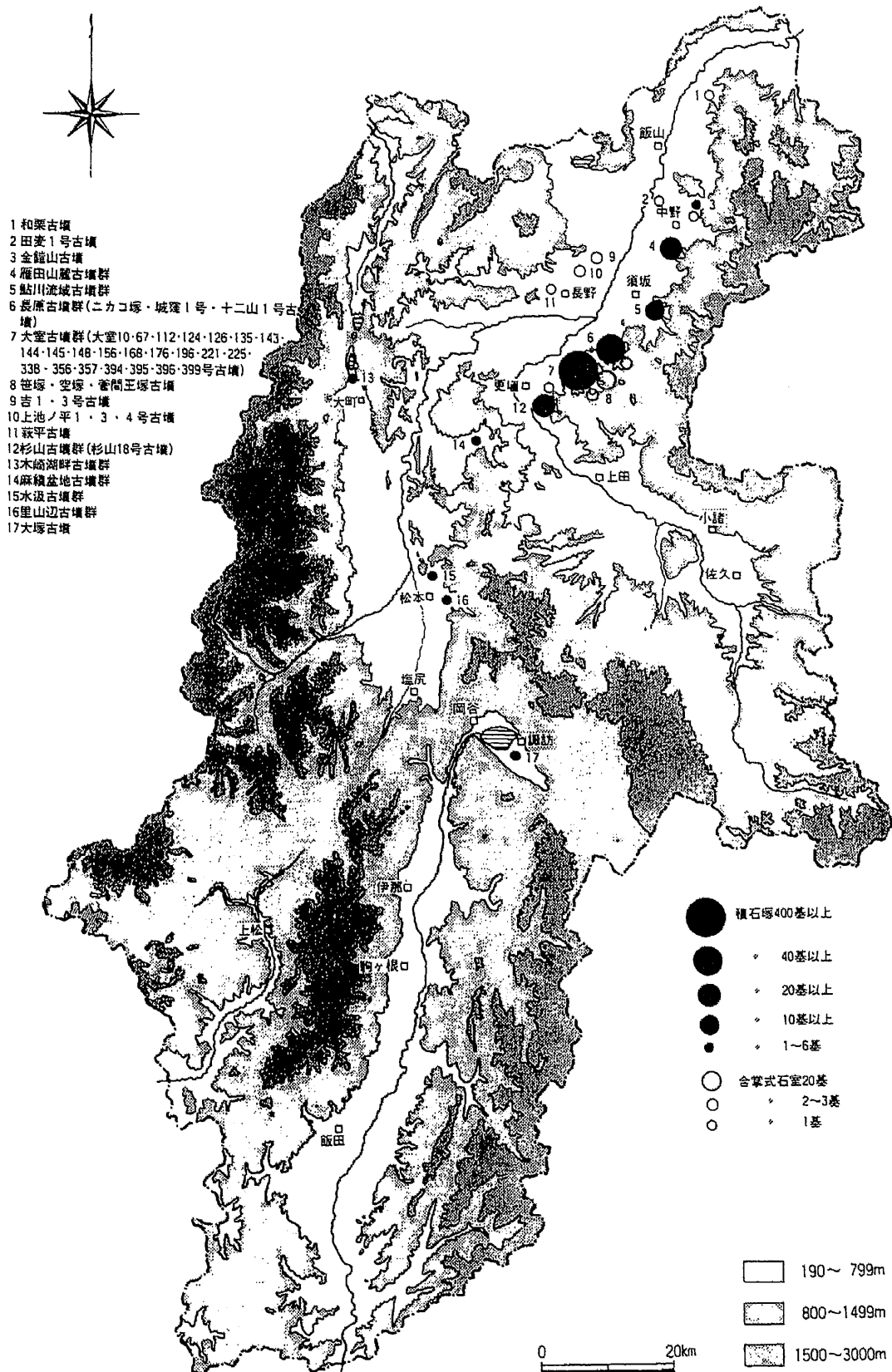
1981（昭和 56）年、倉田芳郎氏・中野宥氏・仲野泰裕氏らによって大室古墳群分布調査報告書が刊行された。戦後まもなく栗林紀道氏が作成した大室古墳群分布地図や遺跡地名表をもとに、測量による分布図の作成、未確認古墳の発見、台帳記載事項の点検の 3 項目を目的とした。またこの中で、中野氏は分布状況をまとめ、さらに仲野氏はこれまでの積石塚古墳に関わる研究史をまとめている（文献 41）。

1985（昭和 60）年、篠崎建一郎氏は新郷 1 号墳を代表とする積石塚古墳群である小熊山麓古墳群を紹介し、渡来人のものであるかについては決め手がないとした（文献 42）。

1987（昭和 62）年、西谷正氏は、大阪府柏原市茶臼塚古墳について、高句麗の積石塚古墳と共通性があり、さらにはソウルにある石村洞 4 号墳に近いのではないかとした（文献 43）。

1988（昭和 63）年、桐原健氏は長野県内の積石塚古墳の概要と分布を示した（文献 44）。

1989（平成元）年、桐原健氏は、全国的な視点から積石塚古墳についての研究史や資料を紹介し論を進めている。その中で、積石塚古墳研究の課題として、「時が流れ、地域が広がっていくにつれ、積石塚にも形骸化現象の起こり得ることは、ある程度予想されるところである。私は厳密な規程よりも、石を封ずる外観を呈してさえおれば、積石塚の範疇に入れてよいと考えている。したがって外表施設としての葺石をもっている前期・中期の大半の古墳は、当然に積石塚なのである。」と森浩一氏の論を踏襲し、積石塚古墳の規程を広い視野でおさえた。



積石塚古墳・合掌形石室の分布

第1図 長野県内の積石塚古墳と合掌形石室分布図 (文献44より)

また最後に、「積石塚研究は古墳研究の中では傍流である。概説書を開いた時、墳形や内部主体による分類があっても、墳丘の構築にもとづいての分類は、まずは記されていない。概説書中に積石塚の占める位置は、ないのである。加えて、積石塚の研究法は多分に“明治調”を引きずって来ている。科学的な古墳研究の洗礼を受けることなしに今まで来てしまった、という感がある。」とした（文献45）。

同年、宮下健司氏は坂井村安坂將軍塚古墳群について、朝鮮半島からの渡来人による墓とし、5世紀中頃から7世紀末まで、子孫によって継承されたものとした（文献46）。

1990（平成2）年、大塚初重氏は積石塚古墳について、すべてを同一視する必要はなく、すべての積石塚古墳を渡来人の墳墓とするには問題があると指摘した（文献47）。

1991（平成3）年、松本市教育委員会からこれまで段築をもつ方形の積石塚古墳と考えられていた松本市針塚古墳の調査速報が出された。今回の調査によって最初に土を盛り上げて基礎を築き、その上に厚く石を積んだ円形の積石塚古墳であることが確認された（文献48）。

1991（平成3）年、甲府市教育委員会他より「横根・桜井積石塚古墳群調査報告書」が刊行され、この中で宮澤公雄氏は調査成果の分析に加え、甲府盆地の積石塚古墳の分布状況とこれまでの研究成果を紹介した。この中で積石塚古墳である桜井B号墳がこれまでの研究から現状では5世紀代と断定しえないが、初現的な積石塚古墳であるとし、また横根・桜井積石塚古墳群においても、甲府盆地の石和町北縁部の古墳群同様、斜面に、積石塚古墳が広く分布し、前面の平坦地に土盛古墳が造られているとし、これは古墳が立地している周辺の環境に左右されているものであるとした。また積石塚古墳の被葬者像については、「甲斐における積石塚に関する資料から、被葬者渡来人説を積極的に肯定する材料は、現在のところ見あたらないというのが現状であると考え」とした（文献49）。

なお同様趣旨のものが平成4年にも発表されている（文献49）。

1991（平成3）年、鈴木直人氏は土石混合墳について、石を多く含む土を用いて造られた古墳の状態を指しているものであり、築造時の意識は土に重点を置いたものいであることから積石塚古墳から除外した。（文献50）

1992（平成4）年、大塚初重氏は大室古墳群に関わる調査・研究を通して、大室古墳群中の「金井山丘陵をはじめ、霞城や北山丘陵の尾根上に分布する古墳のほとんどは、墳丘が積土か一部土石混合の例である。大石・ムジナゴロー単位支群で、最初に出現した古墳のほとんどは土を混えない積石塚であり、しかも内部主体は合掌形石室であった。その築造年代は5世紀後半にまで遡ることが確実である。」とし、大室古墳群形成のあり方やその出現時期について論じている。

また「しかし山丘の傾斜面に土壌が全くないわけではなく、墳丘の築造に事欠くほどのことはなかったであろう。それにも拘わらず5世紀中葉以降の段階を迎えた時に墳丘を石積みとして、ほとんど土壌を混えずに合掌形石室を遺骸埋葬施設として採用した事実は、その大きな急激な墓制の変化に注意しないわけにはいかない。」とし、長年にわたる

調査結果を前提とした論を示した（文献 51）。

同年、さらに大塚初重氏はここ数年調査を続けている大室古墳群での調査結果を紹介し、大室古墳群での積石塚古墳の築造開始を、各单位支群において、合掌形石室をもつものとし、その年代を 5 世紀後半から 6 世紀初頭と位置づけた（文献 52）。

同年、笹沢浩氏は積石塚古墳や合掌形石室について、「中規模の前方後円墳等で代表されるように中小首長層の古墳とともに善光寺平各地に出現したことで、金鎧山古墳のように、前方後円墳などと同様に、のちの群集墳形成の核とはならなかったものと、大室谷大石単位支群や鎧塚 1 号墳のように核となった」ものがあることを指摘した（文献 53）。

1995（平成 7）年、山口明氏は善光寺平以外で初めての発見例となる、内部主体が合掌形石室の積石塚古墳である山形県南陽市松沢古墳群 1 号墳・2 号墳についての報告をおこなった。詳細については合掌形石室の研究史で紹介する（文献 54）。

1996（平成 8）年、筆者は善光寺平を中心とする長野県内の積石塚古墳について、これまでの日本国内や中国・韓国・北朝鮮での調査研究を紹介しつつ、長野県内の積石塚古墳について考察をおこなった。

墳丘の立地や形態から、

安坂型＝礫のみでの構築で方形を呈し、山の斜面および山麓に立地。

王塚型＝礫のみで構築され径 15 m 以上の円形あるいは不整形のもので、山の斜面および山麓に立地。

鎧塚型＝礫のみで構築され円形あるいは不整形のもので、扇状地あるいは平地に立地。

大室型＝礫のみで構築され径 15 m 以下の円形あるいは不整形のもので、高さも 2 m 程

大室古墳群（長野県長野市松代町大室）



| 支群 | 古墳数 | 確認数 | 谷部・扇状地 | 山腹・尾根 | 積石塚 | 合掌形石室 |
|-------|-----|-----|--------|-------|-----|-------|
| 北山支群 | 22 | 21 | 2 | 19 | 3 | 0 |
| 大室谷支群 | 241 | 224 | 192 | 32 | 176 | 27 |
| 龍城支群 | 16 | 13 | 0 | 13 | 5 | 0 |
| 北谷支群 | 208 | 179 | 162 | 17 | 138 | 12 |
| 金井山支群 | 18 | 17 | 0 | 17 | 2 | 0 |
| 合計 | 505 | 454 | 356 | 98 | 324 | 39 |

第 2 図 長野市大室古墳群（文献 138 より）

度以下のもので、山の斜面および山麓に立地。

針塚型＝円形で埋葬施設に関わる石やマウンドの裾石・内回りに石組みを土のマウンドとともに造り、そのマウンド全体を覆うように山石や河原石を多く積んだものと墳丘の型式分類をおこなった。

また長野県内の積石塚古墳は、大陸的な様相が多分にみられ、5世紀代には高句麗的なものが多く、6世紀以降には百済や新羅地域的なものが構築されているようであるとの推測を示した（文献4）。

同年、土屋積氏は長野市大星山古墳群の調査結果として、4号墳が5世紀初頭の方形積石塚古墳であることを報告している。この結果は須坂市鎧塚1号古墳や安坂將軍塚群1号古墳とともに積石塚古墳の初源的なものとなり、その評価が問われるものである（文献55）。

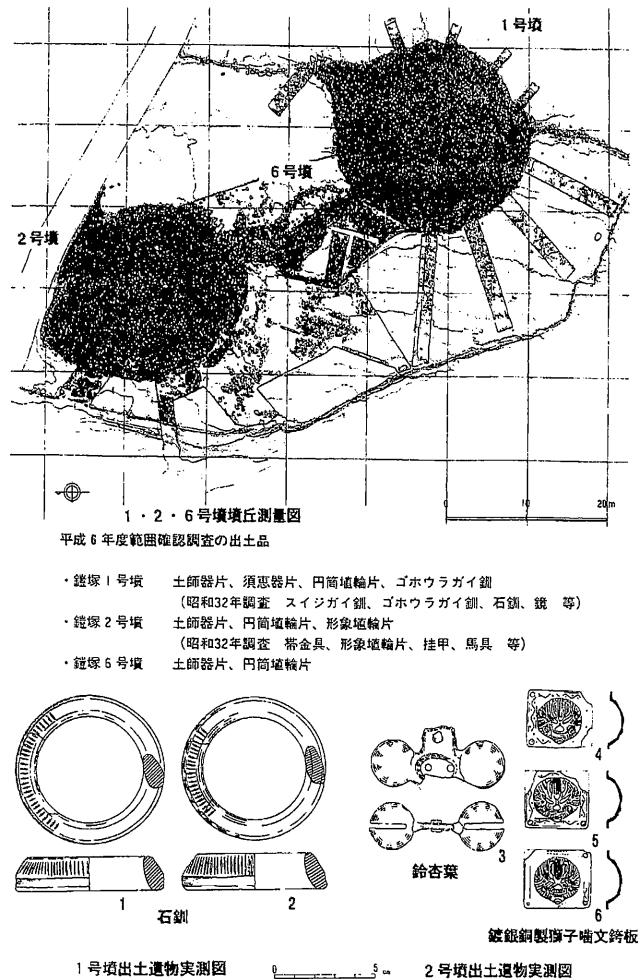
同年、土生田純之氏は積石塚古墳的と考えられる長野市地附山古墳群上池ノ平4・5号墳について、特に舶来の轡が埋納されていながらも主体部から須恵器が出土しなかった5号墳の事例などの分析から、必ずしも渡来人との関係のみで理解する必要はないとした（文献56）。

同年、静岡県浜北市内野二本ヶ谷積石塚古墳群の調査がおこなわれ、積石塚古墳は谷間に立地し河原石を積上げた直径10m前後の円墳で、5世紀後半から6世紀初頭に築かれたものとした（文献57）。

同年、群馬県高崎市剣崎長瀬西遺跡の調査がおこなわれ、5世紀後半から6世紀初頭に築造された方形の積石塚古墳等が確認された（文献58）。

1997（平成9）年、小林秀夫氏はこれまでの積石塚古墳研究の中で、栗林紀道氏が示した土石混合墳までも含めた広い意味での積石塚古墳の分布ではなく、純然たる石積による積石塚古墳の分布が千曲川東岸の中央部、須坂・若穂・松代（大室）地区の小河川の扇状地に限定的に分布するとした（文献59）。

同年、平成6年度に範囲確認調査が行われた長野県須坂市鎧塚1・



第3図 須坂市八丁鎧塚1号・2号・6号墳
（文献60・139より）

2・6号墳の調査成果が報告された。この中で2号墳には石棺を伴う張り出し部が付設され、また1号墳と2号墳の間に6号墳が存在したことが確認された。1号墳を4世紀後半、2号墳を5世紀後半、6号墳を6世紀中頃以降とし、1号墳については長野県内における最も初現の積石塚古墳となり、この築造年代の示す意味は大きい（文献60）（第3図）。

同年、平成8年度に続き浜北市内野二本ヶ谷積石塚古墳群の調査が行われ、この中で、積石塚古墳群の築造開始年代が5世紀後半（TK208段階）であることが示され、また内野二本ヶ谷積石塚古墳群B群では、7世紀中頃に築造された積石塚古墳があることが報告された（文献61）。

1998（平成10）年、黒田晃氏は群馬県高崎市剣崎長瀬西遺跡の調査成果として、朝鮮半島に起源を持つと考えられる遺構と遺物がセットとして確認されていることを述べ、確認された積石塚古墳のみならず、確認された初期群集墳のすべての円墳・方墳について、主体部構造など積石塚古墳的な要素を含んでいるとし、またこの地に最後に居住した集団について、渡来人の存在の可能性を示した（文献62）。

同年、福岡県糟屋郡新宮町相島積石塚群の概要報告書が刊行された。この積石塚群は長さ約500mの石のみの海岸線に250基ほどが構築され、この中には円墳・方墳・墳丘を持たないものがあり、方墳の中には二段築成された高句麗積石塚を思わせるものも含まれている。方墳については5世紀代から構築が始まったと考えられ、相島積石塚群の被葬者については宗像族の中でも純粹に海を生活の場としていた人々のものと考えている。長野県内の積石塚古墳とは立地面等かなり違いを見せるが、積石塚古墳の構築・性格・伝播を考える上で貴重な遺跡と言えよう（文献63）。

同年、飯島哲也氏によって新発見の大形積石塚古墳である長野市西前山古墳の調査成果が紹介された。菅間王塚古墳などの周辺積石塚古墳との総合的研究が期待されるものである（文献64）。

同年、久野正博氏は静岡県浜北市内野二本ヶ谷積石塚古墳群の調査成果として、墳丘は方形の低墳丘であり、時期は須恵器TK208型式の示す時期に限定され、その立地は台地上に造られてもよい環境にありながら、谷底に円礫を積上げて構築されているとしながらも、遺物の検討からは、周辺の盛土墳との相違は認められないとした（文献65）。

このように日本国内における積石塚古墳の研究史をふり返ってみると、大勢として積石塚古墳の概念規定が定まっていない部分があり、その上に環境自生説や大陸起源説が重なり、また西日本の様相、東日本の様相が正確に把握されないままに現在にいたっているのではあるまいか。

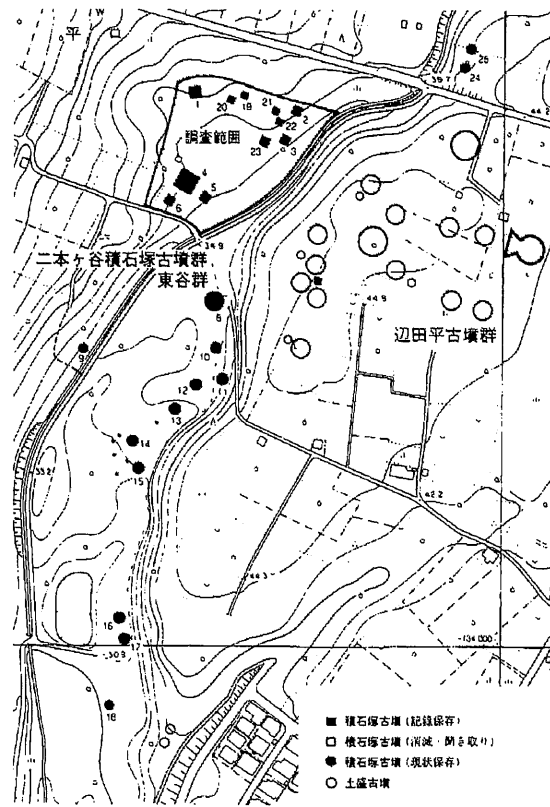
1999（平成11）年、飯島哲也氏は「より詳細な発掘調査例の蓄積という基本と、墳丘構造のみならず多角的な視点からのアプローチ、さらには墳丘総体に関する高位の系統立てた理論に基づく解釈が必要不可欠と考える」とし、Ⅰ型「低い墳丘」・Ⅱ型「高墳丘志向」・Ⅲ型「高い墳丘」と3型に分類し、さらに各型A・B2式の6式に分け、Ⅲ型A・B式はさらに各1類・2類とした分類案を設定した（文献66）。

2000（平成12）年、浜北市教育委員会により二本ヶ谷積石塚古墳群の調査成果が出された。この中で久野正博氏によれば、二本ヶ谷積石塚古墳群の墳形は方墳と不定形があり、東谷群で方形を意識したものが6基、方形を意識した不定形が2基確認され、不定形のもは東谷群で4基、西谷群で4基確認されたとした。規模は8m以上から4m以下まで様々で、埋葬施設は矩形化した竪穴系石槨や出自不明の二重構造の竪穴系石槨などが確認されたとした。これらの調査成果から、二本ヶ谷積石塚古墳群は群馬県の積石塚古墳と共通性が強いとし、5世紀後半に谷地形に矩形化した竪穴系石槨を持つ低墳丘方形プランの積石塚古墳が築造されたとし、被葬者については、出土遺物等では検証できず、特殊な被葬者であったことは認めるが、渡来人の墓であるということは容認できないとした（文献67）。

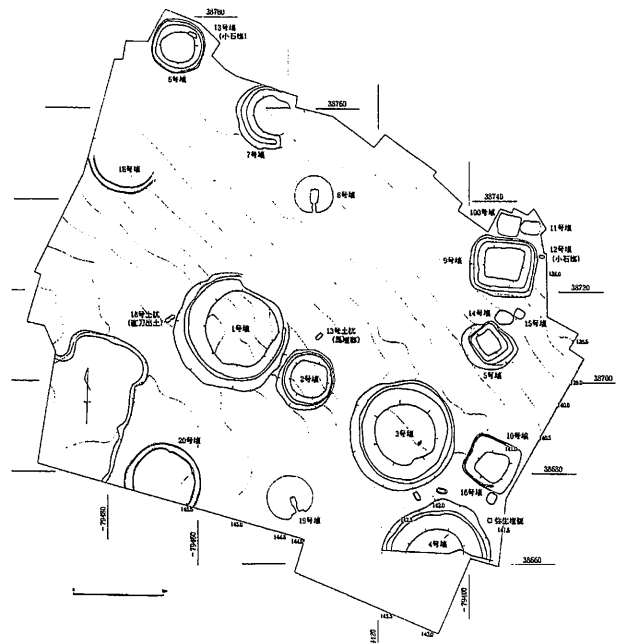
同年、土生田純之氏はこれまでの日本や韓国の調査・研究を整理し、大室古墳群他の積石塚古墳についての考えをまとめた。

現状ではシナノの積石塚古墳の源流を百済や高句麗に求めることは困難であることを指摘しながらも、現状ではシナノの積石塚古墳の年代よりも後出である韓国慶尚北道大邱市地域の積石塚の事例をあげ、岩盤の多い地形に構築された円形の積石塚も見られるとした。

また群馬県高崎市長瀬西古墳群と



第4図 浜松市（旧浜北市）内野二本ヶ谷古墳群
（文献67より）



第5図 高崎市長瀬西古墳群（文献71より）

| 古墳名 | 所在地 | 墳形 | 墳丘規模 m | 直径×高さ | 古墳数 | 後石塚数 | 墳丘形式 | 内部構造 | 時期 | その他 |
|-----------|------------|------|-----------|-----------|-----|------|---------|---------|---------|--------------------------|
| 1 和栗 | 下高井郡木島平村穂高 | 円 | ? | ? | 1 | 1 | 合掌形石室 | 合掌形石室 | 5C? | |
| 2 金鑑山 | 中野市日野 | 円 | 2 | 1×2.6 | 1 | 1 | 合掌形石室 | 合掌形石室 | 5C中、後半 | 土石混合墳 |
| 3 雁田(群) | 上高井郡小布施町都住 | 円 | | | 3 | 2 | 横穴式石室 | 横穴式石室 | 6C、7C | |
| 4 鑑塚1号 | 須坂市八丁 | 円 | 2 | 5×2.5 | 1 | 1 | 組合式箱形石室 | 組合式箱形石室 | 4C後半 | |
| 5 鑑塚2号 | 須坂市八丁 | 円 | 2 | 5×3.5 | 1 | 1 | 組合式箱形石室 | 組合式箱形石室 | 5C後半 | |
| 6 鑑塚6号 | 須坂市八丁 | 円 | 1 | 2.5×? | 1 | 1 | 組合式箱形石室 | 組合式箱形石室 | 6C中以降 | |
| 7 鮎川(群) | 須坂市八丁・他 | 円 | | | 2 | 1 | 横穴式石室・他 | 横穴式石室・他 | 5C、7C | 竪塚・天塚・塚の腰・天神塚・大塚・天神古墳群含む |
| 8 綿内(群) | 長野市若穂綿内 | 円 | 7 | | 7 | 7 | 横穴式石室 | 横穴式石室 | 6C以降 | 中組・大豆皮古墳群含む |
| 9 保科(群) | 長野市若穂保科 | 円 | 3 | | 3 | 3 | 横穴式石室 | 横穴式石室 | 6C以降 | 土石混合墳多く含む |
| 10 長原(群) | 長野市若穂保科 | 円 | 2 | | 2 | 2 | 合掌形石室 | 合掌形石室 | 5C後、7C | 二カゴ塚古墳含む |
| 11 十二山(群) | 長野市若穂保科 | 円 | 5 | | 5 | 5 | 横穴式石室 | 横穴式石室 | 5C後以降 | 土石混合墳・1号古墳(合掌) |
| 12 大星山(群) | 長野市若穂保科 | 方・円 | 4 | | 4 | 1 | 合掌形石室 | 合掌形石室 | 4C後、5C後 | 2号古墳(盛土墳合掌・4号古墳(方形横石塚)) |
| 13 大室(群) | 長野市松代町大室 | 円(方) | 5 | | 5 | 3 | 合掌形石室・他 | 合掌形石室・他 | 5C中、7C | 上記以外石槨あり 土石混合墳も含む |
| 14 長礼山2号 | 長野市松代町東条 | 円 | 1 | 6.6×3 | 1 | 1 | 横穴式石室 | 横穴式石室 | 5C後半 | |
| 15 菅間王塚 | 長野市松代町東条 | 円(方) | 3 | 4×6.7 | 1 | 1 | 合掌形石室 | 合掌形石室 | 5C、6C | |
| 16 笹塚 | 長野市松代町東条 | 円 | 2 | 6×3.6 | 1 | 1 | 合掌形石室 | 合掌形石室 | 6C中、後 | 横穴式 |
| 17 西前山 | 長野市松代町東条 | 円 | 2 | 5×3.0×5以上 | 1 | 1 | ? | ? | 6C? | 横穴式 |
| 18 空塚 | 長野市松代町豊栄 | 円 | 1 | 7×3.4 | 1 | 1 | 合掌形石室 | 合掌形石室 | 6C中、後 | 横穴式 |

第1-①表 長野県内の積石塚古墳 (文献5より一部改変)

表内参考文献：1 = 14・79、2 = 12・13、3 = 40・79、4 = 60、5 = 60、6 = 60、7 = 15・40・44・79、8 = 15・40・44・79、9 = 15・40・44・79、10 = 34、11 = 15・40・44・79、12 = 55、13 = 35・41、14 = 40・137、15 = 104、16 = 104、17 = 64、18 = 104

| 古墳名 | 所在地 | 墳形 | 墳丘規模 m 直径×高さ | 古墳数 積石塚数 | 墳丘形式 | 内部構造 | 時期 | その他 |
|-------------|---------------|------------|-----------------|-------------|------|------------------|--------|---|
| 19 皆神山(群) | 長野市松代町豊栄 | 円 | | 60 | 53 | 横穴式石室 | 6C以降 | 牧内・桑根井・平林・岡田・宮崎・南大平古墳群を含む 長礼山2号・王塚・笹塚・西前山・空塚以外 |
| 20 吉(群) | 長野市若槻 | 円 | | 56 | 22 | 大室 合掌形石室 | 6C以降 | 31号古墳・33号古墳(盛土の合掌) |
| 21 地附山(群) | 長野市上松 | 円 | | 7 | 2 | 合掌形石室 組合式箱形石棺 | 5C~6C | 4・5号墳積石塚古墳的 |
| 22 安茂里(群) | 長野市安茂里 | 円 | | 20 | 6 | 合掌形石室 横穴式石室・他 | 6C以降 | 萩平古墳(土石混合墳の合掌) |
| 23 杉山(群) | 千曲市倉科 | 円 | | 22 | 22 | 合掌形石室 | 5C~7C | 18号古墳(合掌) |
| 24 前山(群) | 埴科郡坂城町中之条 | 円 | | 9 | 9 | 大室 横穴式石室 | 6C以降 | |
| 25 安坂將軍塚(群) | 東筑摩郡筑北村中安坂 | 方 | | 7 | 7 | 安坂 横穴式石室 | 5C~7C | |
| 26 追沢(群) | 東筑摩郡筑北村中追沢 | 方・円 | | 10? | 10? | 横穴式石室 | 6C以降 | |
| 27 麻績塚 | 東筑摩郡麻績村叶里 | 方 | 12 14×? | 1 | 1 | 横穴式石室 | 6C以降 | 麻績塚古墳以外 |
| 28 麻績(群) | 東筑摩郡麻績村叶里・(他) | 円 | | 11 | 2 | 大室 横穴式石室 | 6C以降 | |
| 29 小原山麓(群) | 大町市大字平 | 円 | | 8 | 8 | 大室 横穴式石室 | 6C以降 | |
| 30 水汲(群) | 松本市水汲 | 円 (円・方) | | 8 | 8 | 大室 横穴式石室 | 6C以降 | |
| 31 針塚 | 松本市里山辺荒町 | 円 | 20×3 以上 | 1 | 1 | 針塚 横穴式石室 | 5C後半 | |
| 32 薄町(群) | 松本市里山辺荒町 | 円 (円・方) | | 4 | 4 | 針塚 横穴式石室 | 5C後半以降 | |
| 33 松岡(群) | 松本市岡田松岡 | 円・方 | | 4 | 4 | 横穴式石室 | 6C以降 | |
| 34 大塚 | 茅野市ちの塚原 | 方 | 周囲 33×3 | 1 | 1 | 横穴式石室 | 6C後半 | |

第1-②表 長野県内の積石塚古墳 (文献5より一部改変)

表内参考文献：19 = 40、20 = 40・79・115、21 = 118、22 = 40・79、23 = 40・44・79、24 = 40・79、25 = 32・40、26 = 40・46・79、27 = 40・46・79、28 = 40・46・79、29 = 40・42・79、30 = 33・40・79、31 = 33・48・79、32 = 33・40・79、33 = 33・40・79、34 = 11・37・40・79

浜松市内野古墳群について、いずれも5世紀後半ごろの古墳群で、内部主体を竪穴系の石槨と共通することから、長野市大室古墳群ともに史的意義を共有する可能性がきわめて高いことを指摘している。そして香川県石清尾山古墳群にもふれ、積石塚古墳が前期に限られ、後期には封土古墳が築造されることから、積石塚古墳造営の原因は地形によるものであり、現在までの情報では東国の積石塚との関連性を示すものではないとした（文献68）。

同年、筆者は1996（平成8）年の筆者の論考の不備を補う意味で、長野県内や日本国内の研究史や文献史料との関わりを再度まとめた（文献5）。

2001（平成13）年、高崎市教育委員会から剣崎長瀬西遺跡の調査報告書が刊行された。大小の積石塚古墳5基が含まれ、いずれも方形で小口面を外側に向けた石を積み構築されていた。石積みは現状で2～3段で、狭長な竪穴式小石槨を埋葬主体としていた。近接する方墳からは垂飾付耳飾りや軟質土器が出土している（文献69）。

2003（平成15）年、飯島哲也氏は平成11年に示した分類案を再検討し新案を示した。新案では「石積み墳丘の基本に立ち返り、純粹に石塊のみを積み上げて墳丘本体を構築していることに重点を置く。」とし、ⅠからⅢの「型」を設定した。この「型」からは土石混合や葺石、あるいは横穴式石室の裏込め控え積みや内回り石組み列、外護列石が崩落・散乱している古墳等は除外するとした。さらに古墳の立地条件から「式」を設定し、3型5式の積石塚古墳の以下分類案とした。

Ⅰ型 墳丘基底から石塊のみを積み上げた古墳

A式 尾根に挟まれた谷間の緩斜面に立地するもの 大室156古墳・168号墳 等

B式 河岸段丘の縁や扇状地上の緩斜面に立地するもの 八丁鎧塚古墳1号古墳・2号古墳

Ⅱ型 基底となる整地造成部分以外は石塊のみを積み上げた古墳

A式 山腹テラスや尾根頂部の縁等の急斜面に立地するもの 安坂將軍塚1号古墳・2号古墳、大屋山4号古墳 等

B式 山地から山麓への斜度の大きい傾斜変換地に立地するもの 菅間王塚古墳、西前山古墳 等

Ⅲ型 古墳表面に石塊のみを厚く被覆した古墳

長原12号古墳、大室23号古墳・25号古墳・42号古墳、桑根井鎧塚1号古墳 等

また、積石塚古墳の定義として、「つまり出現段階の石積み墳丘を持つ古墳の中でも、伝統的な埋葬形態の中に存在しない技術による、より特異性・独自性が強い古墳のみ」とし、「横穴式石室導入以前の、特異性・独自性の強い石積み墳丘を持つ古墳」とした（文献70）。

2003（平成15）年、土生田純之氏は群馬県高崎市の剣崎長瀬西遺跡での積石塚古墳の調査成果で、調査された方形の積石塚古墳について、渡来人あるいはその後裔たちの墳墓とし、当初の渡来人と在来の人々との間には差別が存在したが、やがて同化の方向に向かったとした（文献71）。

2006（平成18）年、土生田純之氏は東日本の積石塚古墳について「群馬県（上毛野）では5世紀後半、西毛において積石塚が突如築造される。こうした現象は上毛野に限らず、東三河、遠江、甲斐などの東日本の広範囲に認められる。しかしその後の展開は地域によって明確な差があり、それぞれの事情や社会背景を異にしたものと考えられる」とした（文献72）。

2007（平成19）年、木下正史氏は千曲市杉山古墳群の調査成果をまとめた。その中で杉山古墳群は5世紀中頃に築造が始まり、7世紀頃終焉する積石塚古墳群としている。A号墳は六角形墳であり裾部分を石垣状に板石を積んでおり、無袖の横穴式石室を有し7世紀を前後すると考えている。A号墳よりも標高の高い場所に営まれた積石塚古墳はいずれも石英閃緑岩を小口積みにした竪穴式石室を内部主体とするもので、竪穴式石室をもつ古墳からは土器祭祀に用いられた土師器の壺と高杯とがセットで出土しており、いずれも5世紀代の築造であることがわかった。竪穴式石室は倉科將軍塚古墳や土口將軍塚古墳で構築された竪穴式石室の系譜を引くものとした。またD号墳は一辺10mほどの隅丸方形墳と確認されたが、その他の古墳も同程度の規模となるとしている（文献73）。

2008（平成20）年、小林三郎・大塚初重・石川日出志・佐々木憲一・草野潤平編「信濃大室 積石塚古墳群の研究Ⅲ -大室谷支群・ムジナゴロ単位支群第168号墳の調査」が刊行された。この中では大室第168号墳の調査成果をもとに「大室第168号墳出土須恵器の基礎的研究」、「大室第168号墳出土土師器の位置付けについて」、「信濃の中期古墳における土器配置の一様相」、「大室古墳群における合掌形石室の変遷について」の考察がおこなわれ、これら考察をもとに総括がおこなわれている。これまで不明な部分が多かった大室古墳群の実態を明らかにしたものである（文献74）。

以上、長野県内および関連する積石塚古墳の研究史を見てきたが、積石塚古墳へのこれまでのとらえかたを簡単にまとめてみたい。

長野県内における積石塚古墳研究の出発は大正12年の唐沢貞次郎氏と岩崎長思氏による上高井郡鎧塚古墳の記述に始まる（文献9）。

積石塚古墳の形態研究については、高句麗積石塚との関係を探る一要素として方墳であるのか否かについて期待が寄せられながら調査・研究が進められることとなる。

昭和31年の信濃資料には松本市針塚古墳は方形と記載され（文献27）、また大場磐雄氏も松本市浅間古墳の報告書の中で同様の記載をしている（文献33）。以後その景観から方形二段築成積石塚古墳であると予測もされたが、平成元年・2年の調査の結果で5世紀後半の円形積石塚古墳であることが確認された（文献49）。現在確実に方形積石塚古墳として確認されているのは、東筑摩郡坂北村安坂將軍塚古墳群1号・2号・3号・4号墳（文献32）と長野市大星山古墳群4号墳（文献56）を代表例としてわずかにすぎない。

合掌形石室との関係についてはどうであろうか。長野県内での積石塚古墳研究が始まった大正12年の翌年、大正13年には早くも矢沢頼道氏によって積石塚古墳に今で言う合掌形石室が用いられていることが紹介されている（文献10）。以後、積石塚古墳に用いられ

る石室として合掌形石室が理解されることとなるが、昭和6年に仁科義男氏の調査によって前方後円墳（帆立貝形古墳）である山梨県王塚（大塚）古墳で合掌形石室が発見され注目されることとなり（文献75）、また長野県内においても昭和9年に栗岩英治氏が吉31号墳の調査によっても合掌形石室が必ずしも積石塚古墳のみに伴わないことが確認され始め（文献76）、昭和28年には小野勝年氏が田麦林畔1号墳の調査成果から、積石塚古墳と合掌形石室が必ずしも結び付くものではないとした（文献77）。しかし研究の方向性は全国的にも特異なものとして積石塚古墳と合掌形石室を結び付けた考え方が主流的となる。平成2年に大塚初重氏は、積石塚古墳をすべて同一視する必要はなく、またすべての積石塚古墳を渡来人の墓とするには問題があることを指摘している（文献48）。さらに平成4年、大塚初重氏はただ単に積石塚古墳と合掌形石室を結び付けるのではなく、大室古墳群の調査から、大室谷支群の各単位支群では、最初に出現した古墳はみな積石塚古墳であり、しかもそれらの石室は合掌形石室であることを明らかにしている（文献52）。また平成7年、山口明氏は長野県以外にも積石塚古墳と合掌形石室が結び付いて構築されている例として山形県南陽市松沢古墳群1号墳・2号墳を紹介した（文献55）。長野県以外の発見例として、また大塚氏の大室古墳群での指摘に類似した好例として注目される。しかし平成8年には、土屋積氏によって長野市大星山古墳群の調査結果が報告され、積石塚古墳と合掌形石室が必ずしも結び付くものではないことを示した（文献56）。このようにこれまでの調査・研究から、大室古墳群や長原古墳群などでは古墳群形成の初源的な古墳は合掌形石室を内部主体とする積石塚古墳であったと考えられるが、他の古墳や古墳群では若干異なった様相を示している。

今後の研究は古墳や古墳群個々の十分な考古学的分析による積石塚古墳と合掌形石室の評価をした後に、他の古墳や古墳群との比較検討をする必要がある。

渡来人との関わりについては、昭和4年の松代町史の中で早くも高句麗からの渡来人との関係で述べている（文献16）。また昭和13年には栗岩英治氏が積石塚古墳と高句麗の積石塚、さらには日本後紀の信濃への高句麗渡来人記載を関連させ、やはり高句麗系渡来人との関係で述べている（文献20）。昭和26年には大場磐雄氏が安坂將軍塚古墳群の調査や新撰姓氏録などの記載から、同様に高句麗系渡来人との関係で述べている（文献23）。昭和34年には、永峯光一氏・亀井正道氏によって須坂市鎧塚1号墳・2号墳の調査が行われ、積石塚古墳としての形状や2号墳から出土した獣首面金銅製帯金具から百濟や高句麗との関わりで考えた（文献28）。また昭和39年には大場磐雄氏・桐原健氏らによって、安坂將軍塚古墳群の調査結果から、高句麗積石塚同様に方形積石塚古墳であり、また日本後紀の信濃への高句麗渡来人記載から、高句麗渡来人説を補強した（文献32）。以上のように、積石塚古墳における高句麗渡来人説については、ここに示した論考以外にも見られるが、研究史の流れとしては栗岩英治氏を始めとして、大場磐雄氏や桐原健氏を中心に高句麗渡来人説が進められてきた傾向がうかがえる。

この高句麗渡来人説を補強する一資料として文献史料がある。左記に示した「日本後紀

〔日本後紀〕第5卷・延暦十六年三月十七日

信濃國人外從八位下前部綱麻呂賜姓安坂。」

〔訓読〕信濃國の人の外從八位下前部綱麻呂に姓を安坂と賜ふ。

〔日本後紀〕第8卷・延暦十八年十二月五日

又信濃國人外從六位下卦婁眞老。後部黑足。前部黑麻呂。前部佐根人。下部奈豆麻呂。前部秋足。小縣郡人。无位上部豊人。下部文代。高麗家繼。高麗繼楯。前部貞麻呂。上部色布知等言。己寺先高麗人也。小治田飛鳥。飛鳥飛鳥。二朝廷時節。歸化來朝。自爾以還。累世平民。未改本号。伏望依去天平勝寶九歲四月四日勅。改大姓者。賜眞老寺姓須々岐。黑足寺姓豊岡。黑麻呂姓村上。秋足寺姓篠井。豊人寺姓玉川。文代寺姓清岡。家繼寺姓御井。貞麻呂姓朝治。色布知姓玉井。」

〔訓読〕又信濃國の人の外從六位下卦婁眞老。後部黑足。前部黑麻呂。前部佐根人。下部奈豆麻呂。前部秋足。小縣郡人。無位上部豊人。下部文代。高麗家繼。高麗繼楯。前部貞麻呂。上部色布知等言す。己等の先は高麗人なり。小治田。飛鳥の二朝廷の時節に、歸化來朝す。それより以還、累世平民にして、未だ本号を改めず。伏して望むらくは、去る天平勝寶九歲四月四日の勅に依つて、大姓に改めんことを。眞老等に姓を須々岐、黑足等に姓を豊岡、黑麻呂に姓を村上、秋足等に姓を篠井、豊人等に姓を玉川、文代等に姓を清岡、家繼等に姓を御井、貞麻呂に姓を朝治、色布知に姓を玉井と賜ふ。

第1史料 「日本後紀延暦16年」・「日本後紀延暦18年」の記事 (文献78より)

延暦 16 年」や「日本後紀延暦 18 年」の記事（文献 78）がそれであり、前者には渡来人が安坂の姓を賜ったことが記され、また後者には渡来人に須々岐・豊岡・村上・篠井他の姓が見られ、これらは渡来人が定住した地として考えられ、安坂は方形積石塚古墳群である安坂將軍塚古墳群との関係で述べられ、また須々岐は針塚古墳を含む薄町古墳群との関係で論じられてきた（第 1 史料）。このような考古学資料と文献史料との相互関連による分析や評価は否定しないものの、篠井他の渡来人の居住地と考えられる地には積石塚古墳は発見されておらず、積石塚古墳を渡来人と関係付けるにあって、すべての積石塚古墳に文献記載を関連づけることは危険であろうと考えられる。

最後に積石塚古墳の型式分類であるが、昭和 27 年に栗林紀道氏が 4 分類し（文献 24）、昭和 31 年に信濃考古資料でも栗林氏分類（文献 79・80）を踏襲し今後の研究の指針となるが、ここで土石混合墳を含めた広義の積石塚古墳分類となったため、善光寺平の古墳実態を極端なイメージに作りあげてしまうこととまってしまった。この後、昭和 50 年には小林秀夫氏が標識となる古墳例をあげて 3 分類し（文献 15）、平成 3 年には鈴木直人氏が土石混合墳を積石塚古墳の範疇から除外した（文献 50）。また平成 8 年には筆者が標識となる古墳をあげ 5 分類した（文献 4）。最新の研究では平成 11 年と 15 年に飯島哲也氏が積石塚古墳を 3 型 5 式に分類した（文献 67・70）。この飯島の分類については、平成 8 年の筆者の分類に新たな視点を加え、より明確に示したものと理解できる。

②中国と朝鮮半島（特に韓国）における研究史

まず中国側研究者による高句麗積石塚の研究をみとめることとするが、この中国側研究者の業績や研究史については西川宏氏が要点を整理しまとめているので、西川氏の論文によることとする（文献 81）。

まず「高句麗の積石塚の源流」の中で、「高句麗の積石塚は、遼西の紅山文化や遼東半島にみられる積石墓の古い地域的伝統の上に青銅器時代後期に成立したものを受け継いだものとみることができよう。高句麗には積石墓と並んで封土墓もあるが、青銅器時代に両者が併存していたか、封土墓は後世に成立したものなのか、今のところ明らかではない。」とした。

そして「墳丘の問題」をとりあつかった論考を年代順にまとめている。

まず 1960 年、解放後最初の高句麗墳墓の調査研究として陳大為氏が桓仁の積石墓の報文を発表し、この中で高句麗墓全体について最初の編年を発表している（文献 82）。

西川氏によると、文化大革命以前は、「高句麗墳墓の形態は積石墓も封土墓も方形が主であるとみており、大型積石墓の中には円形もあるとしているが、それが最初から円形を意図したものなのか、方形が後世に崩れたものなのかは詮索されていない。」とした。

1979 年、方起東・劉振華氏は高句麗の全墳墓を対象に次の 2 類 9 種に分類している（文献 83）。

I 石墓

- ①積石石壙墓
- ②有段積石石壙墓
- ③階壇積石石壙墓
- ④階壇積石洞室墓
- ⑤階段積石石室墓

II 土墓

- ①有壇封土石室墓
- ②階壇封土石室墓
- ③封土洞室墓
- ④封土石室墓

1980年、李殿福氏は集安地方の12,358基の墳墓の調査をふまえ、高句麗墓の分類と編年を示した(文献84)。その方法については、山麓にある石墳は比較的早く、河谷や平地のものや、石墳の間にある土墳は比較的新しい傾向であるというように、石墳を土墳よりも古いとすることをふまえ、2類9式に分類している。

I 石墳

- ①積石墓
- ②方壇積石墓
- ③方壇階梯積石墓
- ④方壇階梯石室墓
- ⑤封石洞室墓

II 土墳

- ①方壇封土石室墓
- ②方壇階梯封土石室墓
- ③土石混封石室墓
- ④封土石室墓

1981年、陳大為氏は1960年の積石墓の分類・編年を改定し、外形と内部構造により3種に分類している(文献85)。

- ①円丘式積石墓
- ②階台式積石墓
- ③階台式石室墓

1983年、方起東・林至徳氏は高句麗の古墓を2大別し、土墓は集安においては石墳よりも後出するとし、さらに土石混合による墳墓のあることを指摘している。また積石墓については、有壇・階壇と分類しているので(文献86)、方形であることを前提にしているようである。

1984年、王承礼氏は2類9種の分類・編年を示している(文献87)。

I 積石墓

- ①方丘状積石墓
- ②方壇積石墓
- ③方壇階梯積石墓
- ④方壇階梯石室墓
- ⑤封石洞室墓

II 封土墓

- ①有壇封土石室墓
- ②階壇封土石室墓
- ③封土洞室墓
- ④封土石室墓

とし、高句麗における積石塚の上限年代を紀元前1世紀より更に古く、下限年代は7世紀初頭まで続き、3世紀ないし5世紀に最も発達するとした。

同年、林至徳・耿鉄華・傅佳欣・張雪岩・孫仁傑氏らは土墓について、4世紀に封土石室墓が出現するが、積石墓は継続し、高句麗滅亡後まで及ぶとしている（文献88）。

1985年、方起東氏は最初の高句麗石墳を積石墓とよび、それは円形ないし楕円形を呈しているが、本来の形状ではなく外形は整っていないものとし、積石墓が傾斜地につくられることによって、積石崩壊を防ぐために墳端に大型の石を置くことから方丘式の積石墓に発達したとしている。そしてこれらの年代については、出土遺物から西暦紀元前後、あるいは高句麗建国とされる紀元前37年前後と考えた（文献89）。

そしてこの中で石墓について以下のように分類している。

- ①積石墓（外形は不整形）
- ②方丘式積石墓
- ③有基壇積石墓
- ④方壇積石墓
- ⑤階壇積石墓

1987年、魏存成氏は石墓について、

- ①無壇石壙墓（最も簡単な形態）
- ②方壇石壙墓
- ③方壇階梯石壙墓
- ④方壇石室墓
- ⑤方壇階梯石室墓

と分類し、無壇石壙墓の出現を「李殿福氏や方起東氏の指摘に加え、－中略－高句麗政權建立以前に存在した類型の一つ」としている。そしてこの中で、「即ち積石墓は高句麗の民俗的葬俗で、封土墓は4世紀後半に受容した中原や南方の葬俗であるというのである。」とした（文献90）。

上記の魏氏の編年案については田村晃一氏が考察している。この中で、魏氏の論考につ

いて以下のように紹介している。

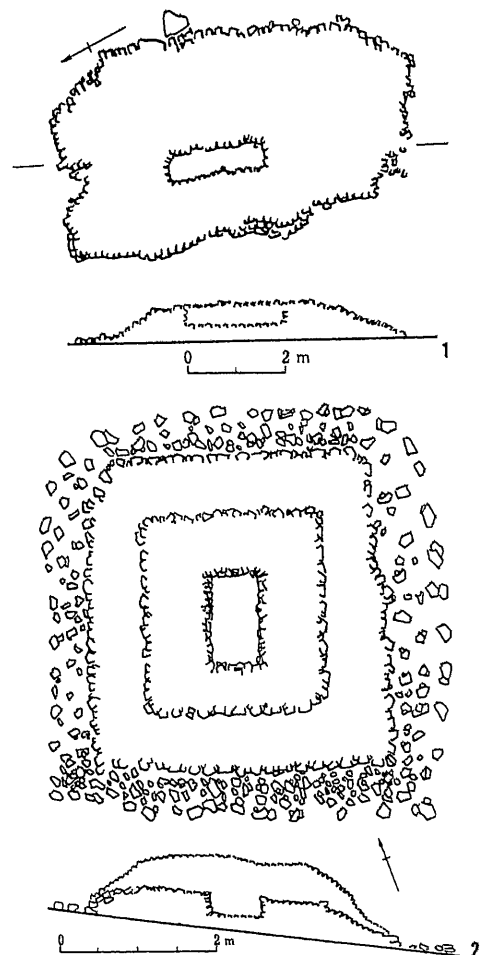
「高句麗の墓では、石壙から石室へ、積石から封土へという変化はほぼ同時に進行しているが、その開始の時期には少し違いがある。前者は3世紀末ないし4世紀初であり、後者は4世紀中葉である。そして5世紀には両者が完了している。従って3世紀末～4世紀初から5世紀にいたる間に、一種の過渡的な型式である積石石室墓が出現したのである。」とした(文献91)。

以上、中国側研究者の研究史をふまえ、西川氏は「積石墓は方形ないし長方形の平面形が主流であるということが分かった。-中略-円形の基壇というものは未だ報告されていないから、そのようなものはなかったとしてよかろう。ただ不整形のものがあったかどうかは問題として残る。基壇の形は方形ないし長方形であるか、墳頂部の形状はどうなっていたのか、截頭方錘台形なのか、円味をもっていたのか。こうした点はこれまで全く記述されていない。-中略-なお石墓とか石壙とよばれる場合、それは単純に積石墓と理解することはできない。それは石を使用した墳墓という程度の意味で、石槨や石室をもつ封土墓も含まれているからである。果たしてこのような分類法は有効であろうか。」と(文献80)、これまでの日本における積石塚古墳の概念規定への反省に通ずる重要な指摘をしている。

1991年、李殿福氏による日本での公開学術講演に先だってあらわされたものをまとめた「高句麗・渤海の考古と歴史」(文献92)を西川宏氏が翻訳している(第6図・第7図・第8図)。

その中で、集安の高句麗墳墓全体を石墳類・土壙類に二大別し、石墳類(積石塚)を5分類している。

第1形式は、積石墓で1966年の統計によると、全墳墓中の26パーセントを占め、最も多いものの一つである。最も早く出現した形式で、高句麗建国から5世紀まで続いた。詳細な形式説明はないが、方形を意識し石を積上げたものと考えられる。



第6図 1=積石墓(良民163号墓)
2=方壇積石墓(良民73号墓)
(文献92より)

第2形式は、方壇積石墓で全墳墓の10パーセントである。築造技術からみて、積石墓より一步前進している。周りに基壇が出現し、積石墓に比べ牢固さを増している。後漢時代から4世紀にかけて造られた可能性がある。

第3形式は、方壇階梯積石墓で全墳墓の3パーセントである。第1・第2形式から進んだもので、階段が出現し、身分の高い人物の墳墓と考えられる。槨室が墳頂部にある。

第4形式は、方壇階梯石室墓でその数はさらに少なく、総計二十数基である。第3形式に似ているが墓室（日本でいう横穴式石室）を持つ。

第5形式は、封石洞室墓で全墳墓の4パーセントである。墓室の位置が墳頂中央から地表に移っており、また土墳の特徴も持つことから、土墳と石墳の交換の時期に出現した形式である可能性が考えられる。

とし、これまでの研究を簡潔にまとめた。そして第1の積石墓は、数量が最も多くその存在した年代も最長で青銅器時代より5世紀まで続いたとした。

ここで日本側からの高句麗積石塚の研究をみることにする。

1982（昭和57）年、田村晃一氏は、陳大為・李殿福・朱榮憲氏（積石墳を内部構造を基準に分類）、鄭燦永氏（積石墳を外部構造を基準に分類）らの研究史や、それぞれの問題をふまえながら、以下のように分類している（文献93）。

第1 = 石槨積石塚（大きな石で天井を構築しなかったもので一種の縦穴式石室で、それ



第7図 中国吉林省集安の山城下墓区の積石塚群（後方は丸都山城） 筆者撮影

ぞれは時代的に並行した。）

a類=単に方台形または方錐形の封丘を持つもの。《李氏Ⅰ（当論に示した李氏1980年の①）式積石墓》

b類=方台形または方錐形の封丘の裾まわりに、1段の基壇をめぐらしたもの。《李氏Ⅱ（当論に示した李氏1980年の②）式方壇積石墓》



第8図 集安の山城下墓区の積石塚（弟塚） 筆者撮影

c類=数段の階段状に構築された墳丘を持つもの。《李氏Ⅲ（当論に示した李氏1980年の③）式方壇階梯積石墓》

第2 = 羨道付石槨積石塚（第1式に羨道のつくようなもので類例は少ない）

a類=槨室の幅がせまく、単葬用であるもの。

b類=槨室の幅が広く、本来合葬用であると考えられるもの。

第3 = 石室積石墓（横穴式石室を有するもの）

a類=石室の天井が類穹窿式になっているもの。

b類=石室の天井が平天井式になっていて、床面は地表近くに位置するもの。ほとんどの石室石塚はこの類に属している。石室は2室または3室が並列する例が多い。

c類=石室の天井が平天井で、床面は地上より相当高く、石室の幅も広いもの。《李氏Ⅳ（当論に示した李氏1980年の④）式方壇階梯石室墓》

とし、さらにこれらをふまえて、「石槨積石塚から羨道付石槨積石塚へ、そしてさらに石室積石塚へと順次発展していったという考えには同意できないものがあるが」とし、「石室封土墳が高句麗の古墳の中でも新しい段階に出現する墳墓型式であることは明白な事実である。従ってこの石室封土墳の石室と密接な関係をもつと思われる石室を備えた石室積石塚が、石槨積石塚よりも新しいものであるという考え方は、誰しもが容易に考え付くところであって、それは決して間違いではない。」とした。そして、中国側研究者の編年・分類については検討が必要であるとし、年代については「筆者のいう石槨積石塚の年代は、紀元前後頃を中心とする、ある幅をもった時間的位置を占めているといえる程度のものでしかない。一方、石室積石塚についてみると、そのc類の年代の一端を、太王陵や將軍塚によって、4世紀後半から5世紀初とすることはほぼ間違いのないところであろう。」とした。また「紀元前3世紀中頃から4世紀中頃に至る間のある時点まで、高句麗の王陵は石槨積石塚であった」であろうと推測し、石室積石塚b類の年代については、小田富士

雄氏の年代観が妥当とし5世紀前半から中頃のものとした。

さらに「類穹窿式天井をもつ石室積石塚 a 類の構築と、同穴合葬の風習の出現が—中略—その時期はおそらく3世紀末から4世紀前半頃のこととして大過ないであろうと考えられる。」とした(文献93)。

以上は中国吉林省集安における高句麗墓を中心とする研究であったが、次に韓国における積石塚の研究をみてみることにする。

韓国における積石塚の大きな成果は、ソウル大学がおこなった石村洞古墳群の調査といえよう。これは、1975年と1983年に報告され、積石塚の構築状況も記録されたものである(文献94)。

1976年、金基雄氏は石村洞3号墳・4号墳を基壇積石塚と紹介した。また京畿道楊平郡西宋面汝湖里にある積石塚を紹介し、川原石を積み上げたもので、階段状に三段積みあげたものであろうと推察し、これが高句麗初期の積石塚である禿魯江流域の深貴里第75号墳・同92号墳と同じ形式とした(文献95)。

1984年、金元龍氏は石村洞3号墳について、「基底部に板石をめぐらしたいわゆる基壇式である。積石も川原石ではない山石であって、高句麗積石塚としては第二段階のものに相当し、古墳の位置も河岸から離れた墓地であって、高句麗との共通性をみせている。」とし「いわば漢江版積石塚ともいべき地方的特色をもったものといえよう。」とした。さらに、高句麗古墳であることは否定できないが、百濟建国者たちが高句麗から南下して造りえたともみることができ、その年代をおよそ4世紀から5世紀頃のものとした(文献96)。

1989(平成元年)年、東潮氏によると韓国における積石塚は石村洞一帯のみならず、漢江中流域から上流域にも存在し、北漢江の汝湖里の方形積石塚や琴南里・雨水里でも積石塚が分布するとのことを紹介した。また忠清北道の忠州ダム水没地域において、1981年より総合調査がおこなわれ、河原石(一部山石)が用いられているものもみつまっているようである。さらに、江原道の春川市中島では1辺15mの方墳で河原石を積みあげたもの、また平昌郡平昌邑鷹岩里でも河原石による積石塚がみつまっていることを紹介した。

また漢江流域では4世紀には積石塚が出現するが、この100基以上の積石塚すべてが高句麗人の墓と断定しえないとした。また4世紀末から5世紀前半代に高句麗が漢江下流域を領有していたとするならばまたその被葬者の推定も異なるだろうとし、4世紀後半には横穴式石室が当地域にも存在していたことなどをふまえ、積石塚の被葬者については今後の発掘調査に期待せざるをえないとした(文献97)。

1989年、『韓国の考古学』の中で金元龍氏は、「これら石塚の型式分類や編年などについては、中国、北朝鮮、そして日本の研究者たちからそれぞれ提案がなされている。しかし、その分類基準が型式發展的または時間的意義をもつという確証がないかぎり、積石塚の型式は細分すればするほど問題が複雑になり混乱するだけである。ことに南韓もそうであるが、日本の研究者たちも、積石塚の諸型式を実際に観察したり、発掘してみた経験

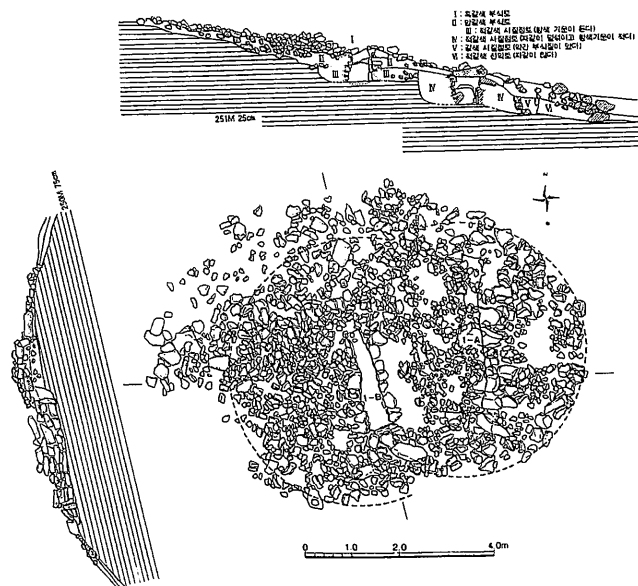
がなく、すべて報告文献を通しての考察や理解なので、構造や外形などについて実感的理解が困難である。北朝鮮文献の文章は、われわれ韓国人にとっても往々にして難解であり、誤解しやすい部分が多いので、文献を通しての考察にはおのずから限界があると考え。」とし（文献98）、現在の積石塚研究における資料解釈の物理的側面からの研究の現状と、各国々の研究者の資料解釈への誤解や矛盾について指摘した。

またこの中で、林永珍氏は「石村洞1号墳は、その上部に築造された石槨墳から、4世紀初頭とみられる直立短頸壺が出土していることから、3世紀中葉までさかのぼるものとみられる。したがって、石村洞一帯の積石塚は、遅くとも3世紀中葉頃からは築造され始めたとすることができる。このような積石塚は、5世紀に入ってから高句麗の影響を受けた石室墳に替わりながら平地から離脱して、可楽洞・芳萸洞の丘陵地帯に築造されていたが、公州遷都以後にもソウル地区で一部継続して築造されたものと思われる。」とした（文献99）。

1990（平成2）年、田村晃一氏は魏存成氏の積石塚分類に対する論考を示し、その中で「高句麗の積石塚の内部に設けられた石室をすべて同一視して取り扱ったことは問題である。」と指摘した。また高句麗における積石塚の起源等についてもふれている（文献91）。

1991年、漆谷多富洞古墳群の調査報告が昌原大学博物館より出された。漆谷多富洞古墳群では22基の墳墓が調査され、そのうち石槨積石塚は4基調査された（第9図・第10図）。

報告によると、この新羅の木槨積石塚の一系譜にあると考えられる石槨積石塚は、同じ慶尚北道漆谷郡の鳩岩洞古墳例のように石室を石で覆うものや、また石室上に盛土をし、さらに石で覆う構造のものであり、この構築方法を「葺石された古墳」とするか、「積石



第9図 漆谷・多富洞古墳群1号墳（文献100）



第10図 漆谷・多富洞古墳群2号墳（文献100）

塚古墳」とするかは難しいところがあるが、シナノの積石塚古墳の一類型に類似しているようにも考えられる。調査結果から、その年代は5世紀末以前にはさかのぼらないとしている（文献100）。

いずれにしても、時代によって百済・新羅・伽耶のそれぞれが領有する範囲のちがいはあろうが、新羅あるいは加耶地域における石槨積石塚（日本の積石塚古墳に類似？するもの）の資料が調査されたことの意義は大きく、また図面や写真でみる限り大室古墳群での5世紀中頃から6世紀前半にかけての積石塚古墳に類似しているようにも考えられる。

1992（平成4）年、藤井和夫氏は石村洞4号墳を4世紀後半頃のものとし、これらの積石塚が高句麗の影響下に出現したとした。また、この石村洞4号墳の横穴式石室が百済における最初のものとして位置づけ、高句麗において4世紀半ば頃から造られ始めた高句麗の横穴式石室の影響によるものとした（文献101）。

以上、概略的に韓国での積石塚に関する韓国側・日本側の研究者の論考をみてきたが、あらためて金元龍氏の指摘していることが研究の現状を示すものと実感させられずにはいられない。

1995（平成7）年、東潮氏は高句麗積石塚を以下のように9分類し、年代も示した。

第1類型（無基壇円丘石槨積石塚）：紀元前1世紀から3世紀頃まで（第11図）。

第2類型（方壇付円丘石槨積石塚）：紀元前後に出現し3世紀後半。

第3類型（方壇石槨積石塚）：2から3世紀に出現し5世紀代まで。

第4類型（方壇階梯石槨積石塚）：2世紀前後から5世紀後半。

第5類型（方壇階梯石槨接続積石塚）：2世紀頃から4世紀後半。

第6類型（方壇階梯石室積石塚）：4世紀代に出現し5世紀前半。

第7類型（方台形石室積石塚）：6・7世紀から渤海まで。

第8類型（方壇石室封土墳）：5世紀後半以降。

第9類型（石室封土墳）：4世紀中頃に出現し渤海まで。

第1類型については、「不正形な楕円形・円形積石塚。河原石・山石を円丘形に積み上げた墳丘で、一定の区画と段（壇）築をもつ。方形化以前の段階のものと位置づけられる。埋葬施設は石槨で、墳丘の上部に構築される。」とし、第2類型は「円形・円丘形の無基壇積石塚に方形壇が付設するもの。壇は小口積みである。」とした。また第3類型は初期積石塚の典型とした。

そして発展段階として、第1段階は紀元前1世紀に第1類型が出現した段階、第2段階は第3類型への定型化、そして第3段階は第6類型の出現とした。

また3世紀段階まで円形積石塚が造られていたことを示したことは、非常に大きな成果と考える（文



第11図 下活龍8号墳（文献102）
東潮氏の第1類型

献 102)。

以上のように積石塚古墳や積石塚の研究・論考は多々あるが、これらの研究史をふまえ高句麗・百濟・(新羅)・日本(特に中部高地の善光寺平を中心として)の積石塚古墳の検討を試みたい。

③シナノの積石塚古墳について

ここで日本、特にシナノの積石塚古墳についてみてみることにする。

シナノの積石塚古墳の分布は、大室古墳群を中心に上高井郡・埴科郡といずれも善光寺平の千曲川東岸にその集中をみせている。これまで積石塚古墳といわれてきたものは、栗林紀道氏以来、①石塊のみ・②内部は土、上部が石塊・③内部は石塊、上部が土・④石塊に土が混在、するものを含み、積石塚古墳が広い範囲でとらえられていた。

筆者が見てきた中では、高句麗の都集安においても積石塚といわれるものの中に土石混合とするようなものが含まれているが、やはり積石塚といわれるものの基本は石塊のみによるものであった。そして横穴式石室などをつくるための石はしっかりと積みあげられ、さらには裏込め等もなされ、それを覆うように握手大・人頭大などの石が積み重ねられていた。

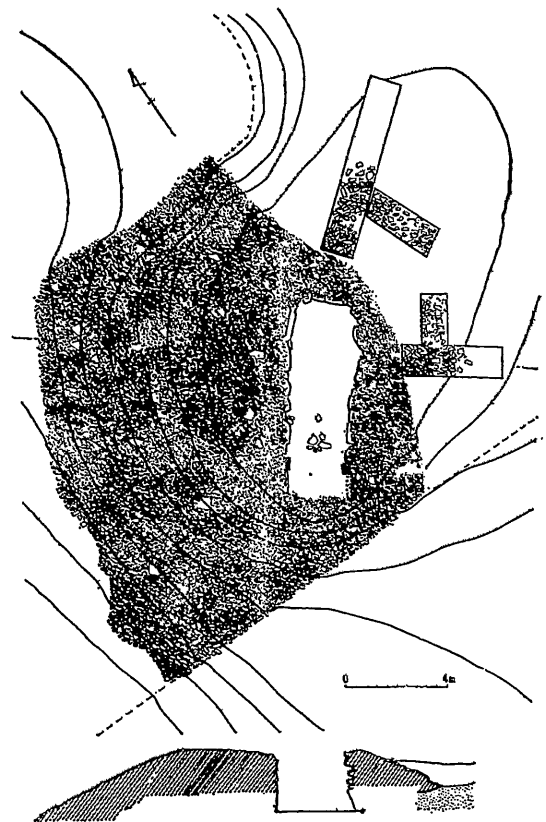
先にふれた中で、高句麗の積石塚に関する分類等については、東潮氏(文献 102)や李殿福氏(文献 92)の論考を参考にしたい。

シナノでは積石塚古墳についてはいくつか報告がされているが、あえて高句麗における積石塚に類型を求めるならば、東潮氏の無基壇円丘石槨積石塚や李殿福氏の積石墓(あえて加えれば方壇積石墓)が近いものといえよう。

しかしシナノにおける積石塚古墳の墳形等の詳細な調査は少なく、確実に方形として報告されているものは東筑摩郡坂北村の安坂將軍塚古墳群での1号墳・2号墳・4号・大星山4号墳のみである(文献 32・55・103)。

東氏によれば高句麗でも紀元前1世紀から3世紀代に円形や方形の積石塚が造られているとのであるから、積石塚古墳は方形でなければ高句麗や百濟との関係は語れないとするこれまでの考えばかりではなさそうである。

ここでシナノにおける代表的な積石塚古墳をあげながら墳丘の分類をおこなってみたい。



第 12 図 安坂將軍塚古墳群 1 号墳 (文献 32)

○安坂型＝安坂將軍塚1号墳を典型とするもので、方形で埋葬施設に関わる部分のみならず、墳丘に関わるすべてが礫によって造られているもの。そしてその立地は山の斜面および山麓にある。

例・安坂將軍塚1号墳（文献32・103）（第12図）

方形・南北1辺10～11m、東西1辺8～9m・墳頂平坦部南北1辺10m、東西6m・高さ2.4～4m・竪穴式石室・山の中腹テラスにあり・5世紀代

安坂將軍塚4号墳（文献32・103）

方形・1辺15m・高さ1～3m・横穴式石室・山麓にあり・7世紀代

○王塚型＝菅間王塚古墳を典型とするもので、円形あるいは円形に近い不整形で、安坂型同様に墳丘に関わるすべてが礫によって造られているもので、その規模は15m以上の大型のものである。その立地は山の斜面および山麓にある。

例・菅間王塚古墳（文献104）（第13図）

円形・直径34m・高さ6.7m・横穴式石室状の合掌形石室・山麓斜面にある・7世紀代（5世紀代と考えられる可能性もある）（注＝円墳とされているが、方形あるいは円形に近い不整形とも考えられる。また2段築成の可能性もある、というのが現状で、保存を前提とした詳細な



第13図 菅間王塚古墳 筆者撮影

調査がされることを期待したい。）（注＝今後、上記のような調査による結果しだいでは、安坂型的な大型のものとしての類型となる可能性もある。）

○鎧塚型＝八丁鎧塚1号墳を典型とするもので、円形あるいは円形に近い不整形で、安坂型同様に墳丘に関わるすべてが礫によって造られているもの。その立地はなだらかな扇状地あるいは平地にある。

例・八丁鎧塚古墳1号墳（文献28・105）（第14図）

円形もしくは円形に近い不整形・東西径23m・墳頂部径10m・高さ2.5m・扇状地にある・4世紀後半



第14図 八丁鎧塚1号墳 筆者撮影

八丁鎧塚古墳2号墳（文献28・105）

円形もしくは円形に近い不整形・東西径 20 m・南北 25 m・墳頂部径 4～5 m・高さ 3.6 m～5 m・扇状地にある・5 世紀後半

- 大室型 = 大室古墳群や吉古墳群などで多くみられるもので、円形あるいは円形に近い不整形で、安坂型同様に墳丘に関わるすべてが礫によって造られ、その規模は 15 m 以下で高さも 2 m 程度以下のもの。その立地は山の斜面あるいは山麓にある。

例・大室 225 号墳 (文献 52・106)
(第 15 図)

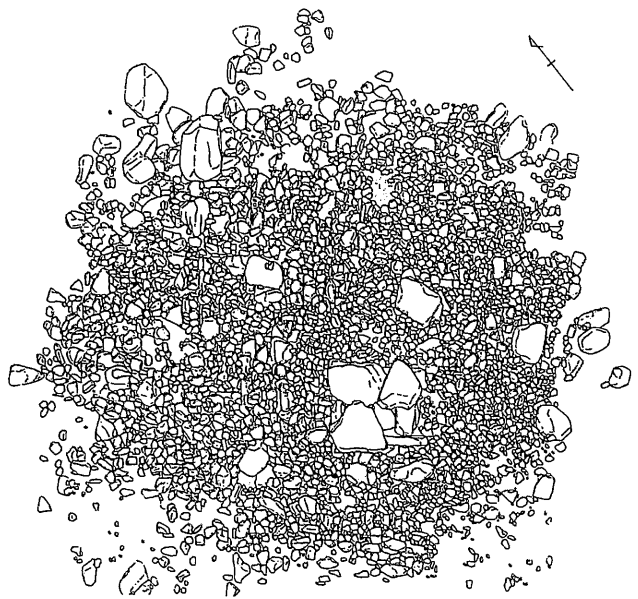
円形・東西、南北ともに径約 12 m・北から南へ下がる細い丘陵尾根上にある・5 世紀末頃

- 針塚型 = 針塚古墳や大室 23 号墳にみられるもので、円形で葬施設に関わる石やマウンドの裾石・内回りの石組みを土のマウンドとともに造り、そのマウンド全体を覆うように山石や河原石が多く積まれたもので、外見上は石のみで構築された積石塚古墳とあまりかわらないもの。

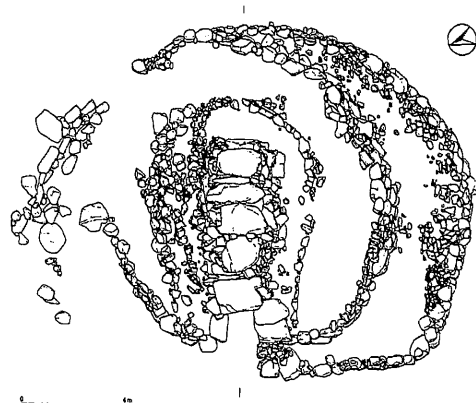
例・針塚古墳 (文献 48)

円形・直径 20 m・復元高さ 3 m 以上・竪穴式石室・扇状地にある・5 世紀後半

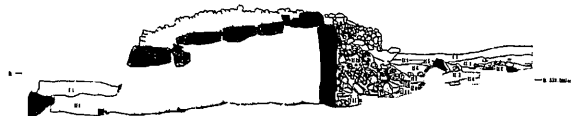
例・大室 23 号墳 (文献 51) (第 16 図)



第 15 図 大室古墳群第 225 号墳 (文献 52)



外護列石・内廻り石列等実測図



墳丘断面図

第 16 図 大室古墳群第 23 号墳 (文献 51)

図)

円形・直径 17.85 m × 13.23 m・高さ 2.92 m・横穴式石室・扇状地の緩傾斜面が山斜面の急傾斜にかわる交換点の手前にある・7世紀前半

以上、筆者の考える類型を設定したが、これまでに広い意味で積石塚古墳と呼ばれていたもの、あるいは呼ぼうとするもので、今回積石塚古墳ではないと考えるものを記してみたい。

- ①マウンドを構築するにあたって土と石を混えたもの。これは盛土古墳を造るにあたり石が混在したもの。
- ②埋葬施設を構築するための石室材・裏込め石や裾石や内回り石などが、墳丘土の崩れ等により露出、あるいはもともと土を盛っていなかったことによって、一見土石混合墳や積石塚古墳にみえるもの。
- ③墳丘の崩れなどを防ぐ意味合いの強い葺石として墳丘に石が用いられているもの。

これらの類型設定をもとに、田村晃一氏や金元龍氏などが指摘しているような問題をふまえ、中国や韓国における積石塚とシナノにおける積石塚古墳の関連について考えてみたい。

まず集安での積石塚の類型を参考にするならば、その基本形は截頭方錐形を呈した方形プランを基本としている。その概念からすると安坂型が最もそれに類似する、しかし東潮氏が示したように3世紀代まで高句麗積石塚に円形のものがあり、さらに百済・新羅地域の積石塚の中にも不整形や円形をしたものが含まれるとすると、方形にこだわる必要はなく王塚型・鎧塚型・大室型もその類似性を考慮する必要があるかも知れない。

また、シナノの積石塚古墳のタイプとは異なるが石村洞3号墳や、あるいはシナノの積石塚古墳に類似していると思われる多富洞古墳群での石槨積石塚は土を主体とする墳丘の周囲に石をめぐらし、石を覆いかぶせるような構築方法をとっていることを考えれば針塚型にもその類似性がうかがえる。

シナノの積石塚古墳を考える場合、「環境自生説」を起因とするものもあると考えられるが、多くが盛土古墳を造っている地域に積石塚古墳が造られたことを考えれば、その多くは「大陸起源説」に起因するものと考ええる。またその伝播については、多くは大和政権下の意図のもとに渡来～派遣された人々によるものと考ええる。おそらく文献に残された記録以上に人々の往来があったものと考えられる。

そのような人々の往来の中で、習慣として特に保守的な埋葬方法がこの善光寺平に残されたものであると考えられ、その初現が鎧塚1号墳や安坂將軍塚1号墳が造られた4世紀後半から5世紀前半とする時期であった。鎧塚1号墳については、方格規矩四神鏡や石釧・貝釧など同時期の前方後円墳の副葬品と同様の品々を保有していたにも関わらず、あえて積石塚古墳を造り、安坂將軍塚1号墳については方形の積石塚古墳を造ったことを考えれば積石塚古墳構築へのこだわりが読み取れる。

東アジアにおける4世紀後半から5世紀前半にかけての活発な動きは、高句麗の拡張政策に起因するものであるが、高句麗のみならず百済や加耶の人々の動きなど単純なもので

はなかったことを、積石塚古墳の検討から推測させられる。また考え方によっては、シナノにおいて積石塚古墳が造られた約 200 年から 250 年間という長い年月を考えれば、たとえば 5 世紀に造った人々、6 世紀に造った人々、7 世紀に造った人々の出身地域のちがいが積石塚古墳の構築にちがいをみせる一因になったとも考えられる。いずれにしてもシナノに入って初期積石塚古墳を造った人々は、大和政権の東国経営の一端を担う意図によるものであったと考えられる。そしてそれぞれが故郷での習俗・習慣をシナノの中に表現した時、積石塚古墳が出現し、積石塚古墳を造ることが可能な地域では、その伝統が引き継がれ、いつしか在地に同化しながら積石塚古墳を造る必要がなくなっていたものとする。

最後に、あえて構造面からシナノの積石塚古墳の変遷を考えれば、鎧塚 1 号古墳などの高句麗的なものから、大室古墳群などでみられるような高句麗積石塚の影響によって造られたであろう百済・加耶地域にみられるものへと時代が下がるにしたがって変わっていったと考えられ、それは 4 世紀後半から 5 世紀前半の積石塚古墳出現期に高句麗的なものが多く、5 世紀中頃以降に百済・(新羅) 地域的なものがあらわれてくるように現段階では考える。

3 合掌形石室

この「合掌形石室」という名称については、もともと大正 13 年に矢沢頼道氏によって長野市松代町の皆神山周辺の積石塚古墳に「屋根型天井」を持つ古墳があると紹介されたことに始まる(文献 10)。以降「粗製組合式家形石棺」(文献 13)・「拝み式」(文献 107)・「三角形石槨」(文献 14)・「横口式」(文献 75)・「屋根型式石槨」(文献 108)などの名称で呼ばれたが、昭和 3 年に岩崎長思氏が「屋根型に合掌せしめたり」と表現し(文献 14)、昭和 9 年に栗岩英治(醉古)氏が現在の長野市吉古墳群 31 号墳の石室に対して「合掌石棺」という名称を用いた(文献 76)。この後、昭和 26 年に大場磐雄氏は「合掌式石室」と呼び(文献 23)、昭和 30 年には大塚初重氏が所謂「合掌形石室」という名称を用いて(文献 26)、現在に至っている。

このように本来、「合掌形石室」という石室名称は長野県の善光寺平に分布する板石を屋根形に組む石室に対する名称として理解するものであるが、西日本を中心に見られる傾向として、佐賀県松浦郡浜玉町谷口古墳東石室などの初期横穴式石室や(文献 109)、徳島県三好郡三加茂町丹田古墳(文献 110)や奈良県天理市黒塚古墳石室(文献 111)の縦穴式石室に見られるような、板石を小口積みに持ち送りし天井石を用いない天井構造に対しても昭和 46 年の丹田古墳の調査以来「合掌式(形)天井」・「合掌形石室」の表現が用いられている。一見屋根形にするこの形態のもの起源が同一に求められ、仮に新来文化の一連の枠組みの中に位置付けられたとしても、形態は類似していながらも、構築方法はまったく異なり、善光寺平に一類型として定型化した石室構造が存在することを評価すれば、「合掌形石室」という名称については、これまでの研究史からも本来善光寺平で定型化した合掌形の石室に対する名称であるべきものであると考える。しかし西日本で言われ

る合掌形石室との混乱を避けることに注意を払うならば、あえて「善光寺平型合掌形石室」とする名称を提唱するものである。

①日本における研究史

1924（大正13）年、矢沢頼道氏は現在の長野市松代町に所在する笹塚古墳や空塚古墳の石室例をあげ、長野県の積石塚古墳の中に今で言ういわゆる合掌形石室を埋葬施設として用いていることを初めて紹介した。また松代町大室の古墳群中にも同様の石室が存在することも、松代町の研究者大平喜間多氏の談として紹介した（文献10）。

1925（大正14）年、岩崎長思氏は土石混合墳の金鑑山古墳や積石塚古墳と考えられるニカゴ（ニカゴ）塚古墳の石室が屋根型石槨であることを紹介した。また大室の谷間の無名の古墳にも同様の石室があることを紹介した（文献12）。

1926（大正15）年、森本六爾氏は金鑑山古墳の研究の中で「粗製組合式家型石棺こそ本古墳の示現する文化の地方相の好例」とし、合掌形石室を屋根形天井をなす石棺との関係でとらえようとした。またこの中で、ニカゴ塚古墳について「箱式槨の如き観あるを否定しがたし」と箱式の合掌形石室と紹介した（文献13）。

同年、樋畑雪湖氏は大室古墳群についてふれ、（合掌形）石室については「拌み式」と表現した（文献107）。

そして昭和に入ると積石塚古墳の研究同様資料の増加に伴い、その起源や系譜についての議論が進められる。

1928（昭和3）年、岩崎長思氏が積石塚古墳である和栗古墳の報告をし、この中で三角形石槨として「側壁と天井石とを別々に設けず、其両者を兼ねたる輝石安山岩の大平石を屋根型に合掌せしめたり」と紹介した（文献14）。

1929（昭和4）年、松代町史において合掌形石室である長野市松代町笹塚古墳・空塚古墳・大室の無名2古墳について、「平盤状の天井石を両側から二等辺三角形形状に組み合せて、恰も切妻式家屋の屋根と同様の形状」とし、同様なものとして金鑑山古墳・和栗古墳・ニカゴ塚古墳をあげている。また屋根型式の石槨は積石塚古墳に限られているとした（文献16）。

1931（昭和6）年、仁科義男氏は山梨県の前方後円墳（帆立貝形古墳）である王塚（大塚）古墳の合掌形石室を紹介し、長野県以外にも合掌形石室があり、それも前方後円墳（帆立貝形古墳）にあることなどに注目した（文献75）。

1934（昭和9）年、栗岩英治（醉古）氏は現在の長野市吉古墳群31号墳について、「一墳双在の合掌石棺」と紹介し、初めて石室名として「合掌石棺」と言う名称を用いた（文献76）。

1936（昭和11）年には軽部慈恩氏が、朝鮮半島における百濟時代の古墳の石室構造を類型化し、その第6類型として天井を合掌形にするものとして設定し、その類例として校村里1号墳・校村里4号墳を紹介した。これらの石室が切妻家形玄室であると紹介した

(文献 112)。

しかし善光寺平でみられる合掌形石室との関係については何もふれられていない。

1944 (昭和 19) 年、齊藤 忠氏は「被葬者の死後の生活を苦慮に入れた信仰的な意図や、或いは石材の関係による構造上の便宜や、或いはまた既に森本氏も考察してゐる如くに、家型石棺との関係などもあらためて考慮しなければならぬものであろう。」とし、また横穴式石室で天井が合掌形を呈するものが百済の古墳にあることを述べ、「朝鮮において三国時代の古墳に見られる事実である。」とした。さらにシナノにおける合掌形石室を百済文化と関連づけ、百済からの渡来人との関係でとらえようとした。この齊藤氏の論には賛否はありながらも、現在の合掌形石室の研究の一底流となっていることは事実である (文献 99)。

1951 (昭和 26) 年、大場磐雄氏は金鎧山古墳の石室について、初めて「合掌式石室」と記載した。さらに積石塚古墳と合掌形石室がセットとなる古墳をあげ、合掌形石室を有する古墳群が他と異なることを示した。渡来人との関わりについては、積石塚古墳同様に高句麗系渡来氏族との関連で述べている (文献 23)。

1953 (昭和 28) 年、小野勝年氏はこれまでの積石塚古墳と合掌形石室を関連づけた研究に対して、林畔 1 号墳の例を用いて積石塚古墳ではない古墳にも合掌形石室があるとした (文献 77)。

1955 (昭和 30) 年、大塚初重氏が所謂「合掌形石室」という表現を用いた (文献 26)。

1956 (昭和 31) 年、米山一政氏は 1 つの古墳に 3 つの石室 (合掌形石室 = 1、箱式石棺 = 1、未完成 = 1) をもつ長野市池ノ平古墳の調査をした。

そして合掌形石室と箱式石棺のちがいは天井石の差であるとされ、合掌形石室の性格を考える上で貴重な資料とした (文献 113)。

同年、信濃史料刊行会によって合掌形石室の集成がされ、36 例の資料が集められた (文献 25)。

1962 (昭和 37) 年、大塚初重氏は積石塚古墳に伴う合掌形石室と他型式の内部施設との関係や、合掌形石室自体の考古学的な研究の必要性を説き、その中で大室古墳群について一群集墳としてとらえるものではなく、シナノ全域の古墳群との関係で考える必要を説いた。そして文献にみえる官牧との関係についても、考古学的にどのような形でとらえていくかなど、今後の研究の方向性について述べた (文献 30)。

1967 (昭和 42) 年、米山一政氏・下平秀夫氏は合掌形石室を分類し、横穴式石室のような羨道を有するものと、竪穴系のものでも側壁が内傾するもの、大形で側壁が直立し天井石が側壁の上端にのるもの・側壁がなく二等辺三角形の断面を示すものの 4 類に分類した (文献 114)。

1968 (昭和 43) 年、大塚初重・小林三郎・下平秀夫氏は長原古墳群の調査の中で、渡来人との関連について、古墳群形成の中で合掌形石室をもつニカゴ塚古墳が形成初期段階のものと考えたとすれば、この合掌形石室にその関連を求められるであろうとした (文献

34)。

1969（昭和44）年、大塚初重氏は大室古墳群の研究を通して、大室古墳群を構成する各単位支群にはそれぞれ2基から数基の合掌形石室があることをその特色として指摘した（文献35）。

1976（昭和51）年、米山一政氏は上水内郡誌歴史編の中で、合掌形石室を持つ吉古墳群31号墳や33号墳他の報告がおこなわれた（文献115）。

1978（昭和53）年、小林秀夫氏は研究史をふまえつつ、合掌形石室を5つに分類した。

- A 金鎧山形式＝金鎧山古墳を代表とするもの。石室は長方形で箱式石棺状である。
- B 大室古墳群第1類形式＝大室168号墳・365号墳・357号墳を代表とするもの。A類と類似するが側壁は直立し高い。
- C 大室古墳群第2類形式＝大室112号墳・吉1号墳などを代表とし、側壁はやや内傾気味で、第1類に比較して低い。第1類に比べ粗型化している。
- D 笹塚古墳形式＝横穴式石室のように羨道部と玄室部に分かれているのが最大の特色。
- E 和栗古墳形式＝側壁らしいものはなく、二等辺三角形状に天井石を組み合わせたもので、プランは長方形である。合掌形石室ではかなり大きい方である。

とした。

さらに、これらの分類をそれぞれ時代別にⅠ期からⅣ期までにわけ、Ⅰ期＝6世紀初頭・Ⅱ期＝6世紀後半・Ⅲ期＝7世紀後半・Ⅳ期＝7世紀終末から8世紀前半とした。

合掌形石室の構築については、大室古墳群では継続的であるが、他の古墳群については単発的なものであるとした。

また以下のように指摘している。

「大塚博士の指摘されたごとく合掌形石室は2～3基ごとに集中的に分布することは、90基という群集墳である吉古墳群にも認められる。」とし、「大室124号、吉1号墳にみられたような合掌形石室の併列との差を、散在的分布をみせた地域の合掌形石室のあり方を含めて、今後被葬者の性格を考える上で重要な問題と思われる。横穴式石室系の合掌形石室での笹塚、王塚古墳が分布する萱間古墳群にも同様の事実が指摘できるところに興味深い問題がひそんでいると思われる。」とした。そして善光寺平に分布する地域・分布しない地域への分析もおこなった。

そしてさらに「7世紀後半から8世紀にかけて最盛期をむかえるが、共同体の分解という内部的な理由以外にも、外的な要因—大和政権の政策によってこの地に派遣された半島からの渡来人の系統の人々の力がこのような独自の墓制を盛行させた。善光寺平の古墳の分布をみてもかなり特色があるこれらの要素は、善光寺平の古墳の独自性ということだけでは解決できない問題であろう。」とした。また「合掌形石室も盛土であり、韓国の百濟文化の中にみられた合掌形石室も盛土塚である。どのような過程の中で積石塚古墳と呼ばれる古墳と結びつくかは今後の残された大きな問題に発展されようか、いずれにしても大

室古墳群の発展の中で積石塚古墳と合掌形石室は非常に関係深いものになる。」と重要な指摘をした。

まとめとして、合掌形石室に関して6項目をまとめた。

山梨県の王塚古墳の1例を例外として、

- ① 善光寺平にのみ限定的に分布する。
- ② 善光寺平といえども、ある特定の古墳群に分布する。
- ③ 年代的には6世紀前半から8世紀までという長期にわたって築造されること。
- ④ 地域的—千曲川東岸中央部—に第Ⅲ期の時期にいわゆる積石塚古墳と結びついて盛行する。
- ⑤ 天井岩を合掌状に組み合わせて墓制にするという強い意識のもとに築造方法、形態をかえて形成された。
- ⑥ このような合掌形石室の起源は、日本の古墳文化の発達の中で考える資料は現在のところない。わずかに韓国の公州地方に限定的に分布する高句麗文化の系統の流れをひく墓制で、百濟文化の横穴式石室の一形態として発達した石室が類似、6世紀前半に善光寺平にもたらされたと推定されよう（文献116）。

以上であるが、ここ数年来の調査・研究から、合掌形石室の初現は5世紀第2四半期以降となっている。しかしこの当時、小林氏が指摘されたことは現在の研究にも引き継がれ、その分析方法・考察は重要な指針を残したものといえる。

1978（昭和53）年、米山一政氏は更級埴科地方誌第2巻の中で、大室古墳群での谷別合掌形石室の集成をおこない、この中で屋根型天井石室（合掌形石室）には切妻屋根形のものと、四柱式のものと分類表現した（文献117）。

1981（昭和56）年、中野宥氏は合掌形石室構造には横穴式石室形態のものと竪穴式石室形態のものがあることを指摘し、形態分類上別に扱う必要があるとした。また大室古墳群中では、横穴式石室形態の合掌形石室は確認されていないことを示した（文献42）。

1988（昭和63）年、青木和明氏は長野市地附山古墳群上池ノ平1号墳から5号墳の調査成果を示す中で、1号墳に構築された3つの石室の所見で、「1号石室（合掌形石室）での最終的閉塞部分が壁体小口部分であることは閉塞施設の遺存から明らかである。石室の閉塞が壁体小口部分にある点のみを取り上げて、遺骸埋葬通路としての横口式石室構造を連想することは短絡であるが、少なくとも竪穴式石室あるいは石棺的要素が色濃い2号石室のように天井部を蓋として埋葬施設を閉塞した構造とは異質な石室構造と理解すべき」と重要な指摘をした（文献118）。

同年、桐原健氏は長野県内の合掌形石室の概要と分布を示した（文献44）。

1989（平成元）年、桐原健氏は合掌形石室の研究史をふまえながら、好太王碑文にみられる4世紀後半の朝鮮半島進出に関連づけ、この時期にも渡来系の人々の地方への誘引がありうることから、その結果シナノにおける合掌形石室や積石塚古墳の成立を求めようとした（文献45）。

1990（平成2）年、長野県埋蔵文化財センターによって大星山古墳の調査がおこなわれた。この調査によって大星山2号墳が合掌形石室であることが確認された。調査者の土屋 積氏によると、大星山2号墳は1辺14 m以上の方墳であり、石室については「石室の天井部は完存しないが、残存部分からみていわゆる合掌式の天井部をもち、組合式石棺にも類似するものである。」と報告し、また「善光寺平において最古の部類」と位置づけた（文献55）。

1992（平成4）年、大塚初重氏は大室古墳群の中で「少なくとも石室や石棺の天井石・蓋石を屋根形とする特色は、石室側壁の持送り技法の採用を別とすれば、5世紀の中頃以後に出現するものと考えられる。」とし、ムジナゴロ196号墳の年代を出土資料から5世紀後半期に位置づけた。合掌形式の石室が善光寺平と山梨県の王塚（大塚）古墳という限定された地域にのみ分布する特異性についても考究する必要があるとし、5世紀後半という時期に突発的に当地域に出現することについて、東国の古墳文化の変質と画期についてあらためて検討する必要があるとした。

また「百済墓制の合掌形石室との歴史的関係が承認されるとすれば、大室古墳群における5世紀後半代の合掌形石室の登場は、東国における朝鮮半島渡来の集団の移住や技術の受容を考えなければならないことになる。」とし、「合掌形石室が高句麗系のものであり、百済の故地、公州付近にみとめられている事実から、今後の朝鮮半島とくに加耶地域の墓制の展開が注目される場所である。」と、これまでの高句麗・百済への視点に、日本の古墳文化と深くかかわりを持ったと考えられている加耶地域もその視点に加えた（文献51）。

同年、大塚初重氏は長年にわたって調査に携わった大室古墳群の調査例から合掌形石室の系譜や採用について、「関東地方では家形石棺の出現は6世紀中頃以後と思われるから、大室の合掌形石室の登場の方が年代が古い。また近畿地方や東海地方で知られているかまど塚との関係も、年代的な差で関係づけることは無理があると思われる。」とし、また「現段階では韓国の忠清南道公州市で知られている合掌形石室との関係を考えるのが、もっとも穏当な考え方のように思われるのである。合掌形石室の朝鮮半島内の系譜が、高句麗に求められるとすれば、あるいは百済地域との関係のみでなく、他地域との関連が予測しうるか否か、今後の検討をまたねばならないことになる。」としながらも、合掌形石室をもつ古墳の開始は、特に百済あるいは加耶地域との関係の中で渡来した、馬の飼育専門集団によるものであろうとした（文献52）。

1995（平成7）年、山口明氏は山形県南陽市松沢古墳群1号墳・2号墳がまちがいなく積石塚古墳に伴う合掌形石室であることを現地調査し報告した。この中で「内部構造は、大室168号墳と同じく、箱形石棺の短辺の側壁外側に縦に板石を立て、上辺を三角形に整形加工し、これに板石を屋根状にかけたようです」、また「出土した土器から6世紀前半期の築造年代が与えられ、後期古墳の枠の中で考えられているようですが、合掌形石室の構造から言えば、5世紀後半代に位置付けてもいいのではないかとした。善光寺平以外での合掌形石室を伴う積石塚古墳の発見のみならず、善光寺平型合掌形石室の東北地方で

の発見はこれまでの研究史の中でも特筆すべきことである（文献54）。

1996（平成8）年、筆者は合掌形石室について、これまでの研究史をまとめ、さらに石室の形態分類をおこないつつ、現在知られている韓国公州の斜天井石室にその系譜を求めることには無理があるものの、百済や加耶地域にその系譜を求めることには条件付きで異論のないことを示した。

形態分類については、石室状合掌形石室として、和栗型（和栗古墳）、山梨王塚型（山梨王塚古墳）、笹塚型（笹塚古墳・空塚古墳）、石棺状合掌形石室として、金鎧山型（金鎧山古墳）、大室Ⅰ型（大室168号墳他）、大室Ⅱ型（大室165号墳第2石室他）、大星山型（大星山2号墳）とし、この中で金鎧山型、大室Ⅰ型、大室Ⅱ型について、石棺状横穴式石室に類似しているとした。

百済や伽耶地域に系譜を求める条件として、

- 1 = 現在知られている公州での斜天井石室のみならず、今後発見されるであろう斜天井石室の系譜が、構造上の変遷論のみで語られることなく、その年代も遺物論によって6世紀前半以前にまで溯ること。
- 2 = 屋根形（合掌形）に埋葬施設を造るにあたって、強い意識が反映されているとするならば、高句麗にその系譜を追うこととなろうが、その場合、公州に都が移される以前の資料が確認されること。
- 3 = 日本で初期須恵器が地方窯ごとにバラエティーがあるのは、加耶や百済から来た工人達の地域差に由来するものと考えるが、同様に善光寺平での合掌形石室の系譜が、現在知られている公州での斜天井石室とは異なったものであり、公州で善光寺平的な斜天井石室が発見されるか、あるいは百済での他地域か加耶地域において同じ系譜の石室が求められること。

とした（文献4）。

同年、土屋積氏は長野市大星山古墳群の調査を通して、合掌形石室である2号墳の検討から、当石室の年代を初期須恵器（TK73型式）の段階かやや溯る段階に位置付け、石棺系の合掌形石室としては最古の一例とした。またこれまでの構造研究が、石棺型式に基づく天井部と側石のみに注意した研究に加え、側石相互の関係や墓道の有無などの検討の結果、「合掌形天井部を持つ石棺は単壁に三角形の石を用いるものがあるが、これは天井架構と同時に棺がほぼ完全に密閉されたものと考えられる。それに対して、合掌形石室・石棺の多くは構築手順から見ても、天井が構築されて後も単壁の一方、場合によれば両側が開いていたと思われる。この点が平らな蓋石の石棺と構造的におおきく異なる。」とし、合掌形石室・石棺のおおきは、出入口部を意識した結果とみることも不可能ではないとした。

また周辺古墳の検討から、善光寺平においては「天井部が合掌形の石棺は、蓋石の平らな箱式石棺とほぼ同時期出現し、それぞれ異なる系譜のもとで発展したものである可能性がある」とした。

さらに2号墳の合掌形石室について、5世紀代に西日本各地で九州系横穴式石室の類例が認められることから、同様の動きが善光寺平においても間接的にせよ影響を及ぼしたとの推察から、北九州地域での合掌形天井や横口構造も中間地域を媒介として、少なくとも伝聞程度には到達し、その結果2号墳石室が構築されたとし、その後横穴式石室が導入されるまでの間に自立的に展開したのが石棺系の合掌形石室であろうとした。

また、積石塚古墳や渡来人との関わりについて、新しい要素を持つ古墳が小地域内では初源期の古墳であることが多いことから、渡来人などの外来系の人々の定着は十分に考えられるが、大星山古墳群では「前代からの要素を強く引き継いだ古墳群のなかに、新しい一要素として積石塚や合掌構造が、群形成の途中で現れる。これは、新しい古墳造営集団の定着というより、在地集団が新来の墓制の一要素を取り入れたことを示している」とし、さらに新たな集団の定着による影響は考えられるとしても、『影響』と『渡来人の墓』の意味するところは、この地域の古墳社会を考える上で、まったく意味が異なるとした。

大星山古墳群の調査による遺構・遺物の研究を通して、積石塚古墳と合掌構造が必ずしも結び付かないと結論付けた（文献55）。

同年、土生田純之氏は長野市地附山古墳群の再検討をし、1号墳1号石室・3号墳石室・5号墳石室が合掌形石室とした。竪穴系横穴式石室とした理由として、①1号石室の場合、西側の小口部に閉塞石が残存しており、横口構造であることは確実である。しかも西側閉塞部で南北長側壁の延長線上には小石材による石組みが続いており、構築当初の段階から当初が閉塞部として計画されていたことが明らかである。②この西小口部の墓坑壁が比較的鋭角に立ち上がっているのに対して、反対側の小口部では2段の掘り方になっており緩やかな立ち上がりである。③次に西小口の場合、基底石と墓坑壁の間には数10cmの間隔が空いているが、先に見た閉塞部を構成する東西の小石材による石組みが当部の上方にのっている。④横穴式石室の設定には直結しないが、両長側壁では基底石が2～3枚の石材の組み合わせによるのに対し、上段（屋根状天井部）は1枚の大型の石材を置いている。と4点を上げている。

また舶来の轡を出土した5号墳石室は当古墳群では発展過程の後半に位置付けられることから、大星山古墳群での検討結果同様土着倭人による自主的な新文化の受容という側面も考慮しなければならないとした（文献56）。

同年、小林秀夫氏は合掌形石室と積石塚古墳の関係について、千曲川の東岸部と西岸部ではその立地や墳丘構造にちがいがあり、地形的な条件や古墳群の形成過程により存在条件にちがいがあることを指摘した。合掌形石室が積石塚古墳に伴う場合、千曲川東岸部の中央、若穂・大室・松代・屋代地区の扇状地に分布する群集墳で、5世紀後半頃群形成が始まり、その初源期に合掌形石室が重要な役割を果たした古墳群に多い傾向はうかがえるとし、地理的には限定的な分布であり、積石塚古墳の立地と同じであることを指摘した。また盛土墳に伴う場合は扇状地の発達が小さい西岸部にみられ、その立地は扇状地以外の尾根上や台地、山麓部に多いことを指摘した（文献59）。

1997（平成9）年、土生田純之氏は長野県内の北信（善光寺平）と南信（伊那谷）の横穴式石室の論及および先に示した地附山古墳群の論考から、本来葬送墓制は保守的であり、簡単に変化するものではないことから、善光寺平の例は渡来人そのものの姿を全く否定することは不可能であり、5世紀代の箱式石棺を母体とする横口式石室をもつ小古墳は直接にしろ間接にしろ渡来人との関係が色濃い古墳であるとした（文献119）。

1998（平成10）年、風間栄一氏は地附山古墳群出土遺物や周辺遺跡資料の分析を通して、積石塚古墳や特に合掌形石室に関わる集団を新来文化の保有者と密接な関係を有した在地集団と位置付けた（文献120）。

2000（平成12）年、土生田純之氏はこれまでの朝鮮半島での調査事例をあげ、現状ではシナノの合掌形石室の源流を直接的に百済古墳に求めることはきわめて難しいとした。また徳島県丹田古墳や奈良県黒塚古墳など、前期古墳にみられる合掌形天井とシナノの合掌形石室との関連については、系譜上直ちにつながるものではないとしながらも、香川県鶴尾神社4号墳や徳島県丹田古墳が積石塚古墳であり合掌形石室（合掌形の竪穴式石室）を持つ古墳であることを留意事項として紹介した（文献68）。

同年、筆者は1996（平成8）年の筆者の論考の不備を補う意味で、長野県内や日本国内の研究史や文献史料との関わりを再度まとめた（文献5）。

2002（平成14）年、菊池芳朗氏は福島県立博物館の研究事業としておこなわれた長井前ノ山古墳の調査成果の詳細を明らかにし、その中で主軸長さ36mの前方後円墳に最大長1.93m、最大幅0.53mの合掌形石室を紹介した（文献121）。

2003（平成15）年、飯島哲也氏は長野県内のみならず、日本国内や朝鮮半島での合掌形石室の集成をおこない、県内70例、県外8例、朝鮮半島5例の計83例を示した。

この中で、1996年に土生田純之氏が合掌形石室を竪穴系横口式石室構造とした4つの観察点に加え、①基部構造となる箱形石棺の短側壁の両側の高さが異なること、②片側の短側壁外側に据えられた板石材の存在とその形状、③直立する片側短側壁材の存在とその形状、④閉塞石としての機能が類推できる寄棟屋根構造の妻側天井石の存在、以上4つの観察点を付け加えた上で、「合掌形石室における横口に関して筆者は、実際に人間の出入りや遺体の搬入を想定しているものではない。最終的な閉塞行為がどの部分であったのか、について注意したい。あえて、閉塞にともなう何らかの祭祀行為に必要な窓とでも言うべきものである。したがって厳密な意味において竪穴系横口式石室とは異なるかもしれない。」とした。

また、「大星山や林畔にみられる合掌形天井構造を、西日本前期古墳事例と他の善光寺平事例との中間形態とみることができるのではないだろうか。とすれば、既に風間栄一も指摘しているが（文献122）、大星山や林畔の合掌形天井から、大室古墳群や地附山古墳群などの大型石材による合掌形天井へは、より簡略化・省力化が進行しているとも考えることができる。愛媛県妙見山1号古墳の天井構造は、他の顕著な持ち送り構造によるものではなく、一部とは言え2枚の大型石材を組み合わせており、それは東日本だけの特異例

第2-①表 長野県内の合掌形石室 (文献5より一部改変)

| 古墳名 | 所在地 | 墳丘形態 | 墳丘規模m | 直径×高さ | 石室の規模 | 長さ×幅×高さ | 石室型式 | 時期 | その他 |
|-------------|----------|--------|-------|-------|-------|---------|------|------|-----|
| 1 和栗 | 下高井郡木島平村 | 積石・円 | ? | ? | ? | ? | 和栗 | 6C? | |
| 2 田麦林畔1号 | 中野市田麦 | 盛土・円 | 2.3 | 3.4 | 約2 | 約0.9 | 大室I | 5C後半 | |
| 3 金鑑山 | 中野市日野 | 土石混合・円 | 2.1 | 2.6 | 2.4 | 3.0 | 金鑑山 | 5C後半 | |
| 4 二カゴ塚 | 長野市若穂 | 積石・円 | ? | ? | 2.1 | 1.5 | 大室I | 5C後半 | |
| 5 城窪1号 | 長野市若穂 | 盛土・円 | 5.0 | ? | 2.4 | 1.8 | 大室II | 6C | |
| 6 十二山1号 | 長野市若穂 | 土石混合・円 | ? | ? | 2.7 | 1.3 | 大室I | 6C以降 | |
| 7 大星山2号 | 長野市若穂 | 盛土・方 | 1.7 | ? | 2.1 | 0.8 | 大星山 | 5C中頃 | |
| 8 吉31号・北 | 長野市若穂 | 盛土・円 | 1.6 | 1.5 | 1.5 | 0.8 | 大室II | 6C前半 | |
| 9 吉31号・南 | 長野市若穂 | 盛土・円 | 1.6 | 1.5 | 1.5 | 0.8 | 大室II | 6C前半 | |
| 10 吉33号・北 | 長野市若穂 | 盛土・円 | 1.6 | 1.5 | 1.5 | 0.8 | 大室II | 6C前半 | |
| 11 吉33号・南 | 長野市若穂 | 盛土・円 | 1.6 | 1.5 | 1.5 | 0.8 | 大室II | 6C前半 | |
| 12 上池ノ平1号 | 長野市上松 | 盛土・円 | 1.8 | 2.2 | 2.3 | 0.4 | 大室II | 6C前半 | |
| 13 上池ノ平3号 | 長野市上松 | 盛土・円 | 1.0 | 2.2 | 1.8 | 1.1 | 大室I | 6C初頭 | |
| 14 上池ノ平5号 | 長野市上松 | 積石・円 | 9.0 | (2) | 2.1 | 0.9 | 大室I | 6C前半 | |
| 15 萩平 | 長野市安茂里 | 土石混合・円 | 7.0 | 1.5 | ? | ? | 大室I | 6C以降 | |
| 16 大室58号 | 長野市松代町大室 | 積石・円 | 1.4 | 2.5 | 4.1 | 1.1 | 大室II | | |
| 17 大室67号 | 長野市松代町大室 | 積石・円 | 1.4 | 2.8 | 2.1 | 1.5 | 大室II | | |
| 18 大室111号 | 長野市松代町大室 | 積石・円 | 7.9 | 8.5 | 3.4 | 2.2 | 大室II | | |
| 19 大室112号 | 長野市松代町大室 | 積石・円 | 8.0 | 4.4 | 3.4 | 2.2 | 大室II | | |
| 20 大室124号・① | 長野市松代町大室 | 積石・円 | 1.2 | 2.5 | 2.2 | 1.2 | 大室II | | |
| 21 大室124号・② | 長野市松代町大室 | 積石・円 | 1.2 | 2.5 | 2.2 | 1.2 | 大室II | | |
| 22 大室126号 | 長野市松代町大室 | 積石・円 | ? | ? | ? | ? | 大室II | | |
| 23 大室135号 | 長野市松代町大室 | 積石・円 | 9.5 | 1.1 | 2.0 | 0.9 | 大室II | | |
| 24 大室139号 | 長野市松代町大室 | 積石・円 | 1.3 | 1.7 | 2.4 | 0.5 | 大室II | | |
| 25 大室143号 | 長野市松代町大室 | 積石・円 | 7.6 | 8.1 | ? | ? | 大室II | | |
| 26 大室144号 | 長野市松代町大室 | 積石・円 | 7.0 | 1.5 | 2.4 | 0.5 | 大室II | | |
| 27 大室145号 | 長野市松代町大室 | 積石・円 | 7.0 | 1.3 | 2.4 | 0.5 | 大室II | | |
| 28 大室148号 | 長野市松代町大室 | 積石・円 | 1.1 | 1.3 | 2.5 | 0.8 | 大室II | | |
| 29 大室156号 | 長野市松代町大室 | 積石・円 | 1.3 | 1.0 | 2.5 | 0.8 | 大室II | | |
| 30 大室165号 | 長野市松代町大室 | 積石・円 | 9.0 | 1.0 | ? | ? | 大室II | | |

表内参考文献：1 = 14・79・116、2 = 77・79・116、3 = 12・13・116、4 = 13・34・116、5 = 44・116、6 = 44・116、7 = 55、8 = 114・115・116、9 = 114・115・116、10 = 114・115・116、11 = 114・115・116、12 = 56・118、13 = 56・118、14 = 56・118、15 = 40・44・79・116、16 = 41、17 = 41・116、18 = 41・116、19 = 41・116、20 = 41・116、21 = 41・116、22 = 41・116、23 = 41・116、24 = 41、25 = 41・116、26 = 41・116、27 = 41・116、28 = 41・116、29 = 41・116、30 = 41

第2-②表 長野県内の合掌形石室 (文献5より一部改変)

| 番号 | 古墳名 | 所在地 | 墳丘形態 | 墳丘規模m | 直径×高さ | 石室の規模 | 長さ×幅×高さ | 石室型式 | 時期 | その他 |
|----|-------------|------------|-----------|------------------|---------------------------|-------|---------|------|--------|----------|
| 56 | 福島県長井市前ノ山古墳 | 福島県長津坂下町長井 | 積石・円・前方後円 | 3.6 × 4.2 | 1.9 × 3.0 × 0.53 × 0.47 | 大室I | 5C後、6C前 | | | |
| 55 | 山形県松沢2号 | 山形県南陽市松沢 | 積石・円 | 7 × ? | 1.8 × 0.82 × 0.45 | 大室I | 5C後、6C前 | | | |
| 54 | 山形県松沢1号 | 山形県南陽市松沢 | 積石・円 | ? × ? | 2.37 × 1.22 × 0.45 | 大室I | 5C後、6C前 | | | |
| 53 | 山梨県王塚 | 山梨県東八代郡豊富村 | 積石・円・前方後円 | 6.1 × 2 × 4 | 5.45 × 1.9 × (1) | 山梨王塚 | 5C後半 | | (帆立貝形) | |
| 52 | 杉山18号 | 千曲市倉科 | 積石・円 | ? × ? | ? × ? × ? | 笹塚? | 5C後、6C後 | | | |
| 51 | 菅間王塚 | 長野市松代町東条 | 積石・円・(方) | 3.4 × 6.7 | 3.5 × 1.25 × ? | 笹塚? | 5C後、6C後 | | | |
| 50 | 空塚 | 長野市松代町東条 | 積石・円 | 1.7 × 3.4 | 1.1 × 1.45 × 1.17 | 笹塚 | 6C後半 | | | |
| 49 | 笹塚 | 長野市松代町東条 | 積石・円 | 2.6 × 3.6 | 1.8 × 1.2 × 1.9 | 笹塚 | 6C後半 | | | |
| 48 | 北谷に他5基+α | 長野市松代町大室 | 積石・円 | 7.5 | 2 × 0.9 × ? | | | | | |
| 47 | 大室399号 | 長野市松代町大室 | 積石・円 | 9 × 1.6 | ? × ? × ? | | | | | |
| 46 | 大室395号 | 長野市松代町大室 | 積石・円 | 8.7 | 1.95 × 0.6 × 0.4 | | | | | |
| 45 | 大室394号 | 長野市松代町大室 | 積石・円 | 7.5 × 1.65 | 2.3 × 0.6 × 2 | | | | | |
| 44 | 大室357号 | 長野市松代町大室 | 積石・円 | 1.2 × 2.4 | 1.77 × 0.9 × 0.65 | 大室I | | | | |
| 43 | 大室356号 | 長野市松代町大室 | 積石・円 | 1.0 × 2.5 | 1.95 × 0.83 × 0.95 × 0.64 | 大室I | | | | |
| 42 | 大室7号 | 長野市松代町大室 | 積石・円 | 1.2 × 1.1 | 2.8 × 0.7 × (0.6) | | | | | |
| 41 | 大室谷に他1基+α | 長野市松代町大室 | 積石・円 | 1.2 × 2.7 | 2.9 × 0.9 × ? | | | | | 箱形石棺と併存 |
| 40 | 大室325号 | 長野市松代町大室 | 積石・円 | 1.0 × 2.6 × 2.34 | 2.9 × 0.87 × ? | | | | | |
| 39 | 大室293号 | 長野市松代町大室 | 積石・円 | 7 × 2 | ? × ? × ? | 大室II | 5C後半 | | | |
| 38 | 大室225号 | 長野市松代町大室 | 積石・円 | 1.0 × 3.1 | 2.02 × 1.24 × ? | 大室II | | | | |
| 37 | 大室221号 | 長野市松代町大室 | 積石・円 | 9.8 × 3.4 | 2.1 × 1 × ? | | | | | |
| 36 | 大室216号 | 長野市松代町大室 | 積石・円 | 1.0 × 1.6 | 1.9 × 0.8 × 0.63 | | | | | |
| 35 | 大室199号 | 長野市松代町大室 | 積石・円 | 1.1 × 2 | 2.61 × 0.95 × 0.53 | | | | | |
| 34 | 大室196号 | 長野市松代町大室 | 積石・円 | 1.3 × 1.6 | 2.12 × ? × 0.61 | | | | | |
| 33 | 大室178号 | 長野市松代町大室 | 積石・円 | 1.0 × 1.6 | 2.3 × 0.7 × 0.75 | 大室II | | | | |
| 32 | 大室176号 | 長野市松代町大室 | 積石・円 | 2.3 × 2.8 | 3.1 × 0.88 × 0.6 | 大室I | 5C後半 | | | 竪穴式石室と併存 |
| 31 | 大室168号 | 長野市松代町大室 | 積石・円・(方) | 8 × 1.8 | 1.9 × 0.85 × 1.1 | 大室I | | | | |

表内参考文献：31 = 35・41・116、32 = 41・116、33 = 41、34 = 41・116、35 = 41、36 = 41、37 = 41・116、38 = 41・116、39 = 41、40 = 41、41 = 41・116、42 = 41、43 = 35・41・116、44 = 35・41・116、45 = 41・116、46 = 41・116、47 = 41・116、48 = 41・116、49 = 104・116、50 = 104・116、51 = 104・116、52 = 116、53 = 75・116、54 = 54、55 = 54、56 = 121、番号なし2箇所 = 138

ではない可能性を示唆している。」した。

さらに積石塚古墳との関連にもふれ、善光寺平における合掌形石室の初現と考えられる大星山2号墳で石積み墳丘ではなく、石積み墳丘が採用された大星山4号墳は合掌形石室ではないことや地附山古墳群での事例から、石積み墳丘と合掌形石室は本来同一の情報源あるいは伝達経路とは考えにくく、それぞれ別の系譜を考えるべきとした（文献123）。

2008（平成20）年、小林三郎・大塚初重・石川日出志・佐々木憲一・草野潤平編「信濃大室 積石塚古墳群の研究Ⅲ -大室谷支群・ムジナゴロ単位支群第168号墳の調査」が刊行された。この中で草野潤平氏が合掌形石室について「まず注目すべき存在は、出土土器から5世紀前半に築造された可能性が示唆される第156号墳の合掌形石室である。」とし、「合掌形天井が大室古墳群において定型化される以前の未整備な石室として第156号墳を評価することができるだろう。」とした。さらに「すなわち、合掌形天井が定型的なものとなる以前の段階で既に横口構造が採り入れられていることになり、大星山2号墳の石室を通じて把握された状況が大室古墳群においても確認できたことになる。第168号墳の合掌形石室は、石材の厚さや大きさ、天井石の傾きや設置位置などがより整備されたものとなっており、第156号墳に後続することは明らかである。ただし奥小口壁の外側に配して妻部分の隙間を塞いでいる充填石材に目を向けると、両者の共通性の高さが注目される。」とした。

また、第225号古墳→第221号古墳の合掌形石室の変化の方向性は、「奥小口の発達および小型・粗型化という点で共通しており、大筋では同じと言ってよいだろう。とくに奥小口の発達という点は、本古墳群全体の方向性として指摘しうると考えている。このことは、横穴式石室形態への変化こそ示さないものの、本古墳群の合掌形石室が竪穴系横穴式石室の一種として成立したことを雄弁に物語っている。」とした（文献124）。

これまでの大室古墳群の調査成果をふまえ、合掌形石室の出現や変化の見通しをまとめあげ、研究の方向性を示した画期的な論考と言えよう。

2008（平成20）年、長野市教育委員会他によって大室古墳群第241号古墳の調査成果が公表された。径約14mの積石塚古墳に全長2.3m、幅1.02mの合掌形石室が構築されていた。また土師器、須恵器、円筒埴輪、形象埴輪、剣菱形杏葉・反刃鏃などが出土し、6世紀初頭の築造とした。石室の構造から6世紀代に構築される横穴式石室タイプの合掌形石室との接点を考える貴重な資料となるかもしれない。詳細な報告を待ちたい（文献125）。

以上、長野県内の合掌形石室に関わる研究史を見てきたが、合掌形石室へのこれまでのとらえかたを簡単にまとめてみたい。

合掌形石室の研究の出発は大正13年の矢沢頼道氏による空塚古墳や笹塚古墳の紹介から始まる（文献10）。以来、昭和6年の仁科義男氏（文献75）や昭和9年の栗岩英治氏（文献76）、さらには昭和28年の小野勝年氏（文献77）らにより、必ずしも積石塚古墳との関連で語れるものではない状況が示されたにもかかわらず、積石塚古墳との関連で研究が進められてきたことは否定できない。

それではその形態研究についてはどうであろうか。大正15年に森本六爾氏はその系譜を家形石棺に求めようとしている（文献13）。この後、合掌形石室研究における大きな画期と言えるのは昭和19年に斎藤忠氏が朝鮮三国時代の百済古墳の（斜天井）石室との関わりを示したことであろう（文献108）。この論考以降、積石塚古墳を高句麗積石塚と、合掌形石室を百済古墳石室（後にその系譜は高句麗古墳石室にまでおよぶ）との関わりで考えるルールを敷くこととなったと言えよう。このような中、昭和31年に米山一政氏は合掌形石室と箱式石棺の違いを天井石の差にとらえ（文献113）、昭和42年に米山一政氏と下平秀夫氏が4分類し（文献114）、昭和53年には小林秀夫氏が研究史をふまえて5分類した（文献116）。昭和63年の青木和明氏による地附山古墳群の調査による合掌形石室と箱式石棺への論考（文献118）は新たな視点を生み、この後昭和63年の青木和明氏による地附山古墳群の調査成果を受けて平成8年には土生田純之氏は合掌形石室が竪穴系横口式石室であること（文献56）を指摘した。同年筆者は昭和53年の小林秀夫氏分類をふまえて7分類した（文献4）。また同年土屋氏は北九州地域の合掌天井や横口構造が中間地域を媒介として善光寺平に影響を与えたとした（文献55）。この時点で、この土生田論文や土屋論文はこれまでの合掌形石室の系譜を探るものの中で一つの可能性を示した画期的なものとして評価される。この後大塚山古墳群や大室古墳群の詳細な調査成果を踏まえた平成15年の飯島哲也氏（文献123）の論考や平成20年の草野潤平氏の論考（文献124）は、善光寺平に集中する合掌形石室の出現や変遷をとらえた画期的な成果であり、今後の研究の道筋を整えたものとして評価できよう。

それでは斎藤忠氏が示した百済古墳石室との関わりについてはどうであろうか。昭和53年に小林秀夫氏が可能性として同様な考え方を示した（文献116）。平成4年には大塚初重氏が百済や加耶地域との関係の中その系譜求めようとしている（文献51・52）。さらに平成8年には筆者が現段階では百済古墳石室にその系譜を求めることは無理としながらも、百済や加耶地域にその系譜を求めることについて、今後検討すべき条件を示した（文献4）。

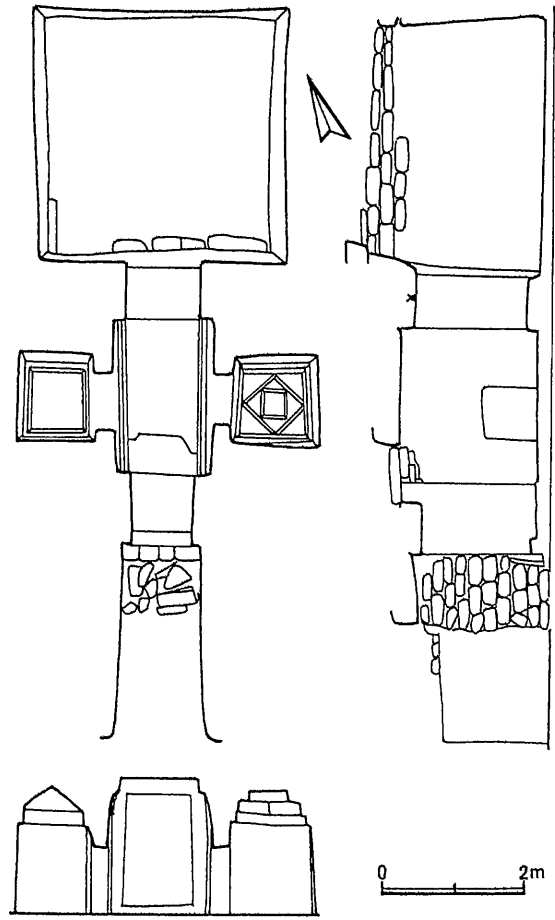
渡来人との関わりについてはどうであろうか。昭和43年に大塚初重氏は長原古墳群内のニカゴ塚古墳の合掌形石室について渡来人との関わりを示しているが（文献34）、研究の方向性として百済古墳石室にその系譜を求めることや、積石塚古墳との関連の中で渡来人に関わる墓制として考えられる傾向であった。しかし近年、左記に示した平成8年の土屋氏の在地集団が新来の墓制の一要素を取り入れるとする考えや（文献55）、同年の土生田氏による在来の土着倭人による自主的な新文化の受容とする考えが出された（文献56）。以後平成10年の風間栄一氏による新来文化の保有者と密接な関係を有した在地集団（文献120）、平成12年には筆者が「新来文化の担い手」と表現し（文献5）、平成15年には飯島哲也氏が大室古墳群以外は渡来系集団との関係において、在地集団が変革情報を一部受容した（文献123）など、渡来人を意識しながらも渡来人と直接表現することとは一線を画する論考が続いている。

②朝鮮半島の資料に関わる研究史

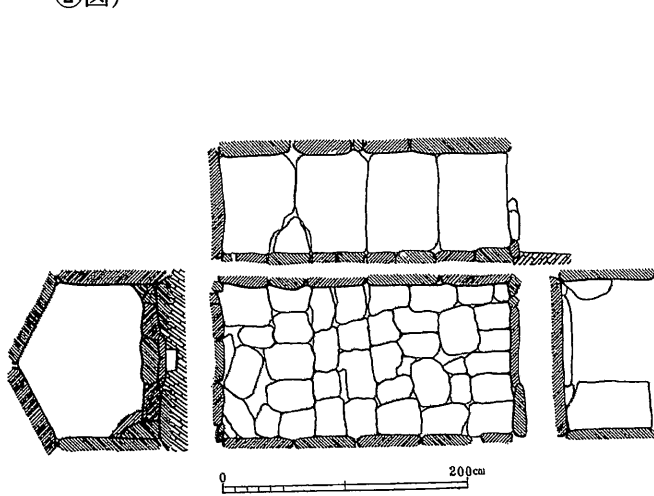
さて、次に韓国における合掌形石室（斜天井石室）の研究をみることにする。

1972年、金元龍氏は百済の地公州地方の石室を紹介する中で、「天井が‘Λ’形に2枚の板石を合掌させてつくったものなど」と示し（文献126）、この石室について「平安南道大同郡高山里の高句麗古墳（高山里7号墳）（文献127）（第17図）でもみることができ、明らかに百済の独創ではないことを知ることができる。」とした（文献126）。

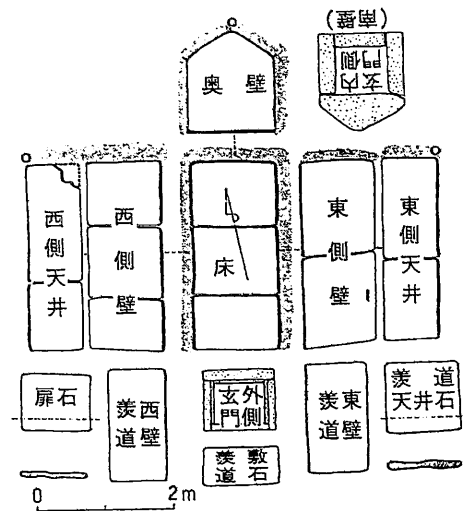
同年、安承周氏は合掌形天井古墳の構造について、校村里4号墳・錦町1号墳は遺構が完全でなかったことから、詳細な調査がされた柿木洞1号墳・2号墳について図を示し紹介した。この中で安氏も金元龍氏の考えを受け、高句麗古墳の影響を受けたものとし、百済の熊津時代（475年から538年）の初期からつくられたものであろうと推測した（文献128）。（第18図・第19図・第20-①図・第20-②図）



第17図 高山里古墳群7号墳（文献126）



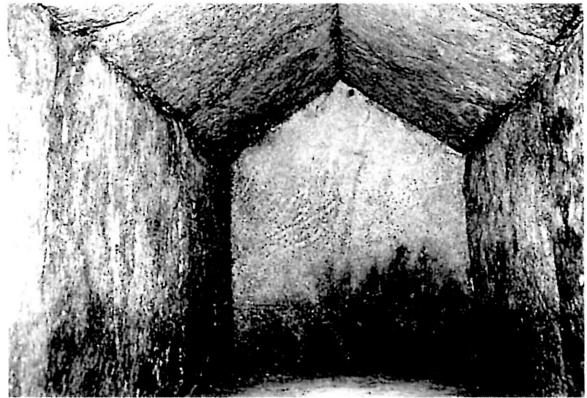
第18図 公州校村里6号墳（文献129）



第19図 公州柿木洞1号墳（文献128）



第20-①図 公州柿木洞1号墳
石室から外を見る 筆者撮影



第20-②図 公州柿木洞1号墳 石室内
筆者撮影

1976年、金基雄氏は百済の熊津時代の石室を分類し、第5類型として合掌形石室をあげ、やはり高山里7号墳の例から高句麗の影響を受けたものとし考察した。(文献95)

1984年、姜仁求氏は高山里7号墳にふれながらも、合掌形石室の起源を「百済のものか高句麗か中国かはまだわからない。」とした。そして年代的には「公州、扶余地方にはじめて出現した石室墳で、一中略一天井の断面が斜天井になっているのは、塼築墳のトンネル形天井を念頭において作ったようである。しかし石から受ける制約と築造技術の問題でΛ形になったものと考えられる。」とし、年代的にもその初現を6世紀前半とした(文献129)。

1989(平成元)年、東潮氏は合掌形石室への年代的位置づけについては直接ふれられていないが、百済中期の横穴式石室墳の変遷で、合掌形(斜天井)石室である校村里6号墳を6世紀後半以降に位置づけた(文献97)。

1992(平成4)年、藤井和夫氏は百済南部の横穴式石室について、安承周氏や姜仁求氏らの型式分類をもとに6類に分けた。この中で合掌形(斜天井)石室墳は公州地域のみにもみられるものとし、高句麗古墳である高山里7号墳の類例から、諸氏同様に高句麗との関係で考えた(文献101)。

以上、合掌形(斜天井)石室における韓国側資料の研究状況をみてきたが、全体として2つの流れをみることができる。

一つは、姜仁求氏などのいわれるように中国南朝の影響による塼築墳の系譜の中でとらえようとする考え方で、この論からするとその出現は公州(熊津時代)に限定され、早くても6世紀の前半以降あるいは6世紀後半以降というものである。いま一つ、金元龍氏などのように高句麗にその系譜を求めるものであり、公州に都が移った頃より築かれ始めたと考えられ、5世紀末葉頃あるいは6世紀以降にはその出現を考えることができるものである。

いずれにしても、現在の韓国での調査・研究成果では善光寺平の合掌形石室との関連を直接的に語ることには限界があるといえよう。

③善光寺平の合掌形石室

これまでみてきた善光寺平の資料や朝鮮半島の資料を参考に、資料的な制約から限界はあるが、現時点での考察をおこなってみたい。

近年、平成15年の飯島哲也氏（文献123）や平成20年の草野潤平氏（文献124）の研究により善光寺平における合掌形石室への詳細な分析・検討がおこなわれたが、ここでは平成8年に筆者の試みた考えを前提としつつ、不適切であったと考えられる箇所について若干手を加えた分類案を示すこととする。

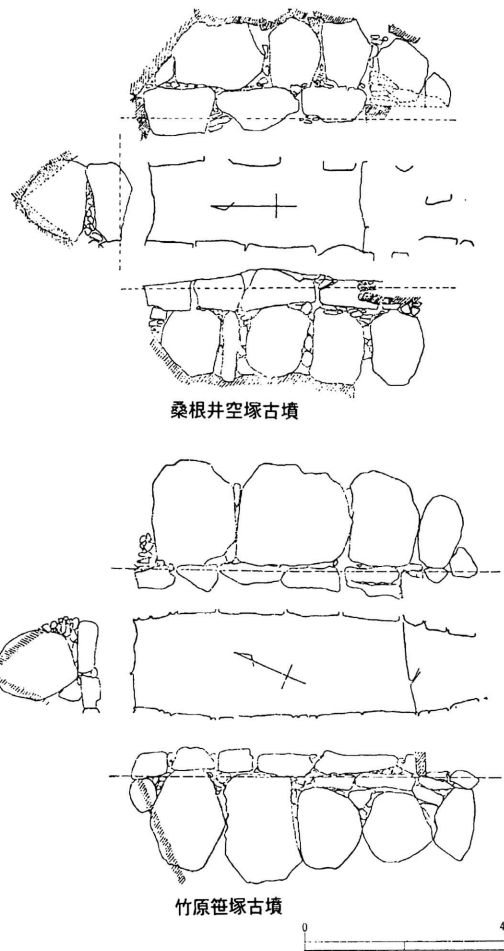
ここでまずいえることは、これまで先学によりいわれてきた‘合掌形石室’という用語の問題である。

古墳時代における埋葬施設の用語の中には、(石)棺・(石)槨・(石)室の用語がある。これらについての規模・構造面での簡単な説明を加えるならば、

- (石)棺＝直接遺骸を納めるもの。
- (石)槨＝棺を納めるものであるが、基本的には棺が納まる空間しかない。
- (石)室＝棺を納めるものであるが、槨とちがい人間が出入りでき、身動きする空間があり、棺を置いた部分以外に副葬品などを置いたりする空間が確保されている。

と考える。

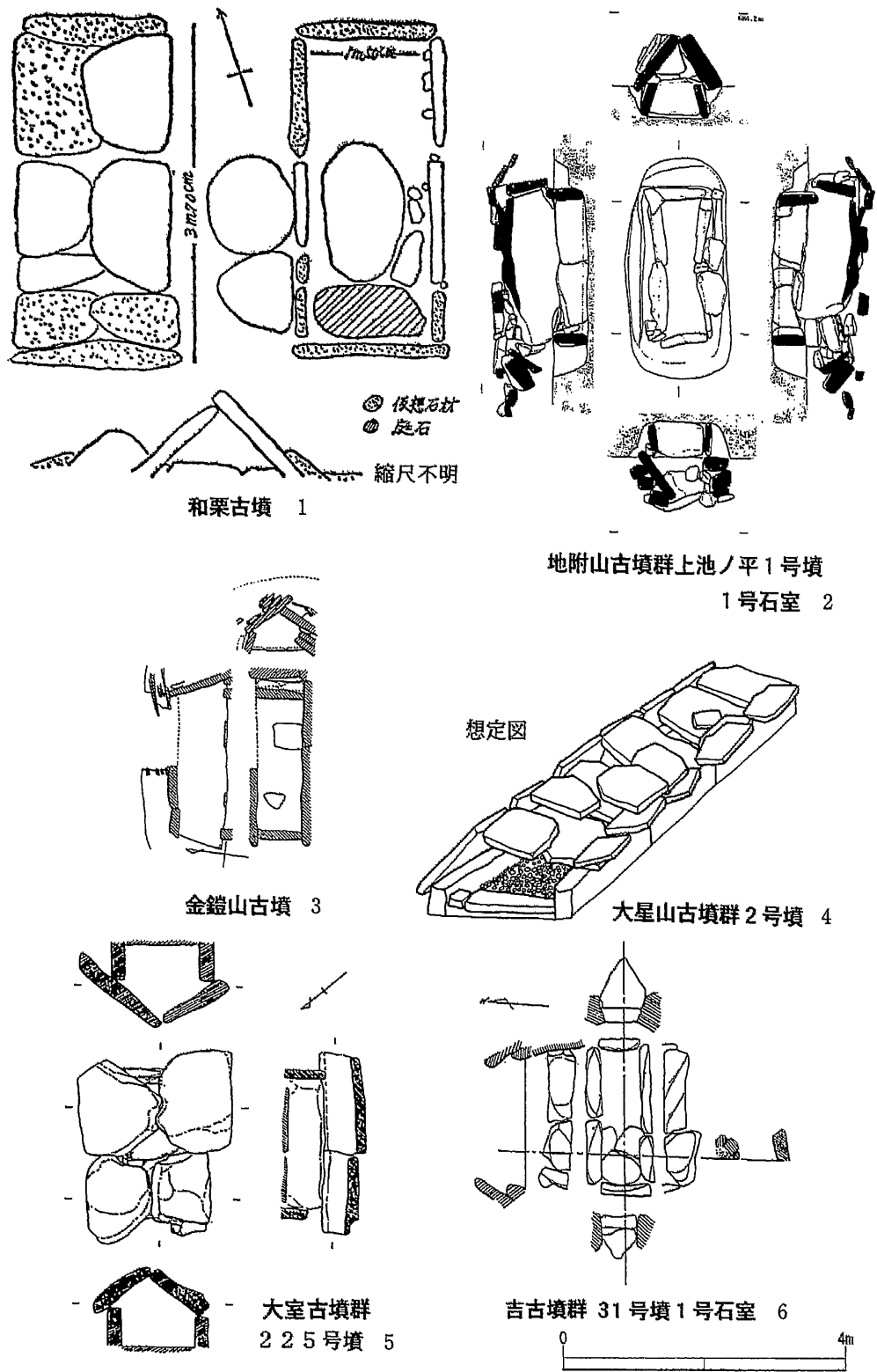
これらの定義からすると、これまで知られてきた合掌形の埋葬施設には、石棺状のものと石室状のものがあるとい



第21図 横穴式石室状合掌形石室（文献139）
1＝桑根井空塚古墳（文献117）
2＝竹原笹塚古墳（文献117）



第22図 竹原笹塚古墳 筆者撮影



第 23 図 竪穴系横口式石室状合掌形石室 (文献 139)

图中参考文献 1 = 文献 14 2 = 文献 118 3 = 文献 13

4 = 文献 55 5 = 文献 52 6 = 文献 115

える。この二形態を基本にしながら分類をおこなってみたい。しかし上記した埋葬空間・施設についての分類は、空間・施設内に棺があったのか、なかったのか、どのような埋葬がされたのかなど、調査成果を確認しえなければ、単純にその評価を与えられるものではないことから、以下の分類については埋葬施設の規模・構造面に重点をおいた分類とした。

A 横穴式石室状合掌形石室（第21図・第22図）

○山梨王塚型＝石室構造的には金鎧山古墳（金鎧山型）と同形と考えられ、側壁がありやや内傾する。天井石は大きな板石で内傾した側壁にたてかけるようにしてある。石室の規模は本格的な竪穴式石室、あるいは横穴式石室を思わせるほどに大きいものである。これは山梨県王塚古墳のみを例とする竪穴式石室の類型である。

例・山梨王塚（大塚）古墳（文献75）（帆立貝形前方後円墳）

長さ5.45 m・幅1.9 m・高さ（推定1 m）

○笹塚型＝羨道部と玄室部にわかれ、横穴式石室構造となっている。側石は1段あるいは2段に横積みし、その上に大きな板石の天井石をのせ中央部で合掌状に組合わせている。この横穴式石室型の中には羨道がつくもの、つかないものがあるとは考えられるが、遺存状態によってはその有無の確認が不確かなものもある。ここでは羨道の有無は問わず、山梨王塚型以外の横穴式石室構造のものを一括して含めるものとする。

例・竹原笹塚古墳（文献104）（積石塚古墳）

長さ6.8 m・幅2.0 m・高さ1.9 m

桑根井空塚古墳（文献104）（積石塚古墳）

長さ6.1 m・幅1.45 m・高さ1.17 m

菅間王塚古墳（文献104）（積石塚古墳）

長さ3.5 m・幅1.25 m・高さ不明

B 竪穴系横口式石室状合掌形石室（第23図・第24図）

○和栗型＝和栗古墳のみでしか確認されていない。側壁はなく大きな板石を二等辺三角形に天井石を組みあわせたもので、平面形は長方形となっている。

例・和栗古墳（文献114）（墳丘は不明）

長さ3.7 m・幅1.5 m・高さ0.85 m

○金鎧山型＝側壁がありやや内傾する。大きな板石の天井石は内傾した側壁にたてかけるようにしてある。平面形が長方形の箱形石棺状であり、竪穴系横口式石室状の中では大きいものである。

例・金鎧山古墳（文献130）（土石混合墳）

長さ2.43 m・幅0.69 m・高さ不明

○大室Ⅰ型＝平面形が長方形の箱形石棺状であるが、金鎧山型とちがい側壁は直立し高い。大きな板石の天井石は側壁直上にのり、中央部で合掌状に組合っている。

この型式には、両小口壁の高さのちがうものがあり、一方の高さの高い小口壁は小口壁（奥壁）と充分に考えられるが、高さの低い小口壁については、その意識に多少のちがいが見受けられ入口的構造を意識しているものと考えられる。この構造のものを両小口壁の高いものと別と考えるのならば新たな一型式を考えなくては行けないが、現段階では同一型式のものと理解しておく。

例・大室 168 号墳（文献 74）（積石塚古墳）

長さ 1.82 m・幅 0.84 m・高さ 0.94 m

○大室Ⅱ型 = 大室Ⅰ型に類似する

が、側壁はやや内傾気味である。大室Ⅰ型にくらべ奥小口が発達し、石棺自身の高さが低く、小型で粗形化している。この型式も大室Ⅰ型式同様に竪穴系横口式石室状構造を意図している。

例・大室 165 号墳第 2 主体部（文献 124）（積石塚古墳）

長さ 1.48 m・幅 0.54 m・高さ 0.68 m

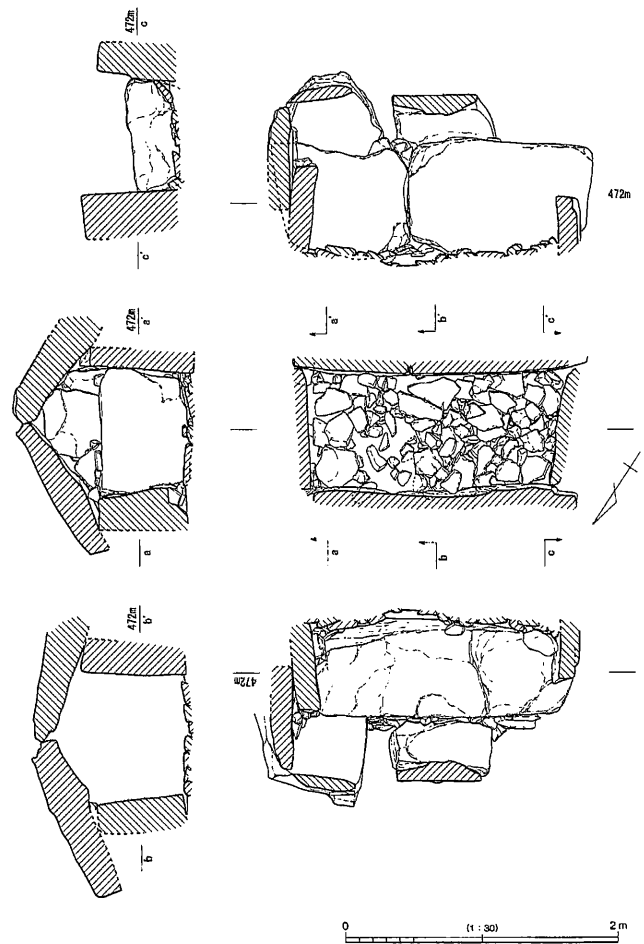
○大星山型 = 大室Ⅰ型に類似し、箱形石棺状であるが、合掌形をつくる天井石が、他型の天井石と異なり、小形の板石を多く重ねて合掌形天井をつくっている。

例・大星山 2 号墳（文献 55）（方墳）

長さ 2.1 m・幅 0.7 m・高さ不明

以上類型を設定したが、これをもとに朝鮮半島との関連や、その系譜などについて考えてみたい。

まず善光寺平における合掌形石室の出現年代については、これまで古くても 6 世紀初頭頃と考えられていたが、ここ数年来の明治大学による大室古墳群の調査において、大室 225 号古墳が 5 世紀末葉から 6 世紀初頭頃、大室 168 号古墳が須恵器 TK23 形式期とされ 5 世紀後半、さらに大室 156 号古墳は出土土器から 5 世紀前半のものであろうとした（文



第 24 図 大室古墳群 168 号墳（文献 74）

献 74・123)。

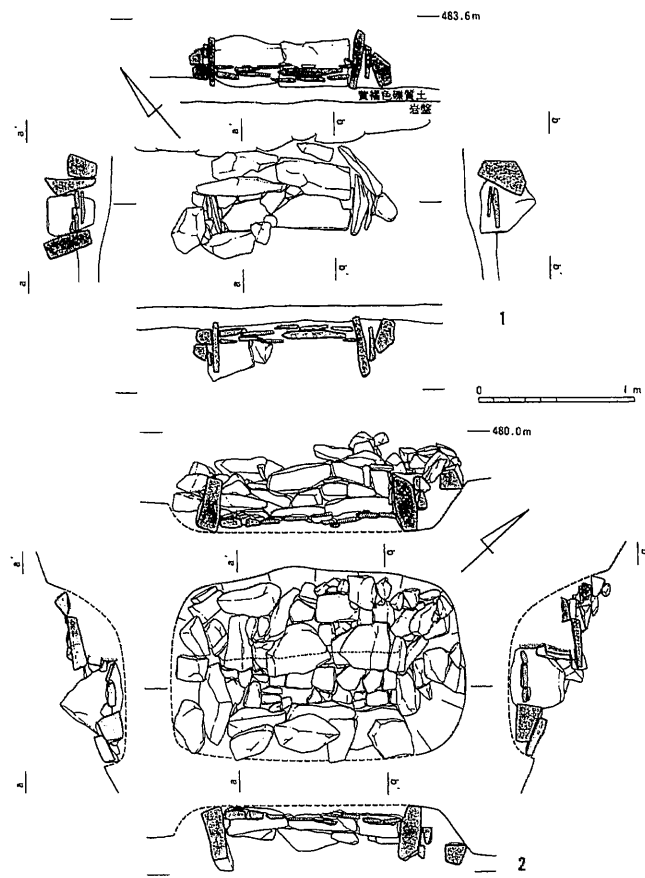
また大星山 2 号古墳については、石棺内からの出土資料より 5 世紀第 2 四半期とする年代が与えられ、合掌形石室の中で最も古いものと位置づけられることがわかった(文献 55)。

さらに森將軍塚古墳の調査では、墳丘をとりまくように小型石棺墓群がみつき、この中にも合掌形石室であろうと考えられるものが含まれていることがわかった。しかし天井石がすでになくなっているものが多く、天井構造については不明な部分が多いが、石棺の小口壁の形状から、3 号組合式箱形石棺や 38 号組合式箱形石棺の天井構造について合掌形の可能性も考えられる(文献 131)(第 25 図)。

しかし「組合式箱形石棺群のまとめ」をおこなった宇賀神誠司氏は、「38 号石棺のように三角形の小口石ではあるが、側壁構造からは屋根形天井と考えられないものもある。前方部東側隅角付近の石棺群は、総じて粗雑な造りである。こうしたことから、三角形の小口は、石棺構造の粗略さによるものと理解した方がいいように考えられるものである。この蓋石の屋根形天井に構築することについては、なお慎重な検討を要するが、ここでは構造の粗略さを指摘しておきたい。」としている(文献 132)(第 25 図)。

さて合掌形石室の系譜であるが、これまでの調査研究から竪穴系横口式石室タイプから横穴式石室タイプへと移行することは間違いなく、その意識や基本的な合掌技術においてその一連性がうかがえる。

これらの系譜はどこに求められるのであろうか。大塚初重氏が指摘するように家形石棺との関係では、その系譜を求められるものではない。それでは齊藤忠氏が朝鮮半島での合掌形天井石室の事例を紹介して以来の朝鮮半島への系譜を求められるのであろうか。現在我々が知りうる資料は、百済の都公州に 5 例、そして高句麗の地高山里に 1 例があるのみである。その石室の構造について図面や写真、あるいは実際に見学をしてきた所見から、



第 25 図 森將軍塚古墳裾部

上= 3 号組合式箱形石棺 下= 38 号組合式箱形石棺

(文献 131・132)

たとえば公州柿木洞1号墳・2号墳の斜天井石室をみると、‘合掌形石室’とするよりはむしろ、日本でいう‘家形石棺’式の横口式石室とでも表現した方がよいような構造をしており、善光寺平での合掌形石室への系譜を直接たどることは非常に危険な部分があると考えられ、もしあえてその系譜を求めるとするならば写真・図面からで詳細はわからないが、公州錦町1号墳や公州校村里6号墳（文献106）に、より類似性が求められるようにも思われる。

さらに高山里7号墳の石室の構造をみると、東側室に三角持ち送り天井を用いながらも、西側室を斜天井（屋根形）天井にしている（文献127）。

百済の都公州での斜天井石室については、武寧王陵でのトンネル形石室からの構造上の系譜をたどる考えがあるが、これが事実であるならば、斜天井（屋根形）を構築するにあたっての意識とは異なり、その系譜はまったく異なったものとなる。また年代的にも公州に都がおかれ、トンネル形の石室が構築されて以降ということから、早く考えても6世紀前半以降であり、さらには石室構造上の変遷では6世紀後半以降という年代にもなり、善光寺平の合掌形石室の年代よりも後出となる。

また公州の柿木1号墳ほかの斜天井石室の系譜についても、高山里7号墳の西側室を斜天井（屋根形）石室との関連性があるかについては不明である。

これまでの合掌形石室の研究史から、公州（朝鮮半島）での斜天井石室と善光寺平での合掌形石室を関連づけるとすれば、以下の条件が必要と考える。

- 1 = 現在知られている公州での斜天井石室のみならず、今後発見されるであろう斜天井石室の系譜が、構造上の変遷論のみで語られることなく、その年代も遺物論によって5世紀前半以前にまで遡ること。
- 2 = 日本の初期須恵器に地方窯ごとのバラエティーがみられるのは、加耶や百済から来た工人達の地域差に由来するものと考えるが、現在公州で発見されている斜天井石室以外に善光寺平的な斜天井石室が発見されるか、あるいは百済の他地域か加耶地域で同じ系譜の石室が求められること。

以上のことを総括するならば、善光寺平の合掌形石室は徳島県丹田古墳や愛媛県妙見山1号墳など西日本の前期古墳にみられる合掌形の竪穴式石室や佐賀県谷口古墳東石室など北九州でみられる合掌形の初期横穴式石室にそのルーツを求められるか否かは現時点では難しい。現時点で確認できたことは、大室Ⅰ型の竪穴系横口式石室タイプがしだいに粗形化し大室Ⅱ型となり、その後横穴式石室タイプへと推移することである。竪穴系横口式石室タイプである大星山型（大星山2号墳石室）～大室Ⅰ型（大室156号墳石室～大室168号墳石室）～大室Ⅱ型（大室165号墳第2石室）～大室241号墳と推移し、さらにこれに笹塚型（笹塚古墳石室）の横穴式石室タイプが続くことである。横穴式石室タイプの合掌形石室の変遷については、今後の詳細な調査成果を待ち検討を進めたい。

いずれにしても現在知られている資料から合掌形石室のルーツを朝鮮半島に求めることには、上記の条件を満たさない限り無理があると言わざるをえないのが現在の研究レベル

であると考える。

4 善光寺平での積石塚古墳と合掌形石室

まずそれぞれの分布については、積石塚古墳は善光寺平、麻績盆地、松本市域、大町市域、茅野市域に分布し、特に善光寺平の石のみによって構築された純然たる積石塚古墳は、小林氏（文献58）が指摘しているように、千曲川東岸の中央部、須坂・若穂・松代地区に分布している。また県内の総数であるが、土石混合墳を含めると600基以上と考えられる。

合掌形石室は善光寺平にのみ分布し、積石塚古墳の主体部になるものについては、小林氏（文献59）が指摘しているように、千曲川東岸の中央部、須坂・若穂・松代地区に分布している。また県内の総数であるが、46基以上と考えられる。現在のところ、善光寺平以外では、山梨県王塚（大塚）古墳、山形県松沢古墳群1号墳、同2号墳、福島県長井前ノ山古墳の4例だけとなる。

それぞれの出現はどうであろうか。長野県内の積石塚古墳は、4世紀後半に円形積石塚古墳の八丁鎧塚1号墳が造られ、5世紀前半には方形積石塚古墳の大星山4号墳や安坂將軍塚1号墳が造られる。そしてこの後、長原古墳群や大室古墳群などで小形積石塚古墳が現れるが、この古墳群の初期段階に合掌形石室が造られることとなる。現在では5世紀前半から中頃の時期に出現をみることとなる。

それでは周辺地域での積石塚古墳群の様相はどのようなものであろうか。群馬県高崎市剣崎長瀬西遺跡では、河原石を2段小口積みにして、一辺約4mの方形積石塚古墳他4基と積石塚古墳的要素を含む方墳3基が調査されている。方墳である10号墳からは垂飾付耳飾や韓式系土器が出土していることから、渡来系集団の墓の可能性が指摘され、築造時期としては5世紀後半から6世紀初頭と考えられている（文献62・69・71）。また静岡県浜北市内野二本ヶ谷積石塚古墳群では、須恵器TK208型式の時期に、盛土古墳の立地とは異なる谷地形に積石塚古墳群の築造が開始されるが、その他について周辺盛土古墳とは異なる様相がうかがえないとしたが（文献61・65・67）、5世紀後半に積石塚古墳群が築造され、盛土古墳と積石塚古墳の立地がはっきりと区別されていることは事実である。また内野二本ヶ谷積石塚古墳群の立地については、大室古墳群での大室谷・北谷支群での立地に類似している。

しかし山梨県甲府市横根・桜井積石塚古墳群については、今のところ5世紀後半に築造が開始されたとする所見は得られていないようであり、渡来系集団との関わりについても否定的である（文献49）。

横根・桜井積石塚古墳群以外の剣崎長瀬西遺跡や内野二本ヶ谷積石塚古墳群については、それぞれに墳丘形態に違いをみせながらも確実に5世紀後半の時期に築造が開始されていることは、単なる偶然とは思えない。

また合掌形石室については、山形県南陽市の松沢古墳群1号墳・2号墳で確認され（文献54）、また福島県河沼郡会津坂下町の前方後円墳である長井前ノ山古墳の石室で確認さ

れている（文献 121）。

5 世紀後半、特に須恵器 TK208 型式の時期は、東国では、TK208 型式以前の初期須恵器の集落内への持ち込みが増加し、その分布の広まりを見せる時期である。善光寺平でも同様な状況となるが、千曲川西岸の長野市本村東沖遺跡のように、集落によってはこの時期の多くの竪穴住居に初期須恵器が持ち込まれ、カマドが付設される状況が見られ、あわせての竪穴住居が間仕切り構造となり、その特異性も見られる（文献 133）。また千曲川東岸の長野市榎田遺跡では、5 世紀後半に木製黒漆塗り壺鐙や木製鞍（後輪）が製作・保有されていたことが確認されている（文献 134）。

これら須恵器の所持やカマドの付設、そして馬具の製作・保有という乗馬の風習など新たな生活習慣への変化は、渡来人あるいは渡来系の人々など「新来文化の担い手」により西日本や東日本同様に新来文化が善光寺平に伝えられ、また新たな文化をいち早く受け入れ「新来文化の担い手」に成長した在地の人々の存在による結果と考えられる。

それではこの「新来文化の担い手」達は我々に何を残したのであろうか。渡来人あるいは渡来系の人々は朝鮮半島あるいは畿内から善光寺平に来るにあつたて多くの生活必需品や装飾品を持参して来るであろうか。たとえば彼らは陶質土器については須恵器が代用できたし、韓質系土器については土師器が代用できた。だからこそ陶質土器や韓質系土器が出土することの意味は大きく、逆に渡来系遺物が少なくともそれは在地集団や社会に抵抗なく同化したものと理解できるものではあるまいか。

このようなことから、善光寺平では本村東沖遺跡での早い段階でのカマド構築や須恵器使用、また榎田遺跡での木製馬具出土の事例からもわかるように、「渡来人」あるいは「渡来系」の人々による朝鮮半島文化をいち早く受け入れた在地の「新来文化の担い手」の存在がうかがえ、「渡来人」・「渡来系」の人々・在地の「新来文化の担い手」らにより新たな墓制として積石塚古墳である鎧塚 1 号墳、大星山 4 号墳あるいは安坂將軍塚 1 号墳が築造され、この後長原古墳群でのニカゴ塚古墳や大室古墳群大室谷支群・北谷支群で初現的積石塚古墳が築造されたと考えられる。また積石塚古墳同様に「渡来人」・「渡来系」の人々・在地の「新来文化の担い手」らにより、新たな埋葬施設として大星山 2 号墳の合掌形石室が考案され「善光寺型合掌形石室」が構築されたものと考えられるが、その系譜については現状では不明である。

八丁鎧塚 1 号墳や 2 号墳の被葬者について考えてみると、4 世紀後半に善光寺平に到達した「渡来人」あるいは「渡来系」の人々は、八丁鎧塚 1 号墳の被葬者のように在地に融合しながら成長し、周辺の前方後円墳に副葬される品々を持つほどに成長しながらあえて積石塚古墳を造ったものと考えられる。そしてその 100 年後、血縁・地縁で結ばれた鎧塚 2 号墳の被葬者はあえて同じ墳丘を造り、また独自のルートで朝鮮半島からもたらされたベルト飾りを入手したと考えられる。

また突然現れた合掌形石室について、現時点ではその系譜は不明であるが、「渡来人」あるいは「渡来系」の人々により何らかの情報の中で造り出されたものと考えられる。

このような社会状況が在地の人々に影響を与えた結果、在地の人々が「新来文化の担い手」として成長し、千曲川東岸地域の積石塚古墳を造り、埋葬主体として採用された合掌形は、この後積石塚古墳のみならず盛土古墳の埋葬施設として用いられることとなる。

積石塚古墳については、韓国東岸の鬱陵島積石塚群が加耶の墓制の影響を受けていたり（文献135）、福岡県糟屋郡新宮町相島積石塚群は、高句麗積石塚の影響が見られるなどのこと（文献63）をふまえるならば、前回の論考（文献4）でも述べたように、時代の変化とともに新たな形態の積石塚を受け入れながら、シナノにおいては善光寺平あるいはシナノ的な積石塚古墳を築造し、また合掌形石室は独自の変化を遂げていくこととなる。

大室古墳群と剣崎長瀬西遺跡や内野二本ヶ谷積石塚古墳群とは、積石塚古墳の形態に大きな違いを見せているが、この違いはそれらを築造した「渡来人」・「渡来系」の人々のルーツや在地の人々の受け入れ方の違いと考える。

朝鮮半島における斜天井石室のあり方をみるならば、公州においても高山里においても現在のところ積石塚との関連はなく、すべて盛土古墳につくられている。このことからすれば、善光寺平の大室古墳群でのあり方に特異性がみられる。

また積石塚古墳である松沢古墳群1号墳・2号墳（文献54）や福島県会津坂下町の盛土古墳の前方後円墳である長井前ノ山古墳については（文献121）、千曲川東岸の合掌形石室をもつ初期積石塚古墳を構築した善光寺平の「新来文化の担い手」達の一派が新来文化伝播のために移動した結果であると考え、前方後円墳である長井前ノ山古墳になぜ合掌形石室が採用されたかについては、今後検討する必要があると考える。

積石塚古墳や合掌形石室が造られ始めた4世紀後半から5世紀代の善光寺平の様相はどのようなものであったのか。陶質土器や初期須恵器の用いられ方や須恵器生産、さらには馬具の出土状況などから（文献136）、朝鮮半島での地域文化が「渡来人」・「渡来系」の人々により新たな文化として持ち込まれ、在来の善光寺平の人々が新たな文化を受け入れることにより「新来文化の担い手」に成長し、「渡来人」・「渡来系」の人々や持ち込まれた新たな文化が、善光寺平南域の人々や文化の中に同化していったものと考えられる。

まとめにかえていま一度整理し終わりにしたい。

八丁鎧塚1号古墳や安坂將軍塚古墳群、そして大室古墳群での4世紀後半から6世紀前半にかけての積石塚古墳は、盛土古墳が造られた地域にあえて積石による墳墓を構築している意識を考えれば、初期積石塚古墳については在地の人々とは異なった意識をもった人々、「渡来人」あるいは「渡来系」の人々の墓と考えられる。

合掌形石室については、善光寺平に合掌形石室が造られる素地は見あたらず突然新たな石室として造られる。また突然出現し、限られた時期や地域に構築されたことを考えれば、在来の人々による構築ではなく、「渡来人」や「渡来系」の人々のような新たな情報を持った人々の発想による墓であったことが想定される。また6世紀代の横穴式石室構造の合掌形石室が特定地域に構築されることを考えれば、天井を「合掌形」にすることに深い意味があったことはまちがいない。

このように積石塚古墳と合掌形石室はそれぞれの理由により善光寺平で採用されることとなる。初現期の合掌形石室である大星山2号墳が盛土古墳であり、また初現期の積石塚古墳である八丁鎧塚1号墳や安坂將軍塚1号墳は合掌形石室を採用していないことからわかるように、本来積石塚古墳と合掌形石室は墳墓形態として直接関係があったものではない。

しかし大室古墳群での5世紀中頃から6世紀前半にかけて構築された初現期の合掌形石室を埋葬主体とする積石塚古墳は、大室第168号墳から馬形土製品が出土しているように、馬匹生産に関わるなど新来文化を伝えた「渡来人」あるいは「渡来系」の人々の墓であり、徐々に在地の新来文化を受け入れた人々を含めた墓となっていくと考えられる。その現れが吉古墳群などにみられる盛土古墳への合掌形石室の採用であったと考えられる。

4世紀後半から6世紀前半の善光寺平は、他地域同様朝鮮半島からの新来文化を受け入れ新たな生活様式へと変化をみせる。決して特別な地域ではない。しかし、大室古墳群を中心とする合掌形石室を埋葬施設とする積石塚古墳の出現は、特定の限られた地域と時期に造られ、他地域には見られない特異な景観を形成したことは事実である。

最後に積石塚古墳や合掌形石室すべてを「渡来人」の墓とする必要はないが、構築された4世紀後半から6世紀前半の時代背景を考慮すれば、「渡来人」の存在を否定する理由は何もないと考える。

参考文献

- 1 小林行雄「積石塚」『図解 考古学辞典』東京創元社 1959年
- 2 藤田亮策「積石塚」『日本考古学辞典』東京堂出版 1962年
- 3 大塚初重 他「積石塚」『最新 日本考古学用語辞典』柏書房 1996年
- 4 西山克己「信濃の積石塚古墳と合掌形石室」『長野県埋蔵文化財センター研究論集 長野県の考古学』長野県埋蔵文化財センター 1996年
- 5 西山克己「科野の積石塚古墳と合掌形石室」『大塚初重先生頌寿記念考古学論集』東京堂出版 2000年
- 6 佐藤勇太郎「讃岐高松古墳」『東京人類学会報告』第2巻第12号 東京人類学会 1887年
- 7 坪井正五郎「日本の積み石塚」『東京人類学会報告』第15巻第169号 東京人類学会 1900年
- 8 笠井新也「石塚の研究」『人類学雑誌』第32巻第1号 日本人類学会 1916年
- 9 唐沢貞次郎・岩崎長思「鎧塚」『長野県史跡名勝天然記念物調査報告』第1輯 長野県 1923年
- 10 矢沢頼道「屋根型天井の石槨を有するケールン」『長野県史跡名勝天然記念物調査報告』第2輯 長野県 1924年
- 11 鳥居龍蔵「第3章 7、永明村」『諏訪史』第1巻 信濃教育会諏訪部会 1924年
- 12 岩崎長思「金鎧山古墳」『長野県史跡名勝天然記念物調査報告』第5輯 長野県 1925年
- 13 森本六爾『金鎧山古墳の研究』雄山閣 1926年
- 14 岩崎長思「和栗古墳」『長野県史跡名勝天然記念物調査報告』第9輯 長野県 1928年
- 15 小林秀夫「善光寺平における積石塚古墳の諸問題 -特に墳丘築造について-」『長野県考古学会誌』第21号 長野県考古学会 1975年
- 16 長野県埴科郡松代町「第2編 第2章 3、積石塚」『松代町史』上巻 長野県埴科郡松代町 1929年

- 17 梅原末治『讃岐高松石清尾山石塚の研究 京都帝国大学文学部考古学研究報告』第12輯 京都帝国大学文学部 1933年
- 18 笠井新也「讃岐国石清尾山の石塚に就いて」『考古学雑誌』第23巻第12号 日本考古学会 1933年
- 19 後藤守一「積石塚の問題」『考古学雑誌』第23巻第12号 日本考古学会 1933年
- 20 栗岩英治(醉古)「大化前後の信濃と高句麗遺跡」『信濃』第1次第7巻第5・6号 信濃史学会 1934年
- 21 藤森栄一「考古学上よりしたる古墳墓立地の観方」『考古学』第10巻第1号 東京考古学会 1939年
- 22 大場磐雄「信濃国坂井村の積石塚に就いて」『信濃』第2次第56号 信濃史学会 1947年
- 23 大場磐雄「信濃国の古墳群とその性格」『上代文化』第21輯 上代文化研究会 1951年
- 24 栗林紀道『大室古墳群畧図 - 第四回基礎調査』 1952年
- 25 水野清一・樋口隆康・岡崎 敬『対馬 - 玄界における絶島対馬の考古学的調査 -』 東亜考古学会 1953年
- 26 大塚初重「長野県埴科郡大室古墳群の性格」『日本考古学協会 15回総会研究発表要旨』 日本考古学協会 1955年
- 27 栗林紀道『信濃考古総覧』 信濃史料刊行会 1956年
- 28 永峯光一・亀井正道「長野県須坂市鎧塚古墳の調査」『考古学雑誌』第45巻第1号 日本考古学会 1959年
- 29 尾崎喜左雄「群馬県に発見の積石塚」『信濃』第3次第13巻第1号 信濃史学会 1961年
- 30 大塚初重「信濃 大室古墳群」『古代学研究』30 古代学研究会 1962年
- 31 斉藤 忠「積石塚考」『信濃』第Ⅲ次第16巻第5号 信濃史学会 1964年
- 32 大場磐雄・原嘉藤・寺村光晴・桐原 健「長野県東筑摩郡坂井村積石塚の調査1・2」『信濃』第Ⅲ次第16巻第4・6号 信濃史学会 1964年
- 33 大場磐雄「第3章第4節積石塚について」『信濃浅間古墳』 長野県東筑摩郡本郷村 1966年
- 34 大塚初重・小林三郎・下平秀夫『信濃長原古墳群』 長野県考古学会 1968年
- 35 大塚初重「長野県大室古墳群」『考古学集刊』第4巻第3号 東京考古学会 1969年
- 36 原 嘉藤・大塚初重・斉藤 忠・大場磐雄・三上次男・森 浩一 他『特集 積石塚をめぐる諸問題 長野県考古学会誌』第6号 長野県考古学会 1969年
- 37 宮坂光昭「茅野市大塚古墳について」『長野県考古学会誌』第7号 長野県考古学会 1969年
- 38 米山一政・倉田芳郎 他『大室古墳群北谷支群緊急発掘調査報告書』 長野県・大室古墳群調査会 1970年
- 39 桐原 健「積石塚の分布」『信濃』 学生社 1971年
- 40 坂詰秀一・亀井正道・杉山晋作・桐原 健『特集・積石塚 考古学ジャーナル』No.180号 ニュー・サイエンス社 1980年
- 41 倉田芳郎・中野 宥・仲野泰裕『長野・大室古墳群 - 分布調査報告書 - 先史』13 駒沢大学考古学研究室 1981年
- 42 篠崎建一郎「第4章第2節 大町市の古墳・考古資料」『大町市史 原始古代中世・原始古代中世資料』 大町市 1985年
- 43 西谷 正「高句麗と古代の日本」『古代を考える』44 古代を考える会 1987年
- 44 桐原 健「(13) 積石塚の分布」『長野県史 考古資料編』全1巻(4) 遺構・遺物 長野県史刊行会 1988年
- 45 桐原 健『積石塚と渡来人』 東京大学出版会 1989年
- 46 宮下健司「第2編第3章第1節 麻績川流域に葬られた首長たち」『麻績村誌』上巻(自然編・歴史編) 麻績村誌編纂会 1989年
- 47 大塚初重「積石塚の再検討」『日本歴史』第510号 日本歴史学会 1990年

- 48 松本市教育委員会『針塚古墳の発掘』 1991年
- 49 宮澤公雄「第V章第1節 山梨県における積石塚の分布と研究の現状」『横根・桜井積石塚古墳群調査報告書』 甲府市教育委員会 他 1991年
宮澤公雄「横根・桜井積石塚古墳群の検討 -分布調査の成果を中心として-」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』 第4集 帝京大学山梨文化財研究所 1992年
- 50 鈴木直人「墳丘構造と石室の構築について」『大室古墳群』 (助)長野県埋蔵文化財センター 他 1991年
- 51 大塚初重 他『大室古墳群』 (助)長野県埋蔵文化財センター 他 1992年
- 52 大塚初重「東国の積石塚古墳とその被葬者」『国立歴史民俗博物館研究報告』 第44集 国立歴史民俗博物館 1992年
- 53 笹沢 浩「第5章第3節 善光寺平の古墳」『長野県須坂市 本郷大塚古墳』 長野県須坂市教育委員会 1992年
- 54 山口 明「新たに確認された合掌形石室! -山形県南陽市松沢古墳群-」『長野市立博物館だより』 第32号 長野市立博物館 1995年
- 55 土屋 積 他「大星山古墳群」『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』 20 長野県埋蔵文化財センター 他 1996年
土屋 積「大星山古墳群」『長野県埋蔵文化財センター年報』 7 (助)長野県埋蔵文化財センター 1990年
- 56 土生田純之「長野市地附山古墳群(上池ノ平古墳)について」『専修考古学』 第6号 専修大学考古学会 1996年
- 57 浜北市教育委員会『浜北市内野二本ヶ谷積石塚古墳群発掘調査 現地説明会資料』 1996年
- 58 高崎市教育委員会『剣崎長瀬西遺跡 現地説明会資料』 1996年
- 59 小林秀夫「千曲川流域における古墳の動向 -5世紀代の古墳を中心として-」『長野県考古学会誌』 第82号 長野県考古学会 1996年
- 60 須坂市教育委員会『八丁鎧塚古墳』 1997年
- 61 浜北市教育委員会『内野二本ヶ谷積石塚古墳群・二本ヶ谷古墳群 現地説明会資料』 1997年
- 62 高崎市教育委員会『剣崎長瀬西遺跡 現地説明会資料』 1996年
黒田 晃「古墳時代の渡来人のむら -高崎市剣崎長瀬西遺跡」『季刊 考古学』 第62号 雄山閣出版 1998年
- 63 西田大輔 他『相島積石塚群』 新宮町教育委員会 1998年
- 64 飯島哲也「積石塚古墳を新発見! 西前山古墳」『公立埋文協会報』 第20号 全国公立埋蔵文化財連絡協議会 1998年
- 65 久野正博『静岡県浜北市内野二本ヶ谷積石塚古墳群』 浜北市教育委員会 1998年
- 66 飯島哲也「科野の積石塚古墳」『東国の積石塚古墳』 山梨県考古学協会 1999年
- 67 浜北市教育委員会『内野古墳群』 2000年
- 68 土生田純之「積石塚古墳と合掌形石室の再検討 -大室古墳群を中心として-」『福岡大学総合研究所報』 第240号 総合科学編(第3号) 福岡大学総合研究所 2000年(2002年に専修考古学第9号に再録)
- 69 高崎市教育委員会『剣崎長瀬西遺跡』 1 2001年
- 70 飯島哲也「科野における石積み墳丘の古墳 -いわゆる積石塚古墳の墳丘構造分類」『関西大学考古学研究室開設五拾周年記念 考古学論叢』 関西大学 2003年
- 71 土生田純之編「Ⅶ論考 4 f 剣崎長瀬遺跡Ⅰ区における方墳の性格」『剣崎長瀬西5・27・35号墳 -剣崎長瀬西遺跡2-』 専修大学文学部考古学研究室 2003年
- 72 土生田純之「第2部渡来人と古墳 7群馬県における積石塚古墳の諸相」『古墳時代の政治と社会』 吉川弘文館 2006年

- 73 木下正史「第5章 まとめ」『千曲市内古墳範囲確認調査報告書 -五量塚古墳・堂平大塚古墳・杉山古墳群-』千曲市教育委員会 2007年
- 74 小林三郎・大塚初重・石川日出志・佐々木憲一・草野潤平 編『信濃大室 積石塚古墳群の研究』Ⅲ 明治大学文学部考古学研究室 他 2008年
- 75 仁科義男「大塚古墳」『山梨県史蹟名勝天然記念物調査報告』第5輯 山梨県 1931年
- 76 栗岩英治（醉古）「一墳双在の合掌石棺」『信濃』第1次第3巻第12号 信濃史学会 1934年
- 77 小野勝年「第4章古墳 長丘村田麦林畔1号墳」『下高井』長野県教育委員会 1953年
- 78 坂本太郎 他『信濃資料』第2巻 信濃資料刊行会 1952年
- 79 大場磐雄 他『信濃資料』第1巻上 信濃資料刊行会 1956年
- 80 大場磐雄 他『信濃資料』第1巻下 信濃資料刊行会 1956年
- 81 西川 宏「中国における高句麗考古学の成果と課題」『青丘学術論集』第2集（助韓国文化研究振興財団）1992年
- 82 陳 大為「桓仁県考古調査発掘簡報」『考古』1960年1期 1960年
- 83 方 起東・劉 振華「統一的多民族国家的歴史見証」『文物考古工作三十年』1979年
- 84 李 殿福「集安高句麗墓研究」『考古学報』1980年2期 1980年
- 85 陳 大為『試論桓仁高句麗積石墓の類型年代乃其演變』遼寧省考古博物館学会成立大会会刊 1981年
- 86 方 起東・林 至徳「集安洞溝両座樹立石碑の高句麗古墓」『考古与文物』1983年2期 1983年
- 87 王 承礼「吉林・遼寧の高句麗遺跡」『考古与文物』1984年6期 1984年
- 88 林 至徳・耿 鉄華・傅 佳欣・張 雪岩・孫 仁傑『集安県文物志』吉林省文物志編委会 1984年
- 89 方 起東「高句麗石墓の演進」『博物館研究』1985年2期 1985年
- 90 魏 存成「高句麗積石墓の類型和演變」『考古学報』1987年3期 1987年
- 91 田村晃一「高句麗の積石塚」『東北アジアの考古学 [天地]』六興出版 1990年
- 92 李 殿福「青銅器時代から唐代に至る集安地方の墳墓の変遷」『高句麗・渤海の考古と歴史』学生社 1991年
- 93 田村晃一「高句麗積石塚の構造と分類について」『考古学雑誌』第68巻第1号 日本考古学会 1982年
- 94 서울대학교博物館・서울대학교考古学科『石村洞積石塚発掘調査報告、서울대학교考古人類学叢刊』第6冊 1975年
서울대학교博物館『石村洞3號墳東琴古墳群整理調査報告、서울대학교考古人類学叢刊』第12冊 1986年
- 95 金 基雄『百済の古墳』学生社 1976年
- 96 金 元龍『韓国考古学概説』六興出版 1984年
- 97 東 潮・田中俊明『韓国の古代遺跡 2百済・伽耶篇』中央公論社 1989年
- 98 金 元龍「三国時代 高句麗」『韓国の考古学』講談社 1989年
- 99 林 永珍「三国時代 百済（ソウル地区）」『韓国の考古学』講談社 1989年
- 100 朴 東百・李 盛周・金 亨坤『漆谷多富洞古墳群 昌原대학교博物館学術調査報告』第4冊 昌原대학교博物館 1991年
- 101 藤井和夫「東アジアの横穴式石室墓」『新版古代の日本 ②アジアからみた古代日本』角川書店 1992年
- 102 東 潮「Ⅳ積石塚の成立と発展 -前期・中期の墓制- 積石塚の変遷と分布」『高句麗の歴史と遺跡』中央公論社 1995年

- 103 桐原 健「安坂古墳群」『長野県史 考古資料編 全1巻(3) 主要遺跡(中・南信)』長野県史刊行会 1983年
- 104 小林秀夫「竹原笹塚古墳・菅間王塚古墳・桑根井空塚古墳」『長野県史 考古資料編 全1巻(2) 主要遺跡(北・東信)』長野県史刊行会 1982年
- 105 永峯光一「八丁鎧塚1・2号墳」『長野県史 考古資料編 全1巻(2) 主要遺跡(北・東信)』長野県史刊行会 1982年
- 106 大塚初重・小林三郎編『信濃大室 積石塚古墳群の研究』Ⅱ 東京堂出版 2006年
- 107 樋畑雪湖「信濃国埴科郡大室古墳群についての一考察」『考古学雑誌』第16巻第1号 日本考古学会 1928年
- 108 斉藤 忠「屋根形天井を有する石室墳について」『考古学雑誌』第34巻第3号 日本考古学会 1944年
- 109 家田淳一 他『史跡谷口古墳保存修理事業報告書』佐賀県浜玉町教育委員会 1991年
- 110 森 浩一 他『丹田古墳調査報告』同志社大学文学部文化学科 1971年
- 111 河上邦彦 他『黒塚古墳 現地説明会資料』大和古墳群調査委員会 1998年
檀原考古学研究所(編)『大和の前期古墳 黒塚古墳調査概報』学生社 1999年
- 112 軽部慈恩「公州に於ける百済古墳」『考古学雑誌』第26巻第3号 日本考古学会 1936年
- 113 米山一政『長野市上松池ノ平古墳』プリント 1956年
米山一政「地附山古墳・上池ノ平1号古墳」『長野県史 考古資料編 全1巻(2) 主要遺跡(北・東信)』長野県史刊行会 1982年
- 114 米山一政・下平秀夫「長野県長野市若槻吉3号古墳調査概報 -合掌形石室の諸問題-」『信濃』第Ⅲ次第19巻第4号 信濃史学会 1967年
- 115 米山一政「第1編第4章第3節 上水内郡の古墳」『長野県上水内郡誌 歴史編』上水内郡誌編集会 1976年
- 116 小林秀夫「合掌形石室の諸問題」『中部高地の考古学』長野県考古学会 1978年
- 117 米山一政「第2編第1章第3節 更埴地方の古墳」『更級埴科地方誌』第2巻原始古代中世編 更級埴科地方誌刊行会 1978年
- 118 青木和明 他『地附山古墳群 -上池ノ平1~5号古墳緊急発掘調査報告書-』長野市教育委員会 他 1988年
- 119 土生田純之「信濃における横穴式石室の受容」『信濃』第49巻第4・5号 信濃史学会 1997年
- 120 風間栄一「長野市地附山古墳群上池ノ平2号墳出土の須恵器」『信濃』第50巻第7号 信濃史学会 1998年
- 121 菊池芳朗「福島県会津坂下町長井前ノ山古墳 -“合掌形石室”をもつ前方後円墳の調査-」『考古学ジャーナル』No.492号 ニュー・サイエンス社 2002年
福島県立博物館『長井前ノ山(銚子ヶ森)古墳 現地説明会 資料』2001年
- 122 風間栄一「信濃善光寺平における後期古墳の様相」『東海の後期古墳を考える』東海考古学フォーラム三河大会実行委員会 2001年
- 123 飯島哲也「合掌形天井の埋葬施設について -いわゆる合掌形石室についての再整理-」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第11集 帝京大学山梨文化財研究所 2003年
- 124 草野潤平「大室古墳群における合掌形石室の変遷について」『信濃大室 積石塚古墳群の研究』Ⅲ 明治大学文学部考古学研究室 他 2008年
- 125 長野市教育委員会 他「大室241号墳の発掘調査」『史跡大室古墳群 平成22年度 発掘調査見学会 資料』2010年
- ※ 長野市教育委員会風間栄一氏のご教示による。
- 126 金 元龍『韓国考古学概論』東出版 1972年
- 127 金 元龍「高山里7号墳」『昭和12年度古蹟調査報告』朝鮮総督府 1938年

朝鮮遺跡遺物図鑑編纂委員会「高山洞第7号墳」『朝鮮遺跡遺物図鑑 高句麗篇』(3) 1990年
この朝鮮遺跡遺物図鑑においては、高山洞(里)7号墳の年代を4世紀末から5世紀初としている。

- 128 安 承周「公州地方の百済古墳」『百済の考古学 雄山閣考古学選書』5 雄山閣 1972年
- 129 姜 仁求『百済古墳研究』1977年
姜 仁求『百済古墳研究』(岡内三眞 訳) 学生社 1984年
- 130 土屋 積「金鎧山古墳」『長野県史 考古資料編 全1巻(2) 主要遺跡(北・東信)』長野県史刊行会 1982年
- 131 青木一男「3号組合式箱形石棺」『史跡森將軍塚古墳』更埴市教育委員会 1992年
- 132 宇賀神誠司「38号組合式箱形石棺」『史跡森將軍塚古墳』更埴市教育委員会 1992年
- 133 飯島哲也 他『本村東沖遺跡』長野市教育委員会 1993年
- 134 廣田和穂・贄田 明 他『榎田遺跡』長野県埋蔵文化財センター 他 1999年
- 135 金 元龍『鬱陵島』国立博物館 1963年
- 136 西山克己「信濃国で須恵器が用いられ始めた頃」『信濃』第40巻第4号 信濃史学会 1988年
西山克己「信州における須恵器出現の頃」『考古学ジャーナル』No.316 ニュー・サイエンス社 1990年
- 137 矢口忠良 他「長礼山古墳群」『長野市の文化財』第10集 長野市教育委員会 1981年
- 138 長野市教育委員会社会教育課文化財係『史跡大室古墳群』(プリント) 長野市教育委員会 1997年
- 139 西山克己「中部高地における新来文化の受容」『第46回埋蔵文化財研究集会 渡来文化の受容と展開』埋蔵文化財研究会 他 1999年

シナノの古墳時代中期を中心とする北と南

1 はじめに

長野県内における古墳時代中期を前後する前方後円墳を中核とした古墳群の分布については、特に北の善光寺平と南の伊那谷南域の下伊那地域に集中を見せている。しかし、その分布の背景には大きな違いがある。

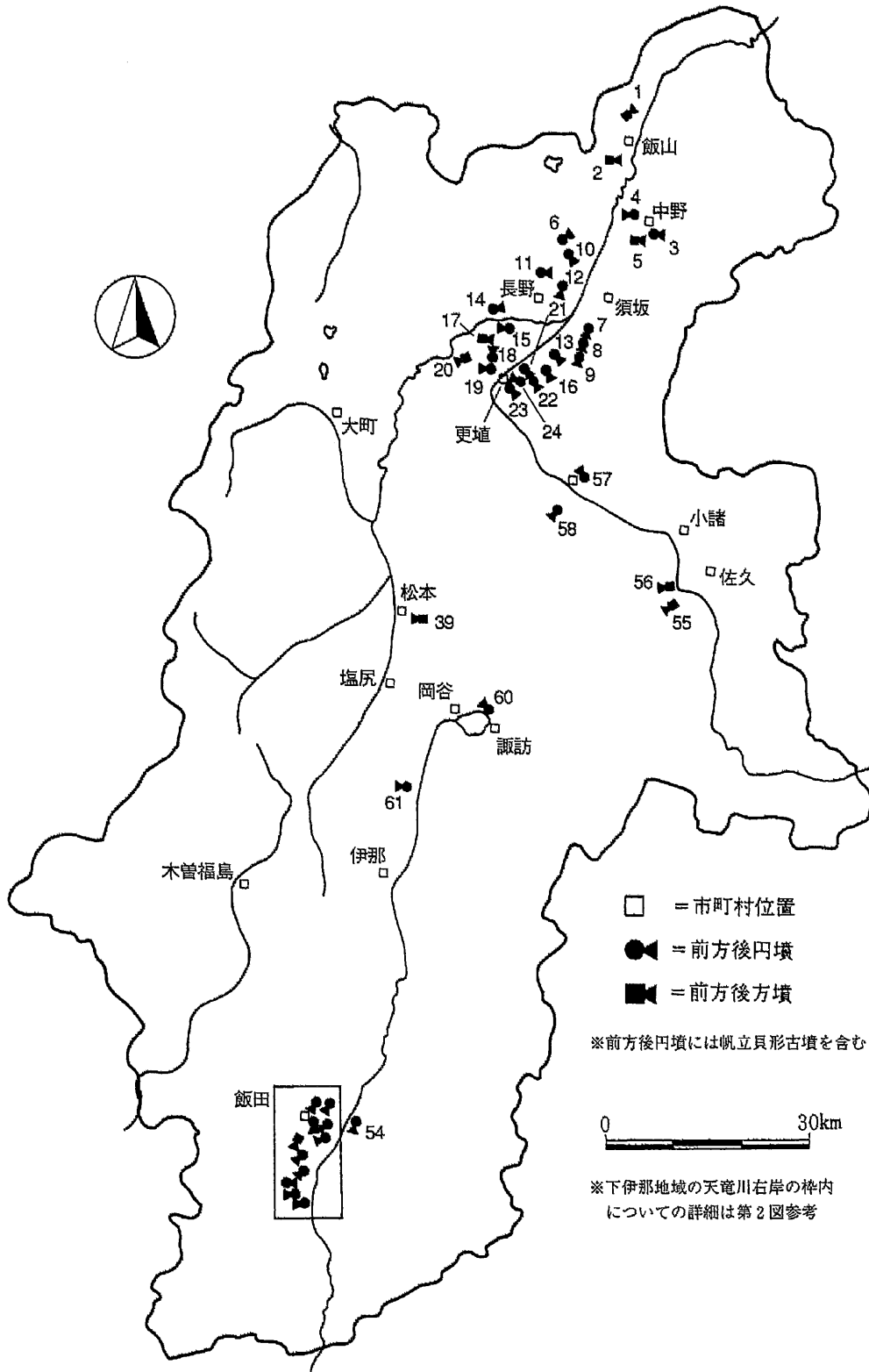
北の善光寺平では、弥生時代以来の経済力の蓄えによる古墳時代前期からの前方後方墳や前方後円墳を中核とする古墳群形成から、5世紀代における前方後円墳築造の継続が見られるものの、5世紀中頃からの前方後円墳の縮小化と衰退、長野市の大室古墳群に見られる積石塚古墳を中核とする古墳群形成の開始と言う状況がうかがえる。

南の下伊那地域では、4世紀代に前方後方墳である代田狐塚古墳が築造されるものの善光寺平のように継続的な前方後円墳の築造はなく、5世紀中頃からの大形円墳や帆立貝形古墳の築造以降、前方後円墳が築造され、6世紀初頭と言う早い段階で前方後円墳に横穴式石室が導入されることとなる。

上記の違いの背景を前方後円墳の築造や古墳群形成の推移、合掌形石室と横穴式石室の導入、積石塚古墳の分布、集落形成の状況、炉からカマド構築への移行、さらには馬の殉葬と馬具などの様相を踏まえながら比較検討をしてみることにする。

2 前方後円墳を中核とした古墳群形成

南北約50kmの善光寺平では4世紀前半頃、千曲市の森將軍塚古墳や中野市高遠山古墳が築造され、4世紀代から6世紀代にかけて24基の前方後方墳（4基）や前方後円墳（20基）が築造される。この中で最大規模を誇るのが千曲市の森將軍塚古墳であり約100mを測る。この善光寺平では、血縁や地縁を基にした一連による前方後円墳築造と言うよりも、弥生時代後半以来の地域的統合による集団関係を示すものとして、前方後方墳や前方後円墳を中核とするいくつかの地域集団が寄り合う状況となり、やがて善光寺平南域の集団が善光寺平のみならず、シナノを治める豪族層として成長し、大和政権に認知されて行く過程がよみとれる。しかしそれは弥生時代以来の在地豪族層達の政治的、経済的蓄積によるものである。善光寺平北域には4世紀代の前方後方墳と考えられている全長35mの飯山市勘助山古墳や（文献1）、全長40mの中野市蟹沢古墳（文献2）があり、前方後円墳には全長55mの中野市高遠山古墳がある。また長野市東山古墳群では1号墳・3号墳・4号墳と一つの尾根上に3基の前方後円墳が築造されるが（文献3）、しかしその中心勢力は川柳將軍塚古墳や森將軍塚古墳が集中する善光寺平南域に集約される状況となる。そして遅くとも5世紀後半には森將軍塚古墳～川柳將軍塚古墳・倉科將軍塚古墳～有明山將軍塚古墳～土口將軍塚古墳（文献4）のような系統的な前方後円墳の築造は途絶え、



第1図 長野県内の前方後方墳・前方後円墳

一変して畿内大和政権と政治的に密接的な関係を示す地域は現在の飯田市を中心とする下伊那地域へと移行することとなる（第1表・第2表・第1図）。

それでは下伊那地域での前方後円墳を中核とする古墳群形成はどのようなものであろうか。

下伊那地域は善光寺平地域とは対象的に南北約10kmの中に前方後方墳1基、帆立貝形古墳を含めた前方後円墳が30基確認されている（文献5、6、7）。これらは天竜川東岸の郭1号古墳を除いてすべてが天竜川西岸に分布し、天竜川東岸の郭1号墳を考慮すると立地状況などから前方後円墳を中核とする古墳群は7群に地域分けすることができる。

7群とは、天竜川西岸を北から座光寺地域・上郷地域・松尾地域・駄科地域・桐林地域・川路地域、そして郭1号墳のある天竜川東岸の阿島地域である（第2表・第2図）。

これらの古墳群形成にあたって核となるのが筆者が以前に示した（文献8）以下の5点である。

- ・5世紀中頃から在地豪族達が武人的地域統括者として成長し始めるが、そのあらわれ
が、大形円墳や帆立貝形古墳への甲冑の副葬化である。
- ・前方後円墳が古墳群構成の中核をなすこと。
- ・中核となる古墳の石室は竪穴式石室から横穴式石室に移行し、横穴式石室は当初から
有力在地豪族達の埋葬施設として採用される。
- ・馬の生産・管理による畿内豪族層との紐帯関係が背景となる。
- ・馬の生産・管理などの新来文化の受容に渡来人あるいは渡来系の人々が見え隠れして
いる。

以上5点から、下伊那地域での5世紀後半からの前方後円墳の築造、さらには6世紀初頭以降の前方後円墳への横穴式石室の採用は、大和政権における東国支配の拠点づくりによる結果であり、この拠点づくりには、畿内豪族層が競って独自ルートによる在地豪族達との紐帯関係を模索した結果、成長した在地豪族達、あるいは5世紀中頃から後半代以降の馬匹生産を中核とした畿内豪族層との紐帯関係によって力を蓄えてきた在地豪族達、さらには馬生産に直接関わった渡来人・渡来系の人々によるものであることは言うまでもなく、当地域の今後の成り立ち、すなわち7世紀中頃以降の東国地域への律令体制整備の拠点ともなりうる伊那郡衙が置かれた座光寺地域を中心とする下伊那地域を考える上で非常に大きな意味を示している（文献9）。

これらの様相を踏まえて、下伊那地域の前方後円墳を中核とする7古墳群の様相について、簡単に触れてみることにする。

座光寺地域の特徴は、甲冑が副葬された全長25mの帆立貝形古墳である新井原12号墳の築造を発端とする5世紀後半代からの古墳群形成と（文献10）、6世紀初頭から前半頃の前方後円墳で下段（腰石）に平石を立て、上段には平石を1・2段平積みにした横穴式石室が構築された北本城古墳や、若干後出と考えられるが同様の石室をもつ円墳の畦地1号墳や前方後円墳の高岡1号墳が近接して築造されたことである。また5世紀中頃（TK78～216頃）の大形円墳である新井原2号墳からは木芯鉄地張輪鏝が出土してお

第1表 善光寺平の前方後方墳・前方後円墳

| 図No. | 古墳名 | 所在 | 規模 | 石室 | 時期 | 文献 | 備考 |
|------|--------|-----------|-------|-------|---------|---------|--------|
| 1 | 有尾1号 | 飯山市飯山 | 35.0m | ? | ? | 1, 85 | 前方後円墳? |
| 2 | 勤助山 | 飯山市静間 | 35.0m | ? | 4C? | 1, 85 | 前方後方墳 |
| 3 | 高遠山 | 中野市小田中 | 55.0m | 木炭槨 | 4C初 | 2, 83 | 粘土槨あり |
| 4 | 七瀬双子塚 | 中野市七瀬新井 | 61.0m | ? | 5C中 | 85, 86 | |
| 5 | 蟹沢 | 中野市蟹沢 | 40.0m | ? | 4C後 | 2, 85 | 前方後方墳 |
| 6 | 庚申塚 | 飯綱町平出 | 45.0m | ? | 5C中? | 85, 101 | |
| 7 | 和田東山1号 | 長野市若穂保科 | 41.0m | ? | 4C | 3, 85 | |
| 8 | 和田東山3号 | 長野市若穂保科 | 48.0m | 竪穴式石室 | 4C後 | 3, 85 | |
| 9 | 和田東山4号 | 長野市若穂保科 | 41.0m | ? | 5C前? | 3, 85 | |
| 10 | 三才1号 | 長野市古里 | 45.0m | ? | 5C後 | 85 | |
| 11 | 地附山 | 長野市上松 | 39.0m | ? | 5C後 | 66, 85 | |
| 12 | 南向塚 | 長野市高田 | 47.5m | ? | 5C後? | 85 | |
| 13 | 大室18号 | 長野市松代町大室 | 55.5m | ? | 5C前 | 85 | |
| 14 | 馬神塚 | 長野市小田切 | 30.5m | ? | 6C前 | 85 | |
| 15 | 腰村1号 | 長野市篠ノ井小松原 | 43.0m | 竪穴式石室 | 6C初 | 85, 88 | |
| 16 | 舞鶴山2号 | 長野市松代町西条 | 36.5m | 竪穴式石槨 | 5C後 | 85, 89 | |
| 17 | 姫塚 | 長野市篠ノ井石川 | 32.0m | ? | 4C中 | 85, 90 | 前方後方墳 |
| 18 | 川柳將軍塚 | 長野市篠ノ井石川 | 93.0m | 竪穴式石室 | 4C後 | 85, 90 | 埴輪棺あり |
| 19 | 中郷 | 長野市篠ノ井四野宮 | 53.0m | ? | 5C後 | 85, 91 | |
| 20 | 田野口大塚 | 長野市信更町 | 40.0m | ? | ? | 85 | 前方後方墳 |
| 21 | 土口將軍塚 | 千曲市土口 | 66.7m | 竪穴式石槨 | 5C中 | 85, 92 | |
| 22 | 倉科將軍塚 | 千曲市倉科 | 83.0m | 竪穴式石室 | 5C前 | 4, 85 | 竪穴石室2つ |
| 23 | 有明山將軍塚 | 千曲市小島 | 36.5m | 竪穴式石室 | 4C後~5C初 | 4, 85 | |
| 24 | 森將軍塚 | 千曲市森 | 99.0m | 竪穴式石室 | 4C中 | 51, 85 | |

り、さらに5世紀中頃から後半代の古墳は竪穴式石室を持つ全長約60mの溝口の塚古墳が造られ、石室内には衝角付群形成と期を一にして、馬の殉葬が行われるようになる(文献11)。

上郷地域の特徴は、5世紀後半に冑や横矧板鋌留短甲・三角板鋌留短甲などが副葬されていた(文献12、13)。溝口の塚古墳築造以降、前方後円墳である雲彩寺古墳や番神塚古墳が散発的に造られることとなる。また5世紀後半代からの前方後円墳築造と期を一にして、宮垣外遺跡(文献14) SM03内SK64馬墓からは5世紀後半(TK208)の木芯鉄地張輪鏝他

第2表 下伊那地域の前方後方墳・前方後円墳

| 図No. | 古墳名 | 所在 | 規模 | 石室 | 時期 | 文献 | 備考 |
|------|--------|---------|--------|-------|---------|-----------|--------|
| 25 | 高岡1号 | 飯田市座光寺 | 72.3m | 横穴式石室 | 6C前 | 6.7.85 | |
| 26 | 新井原12号 | 飯田市座光寺 | 36.0m | 竖穴式石室 | 5C中 | 6.7.85 | 帆立貝形 |
| 27 | 北本城 | 飯田市座光寺 | 28.0m | 横穴式石室 | 6C初 | 6.7.85 | |
| 28 | 雲彩寺 | 飯田市上郷飯沼 | 74.5m | 横穴式石室 | 6C前 | 6.7.85 | |
| 29 | 番神塚 | 飯田市上郷別府 | ? m | ? | 6C? | 6.7.85 | 伝・消滅 |
| 30 | 溝口の塚 | 飯田市上郷別府 | 50.0m | 竖穴式石室 | 5C後 | 6.7.13.85 | |
| 31 | 御射山獅子塚 | 飯田市松尾 | 63.0m | 竖穴式石槨 | 6C前 | 6.7.85 | |
| 32 | 茶柄山3号 | 飯田市松尾 | ? m | 横穴式石室 | 6C? | 7.85 | |
| 33 | 八幡山 | 飯田市松尾 | 28.5m | 横穴式石室 | 5C末~6C初 | 6.7.85 | 帆立貝形? |
| 34 | 代田山孤塚 | 飯田市松尾 | 42.0m | 横穴式石室 | 4C後 | 6.7.85 | 前方後方墳 |
| 35 | おかん塚 | 飯田市松尾 | 41.8m | 横穴式石室 | 6C後 | 6.7.85 | |
| 36 | 上溝天神塚 | 飯田市松尾 | 45.0m | 横穴式石室 | 6C前 | 6.7.85 | |
| 37 | 姫塚 | 飯田市松尾 | 35.0m | 横穴式石室 | 5C末~6C初 | 6.7.85 | |
| 38 | 羽場獅子塚 | 飯田市松尾 | 44.3m | 横穴式石室 | 6C? | 6.7.85 | |
| 39 | 代田1号 | 飯田市松尾 | 61.0m | 横穴式石室 | 6C前 | 6.7.85 | |
| 40 | 水城獅子塚 | 飯田市松尾 | 50.0m | ? | 6C前 | 6.7.85 | |
| 41 | 塚越1号 | 飯田市駄科 | 72.7m | 横穴式石室 | 6C後 | 6.7.85 | |
| 42 | 権現堂1号 | 飯田市駄科 | 60.0m | ? | 5C末~6C初 | 6.7.85 | |
| 43 | 丸山 | 飯田市桐林 | 35.0m | ? | 5C後 | 6.7.85 | |
| 44 | 大塚 | 飯田市桐林 | 56.0m | ? | 5C後 | 6.7.85 | |
| 45 | 兼清塚 | 飯田市桐林 | 63.6m | 竖穴石槨? | 5C中 | 6.7.85 | |
| 46 | 塚原二子塚 | 飯田市桐林 | 67.5m | ? | 5C後 | 6.7.85 | |
| 47 | 塚原3号 | 飯田市桐林 | 38.0m | 竖穴式石槨 | 5C後 | 6.7.85 | 帆立貝形 |
| 48 | 鏡塚 | 飯田市桐林 | 33.0m | 横穴石室? | 5C末~6C初 | 6.7.85 | 帆立貝形 |
| 49 | 鎧塚 | 飯田市桐林 | 50.0m | 竖穴式石槨 | 5C後 | 6.7.85 | 帆立貝形 |
| 50 | 金山二子塚 | 飯田市桐林 | 後円20m? | 横穴式石室 | 6C前 | 6.7.85 | |
| 51 | 馬背塚 | 飯田市上川路 | 46.4m | 横穴式石室 | 6C前 | 6.7.85 | 横穴石室2つ |
| 52 | 御猿堂 | 飯田市上川路 | 66.4m | 横穴式石室 | 6C前 | 6.7.85 | |
| 53 | 正清寺 | 飯田市上川路 | 約60.0m | 横穴式石室 | 6C初 | 6.7.24.85 | |
| 54 | 郭1号 | 喬木村阿島 | 38.2m | 横穴式石室 | 6C前 | 6.7.85 | |

第3表 その他の地域の前方後方墳・前方後円墳

| 図No. | 古墳名 | 所在 | 規模 | 石室 | 時期 | 文献 | 備考 |
|------|-------|--------|-------|-------|---------|-------|--------|
| 55 | 瀧の峯1号 | 佐久市根岸 | 18.0m | ? | 4C前 | 85.94 | 前方後方墳? |
| 56 | 瀧の峯2号 | 佐久市根岸 | 18.3m | 木棺 | 4C前 | 85.94 | 前方後方墳? |
| 57 | 二子塚 | 上田市上田 | 48.0m | 横穴式石室 | 6C中 | 85.95 | |
| 58 | 王子塚 | 上田市西塩田 | 50.8m | ? | 5C後~6C前 | 96 | 帆立貝形 |
| 59 | 弘法山 | 松本市出川 | 66.0m | 竖穴式石室 | 4C前 | 85.97 | 前方後方墳 |
| 60 | 青塚 | 下諏訪町横町 | 57.0m | 横穴式石室 | 6C中 | 85.98 | |
| 61 | 松島大墓 | 箕輪町松島 | 50.0m | 横穴式石室 | 6C中 | 85.99 | |

が出土し、この頃以降後半代にかけて馬の殉葬が行われるようになる（文献11、14）。

松尾地域の特徴は、4世紀代に全長42mの前方後方墳である代田山狐塚古墳が築造されるが、以後継続して前方後円墳が造られる状況とはならず、5世紀中頃に眉庇付冑が副葬されていた径29.5mの大形円墳である妙前大塚古墳が畿内勢力との関係を示す初現的古墳として築造され（文献15）、6世紀代に入り姫塚古墳や上溝天神塚古墳などの横穴式石室を持つ前方後円墳が継続的に多く造られることとなる。この地域でも妙前大塚古墳築造以降、寺所遺跡（文献16）や茶柄山古墳群（文献17）・物見塚古墳（文献18）などで馬の殉葬が行われるようになり、これを受けて、以後前方後円墳が6世紀代を通して継続的に築造され続けることとなる。前方後円墳の築造数では、南隣の竜丘地域と二分することとなる。

竜丘地域は本来、駄科地域・桐林地域でのそれぞれの在地豪族の存在を示していたが、桐林地域が上川路地区へ拡張展開し、さらには駄科地域を吸収することによって成立する。

駄科地域では、当地域の在地勢力と畿内勢力との繋がりの中で、5世紀末葉から6世紀初頭頃に全長約55mの権現堂1号墳が築造されが、以後畿内豪族層との紐帯関係が継続せず、6世紀前半には桐林地域の在地勢力に吸収され、その後北域の松尾地域を牽制するように大形石室を持つ塚越1号墳が6世紀後半に築造される。

桐林地域では5世紀中頃以降の畿内豪族層との関係の中で、ようやく5世紀後半になって竖穴式石室に横矧板鋌留短甲が副葬されていた全長約50mの鎧塚古墳などの帆立貝形古墳が築造され（文献19）、この経過の中で竖穴式石室に斜縁式二神二獸鏡・変形四神四獸鏡変形・四獸鏡・内行花文鏡他が副葬されていた全長63.6mの前方後円墳である兼清塚古墳が畿内勢力との関係を示す古墳として築造される（文献20）。以後6世紀代に入り横穴式石室を持つ前方後円墳が造られるようになる。6世紀前半以降、南隣の上川路地区に畿内の影響を受けた東濃型大形横穴式石室を持ち四仏四獸鏡が副葬されていたとされる全長66.4mの御猿堂古墳（文献21）や後円部と前方部にそれぞれ一基ずつ大形横穴式石室を持つ全長46.4mの馬背塚古墳が続く（文献22）。6世紀代に入り大形の横穴式石室が



A = 畦地 1 号墳
 B = 武陵地 1 号墳

第 2 図 下伊那地域天竜川右岸の前方後方墳・前方後円墳（帆立貝形含む）分布図

前方後円墳に継続的に造られる状況は、畿内中枢部での動向に類似している。このように前方後円墳は桐林地域のみならず、川路地域を意識して南隣の上川路地区に、松尾地域を意識して北隣の駄科地域に展開することとなり、竜丘地域では桐林地域や駄科地域での5世紀後半から6世紀初頭にかけての古墳群形成期と、竜丘地域として成長する6世紀前半以降の古墳群拡張期が見られる。この結果前方後円墳の築造数では、北に隣接する松尾地域と二分することとなる。竜丘地域では座光寺地域、上郷地域、松尾地域とは異なり、これまで馬の殉葬例は確認されていない。

川路地域では、5世紀後半に地域南端に位置する円墳の月の木1号墳が築造される。月の木1号墳には横刃板鋌留短甲他が木棺直葬内に副葬され（文献23）、武人的な地域在地豪族の存在を示し、この系譜の中で前方後円墳の正清寺古墳が築造されることとなる。正清寺古墳は5世紀末葉から6世紀初頭頃に集落を移動させてまでも墓域が設定され築造されたもので、二重の周堀に造出しを持つ全長約60mを測る古墳である。周堀を含めると全長約90m以上の規模を有することとなる。二重の周堀も何らかの都合で、造り替えられたことが調査で判明している。以後6世紀後半まで正清寺古墳を中心に古墳祭祀が行われ、6世紀後半に至っては北に隣接する径約26.0mの大形円墳である閻魔王塚古墳が築造され、祭祀域が拡大するものの竜丘地域に吸収されて行く過程が想定される（文献24、25）。

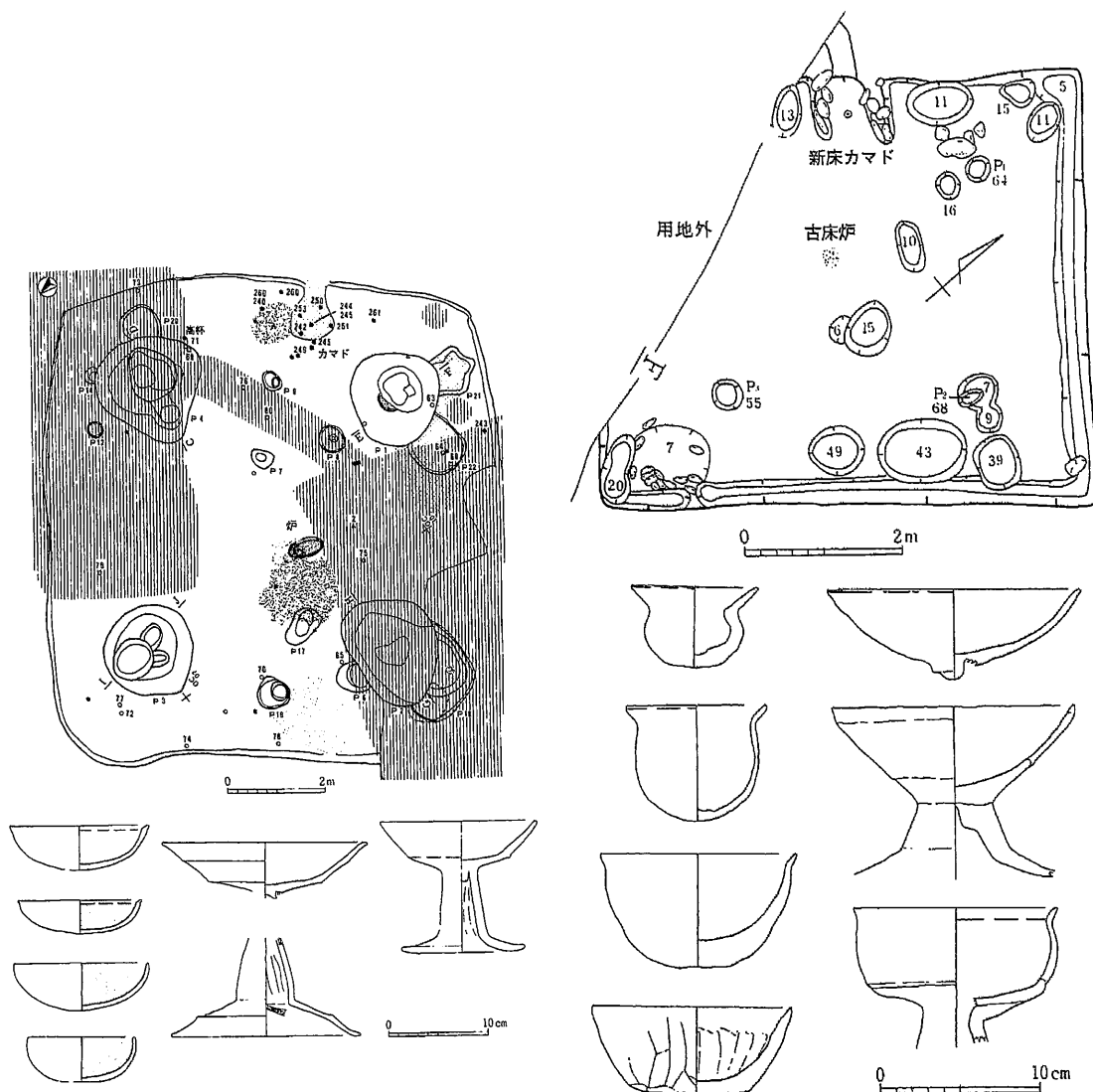
阿島地域は唯一の天竜川東岸の前方後円墳が構築された地域である。郭1号墳は全長46.4mで6世紀中頃の築造と考えられるが、以降前方後円墳は築造されず、対岸の松尾地域に吸収されていったのであろうか。

3 5世紀中頃以降の集落形成

東国古墳時代の大陸や朝鮮半島からの新来文化の受容の画期は、大きく2時期に分けることができる。その1つは5世紀中頃から6世紀前半にかけてのことであり、その内容はカマドの構築と使用および住居構造の変化・馬の飼育と活用・須恵器生産と使用・日常使用する土器組成の変化・金銅製品の使用・横穴式石室の受容と埋葬観念の変化等があげられ、生活習慣の大きな変革期となる。もう1つは7世紀代における律令国家誕生前夜の頃と考えられる。

5世紀中頃から6世紀代にかけての竪穴住居構造について、特にシナノ（長野県内）でのカマドの出現については、すでに筆者が明らかにしているが（文献26、27、28、29）、あらためてその具体例を見てみたい。

善光寺平において5世紀中頃から後半にかけて多くのカマドを付設した集落は長野市本村東沖遺跡である（文献30）。また、炉からカマドへと移行を示す良好な資料が千曲市屋代遺跡群SB5136号竪穴住居跡で確認されている。SB5136号竪穴住居跡では同一床面に炉とカマドが併設されていた（第3図）（文献31）。また、集落と古墳群との係わりについては長野市本村東沖遺跡での5世紀後半の集落と、西に近接する長野市地附山古墳群と



第3図 屋代遺跡群 SB5136 竪穴住居と出土遺物
(文献 31 より)

第4図 龍江大平3号竪穴住居跡と出土遺物
(文献 38 より)

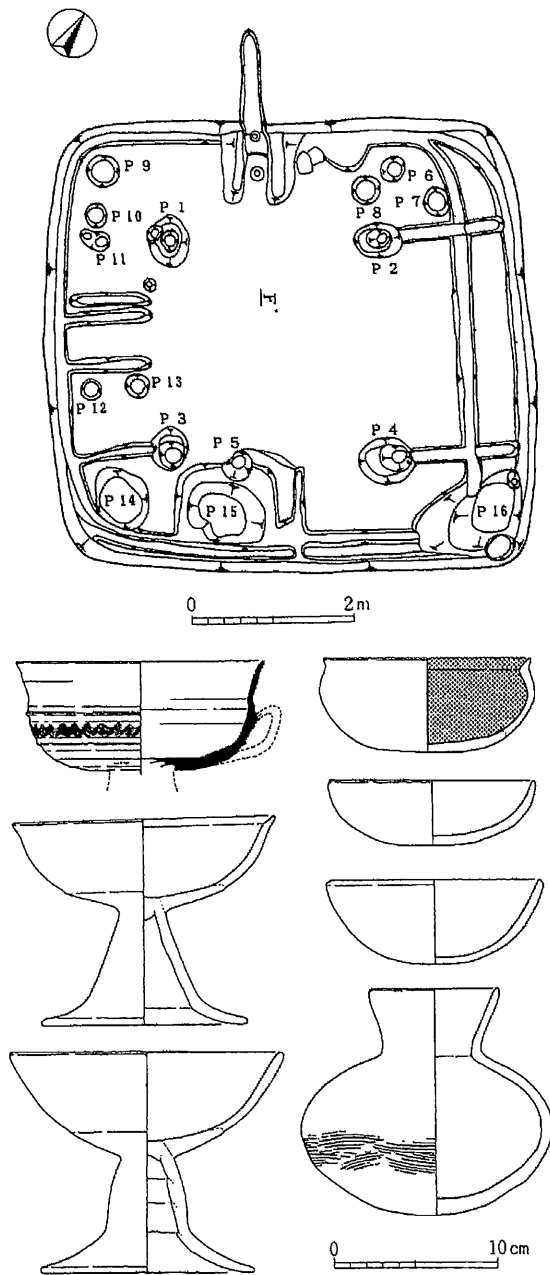
の関連が指摘されている。地附山古墳群上池ノ平2号墳や3号墳の周溝内からは須恵器 (TK23 ~ TK47) が多量に出土し、また5号古墳の合掌形石室からは鑣轡が出土している (文献 32)。また、5世紀第2四半期頃の木製鞍 (後輪) や5世紀第3から第4四半期頃の木製壺鏡 (黒漆塗り) が出土した長野市榎田遺跡での5世紀中頃から後半にかけての集落については (文献 33)、早い時期での木製馬具などの出土から、新来文化を早々に取り入れた集団の集落とも考えられ、5世紀中頃に古墳群形成が開始される積石塚古墳を中核とする長原古墳群や大室古墳群との関連が考えられる。さらに、千曲市森將軍塚古墳を中心とする森古墳群との関わりを示す5世紀代の集落跡が古墳群直下の屋代清水遺跡で確認されている (文献 34)。

下伊那地域でカマドを早い段階に多く取り入れた遺跡としては、飯田市鼎地域の切石遺

跡群の中核となる天伯B遺跡（文献35）や山岸遺跡（文献36）をあげることができる。両遺跡の遺跡名は異なるものの、松川右岸沿いに細長く続く同一段丘上に位置する集落である。ここではカマドが付設された竪穴住居跡が63件（天伯B = 30件・山岸 = 33件）確認され、このうち5世紀後半の時期と考えられる竪穴住居跡は45件ほど見られる。集落全体に早い段階でカマドが付設された特筆すべき遺跡であり、当地域における5世紀後半から6世紀前半にかけての拠点集落と考えられるが、前方後円墳を中核とする古墳群との関係については今のところ確認されていない。下伊那地域における天伯B・山岸遺跡以外でのカマドの初現例としては、飯田市伊賀良小垣外遺跡の25号竪穴住居跡や26号竪穴住居跡（文献37）、飯田市龍江大平遺跡3号竪穴住居跡などがあげられ、龍江大平遺跡3号竪穴住居跡では2枚の床面が確認され、初めの床には炉が付設され、作り替えられた後の床にはカマドが付設されていた。下伊那地域での炉からカマドへと移行する良好な資料となっている（第4図）（文献38）。

このように善光寺平南域や下伊那地域の5世紀後半から6世紀前半にかけての先進文化を積極的に受け入れたいわゆる拠点集落と考えられるムラでは、須恵器TK208型式、年代的には5世紀第3四半期から第4四半期の移行期頃には確実にカマドが付設され始めている。シナノの集落全体にカマドが波及するには6世紀に入らねば実現しないことを考えれば、善光寺平南域や下伊那地域の先進性をうかがうことができよう。

カマドの付設と同様に住居内構造の変化として、間仕切り構造を持つ住居があらわれる。ここで言う間仕切り構造とは、住居床面に壁から柱穴にかけて浅い溝を掘り、その溝に間



第5図 本村東沖遺跡 SB27号竪穴住居跡と出土遺物
（文献30より）

仕切り材を据えたと考えられるものである。

この間仕切り遺構については、善光寺平における長野市本村東沖遺跡において多くみられる（第5図）（文献30）。本村東沖遺跡では5世紀後半と考えられる多くの竪穴住居にカマドが付設され、これらの竪穴住居跡からは地元で生産されたとも考えられる須恵器（TK216～TK208 移行期～TK47）が出土し（文献32、39）、また調査された竪穴住居跡の約半数から間仕切り遺構が確認されている。

下伊那地域でも点々といくつか確認されているが、その中でも特に良好な資料として5世紀末葉頃と考えられる飯田市伊賀良殿原遺跡88号竪穴住居跡（文献40）や飯田市桐林前の原26号竪穴住居跡（文献41）をあげることができる。このようなことから渡来系の人々やその末裔、あるいは新来文化を積極的に摂取した在地豪族達の集落とも考えられ、このような例は善光寺平での本村東沖遺跡を含む浅川扇状地遺跡群や下伊那の殿原遺跡や前の原遺跡などの数例以外ではほとんど確認されていない。

このように間仕切り構造はカマドとともに家屋構造の一つとして同じ頃に伝えられたものと考えられる。

下伊那地域での集落と古墳群との関連はどうであろうか。

下伊那地域では桐林地域に位置する前の原遺跡での集落跡が、前方後円墳を中核とする古墳群形成との関わりを直接的に示し、また井戸下遺跡でも甲冑が出土した円墳の月ノ木1号墳を中核とする古墳群との係わりを示す集落跡が確認されている（文献42）。しかし天伯B・山岸遺跡や殿原遺跡、さらには天竜川を挟んだ龍江地域にある5世紀後半から6世紀代の集落が調査された細新遺跡での、カマドの付設や須恵器の搬入を考えれば（文献43）、当地における先進集落と考えられるが、これらの集落が大形円墳や帆立貝形古墳、さらには前方後円墳を中核とした古墳群に近接していないことを考えれば、5世紀後半以降の座光寺地域、上郷地域、松尾地域、桐林地域の在地豪族達は、かなり広い範囲を治めていたものとも考えられる。

4 善光寺平型合掌形石室と横穴式石室の導入と積石塚古墳

善光寺平型合掌形石室（文献44）については長野県内では善光寺平での分布となる。積石塚古墳の主体部になるものについては、千曲川東岸の中央部、須坂・若穂・松代地区への分布となり、県内での総数は、56基以上と考えられる。現在のところ、善光寺平以外では、山梨県王塚古墳、山形県松沢古墳群1号墳、2号墳、福島県長井前ノ山（銚子ヶ森）古墳の4例だけとなる（第4表・第6図）。

善光寺型合掌形石室の形態については、斎藤忠氏が朝鮮三国時代の百濟古墳の斜天井石室との関わりを示したことから（文献45）、百濟地域の柿木洞古墳などとの関連が指摘されてきたが、近年に至っては平成8年に筆者が合掌形石室の中に石棺状横穴式石室に類似したものがあることを指摘し（文献46）、同年、土屋積氏が北九州地域での合掌天井や横口構造が中間地域を媒介として善光寺平に影響を与えた結果、石棺型合掌形石室最古の大

第4表 シナノにおける積石塚古墳一覧 (文献44より一部改変)

| 古墳名 | 所在地 | 墳形 | 墳丘規模 直径×高さ | 古墳群 | 墳丘形式 | 内部構造 | 時期 | その他 |
|-----------|---------------|----|---------------|-----|------|-------|-------|-------|
| 1 和栗 | 下高井郡木島平村穂高 | 円 | 2.1×2.6 | 1 | 1 | 合掌形石室 | 5C? | 土石混合墳 |
| 2 金継山 | 中野市日野 | 円 | 2.1×2.6 | 1 | 1 | 合掌形石室 | 5C中 | 土石混合墳 |
| 3 雁田(群) | 上高井郡小布施町都住 | 円 | 2.5 | 3 | 3 | 合掌形石室 | 5C中 | 土石混合墳 |
| 4 稲塚1号 | 須坂市八丁 | 円 | 2.5 | 1 | 1 | 合掌形石室 | 5C後半 | |
| 5 稲塚2号 | 須坂市八丁 | 円 | 2.2 | 1 | 1 | 合掌形石室 | 5C後半 | |
| 6 稲塚6号 | 須坂市八丁 | 円 | 1.2 | 1 | 1 | 合掌形石室 | 6C中以降 | |
| 7 鮎川(群) | 須坂市八丁・他 | 円 | 2.5 | 2 | 2 | 合掌形石室 | 5C中 | |
| 8 堀内(群) | 長野市若穂堀内 | 円 | 2.2 | 2 | 2 | 合掌形石室 | 5C中 | |
| 9 保科(群) | 長野市若穂保科 | 円 | 2.2 | 3 | 3 | 合掌形石室 | 5C中 | |
| 10 長原(群) | 長野市若穂保科 | 円 | 2.2 | 3 | 3 | 合掌形石室 | 5C中 | |
| 11 十二山(群) | 長野市若穂保科 | 円 | 2.2 | 3 | 3 | 合掌形石室 | 5C中 | |
| 12 大盤山(群) | 長野市若穂保科 | 円 | 2.2 | 3 | 3 | 合掌形石室 | 5C中 | |
| 13 大室(群) | 長野市松代町大室 | 円 | 2.2 | 3 | 3 | 合掌形石室 | 5C中 | |
| 14 長札山2号 | 長野市松代町東条 | 円 | 2.2 | 3 | 3 | 合掌形石室 | 5C中 | |
| 15 皆間王塚 | 長野市松代町東条 | 円 | 2.2 | 3 | 3 | 合掌形石室 | 5C中 | |
| 16 笹塚 | 長野市松代町東条 | 円 | 2.2 | 3 | 3 | 合掌形石室 | 5C中 | |
| 17 西前山 | 長野市松代町東条 | 円 | 2.2 | 3 | 3 | 合掌形石室 | 5C中 | |
| 18 笠塚 | 長野市松代町登栄 | 円 | 2.2 | 3 | 3 | 合掌形石室 | 5C中 | |
| 19 皆神山(群) | 長野市松代町登栄 | 円 | 2.2 | 3 | 3 | 合掌形石室 | 5C中 | |
| 20 首(群) | 長野市若槻 | 円 | 2.2 | 3 | 3 | 合掌形石室 | 5C中 | |
| 21 地附山(群) | 長野市上松 | 円 | 2.2 | 3 | 3 | 合掌形石室 | 5C中 | |
| 22 安茂里(群) | 長野市安茂里 | 円 | 2.2 | 3 | 3 | 合掌形石室 | 5C中 | |
| 23 杉山(群) | 千曲市倉科 | 円 | 2.2 | 3 | 3 | 合掌形石室 | 5C中 | |
| 24 前山(群) | 埴科郡坂城町中之条 | 円 | 2.2 | 3 | 3 | 合掌形石室 | 5C中 | |
| 25 菅野(群) | 東筑摩郡筑北村中安茂 | 円 | 2.2 | 3 | 3 | 合掌形石室 | 5C中 | |
| 26 追分(群) | 東筑摩郡筑北村中追分 | 円 | 2.2 | 3 | 3 | 合掌形石室 | 5C中 | |
| 27 麻績塚 | 東筑摩郡麻績村叶里 | 円 | 2.2 | 3 | 3 | 合掌形石室 | 5C中 | |
| 28 水汲(群) | 大町市大字平 | 円 | 2.2 | 3 | 3 | 合掌形石室 | 5C中 | |
| 29 小倉山(群) | 東筑摩郡麻績村叶里・(他) | 円 | 2.2 | 3 | 3 | 合掌形石室 | 5C中 | |
| 30 針塚 | 松本市水汲 | 円 | 2.2 | 3 | 3 | 合掌形石室 | 5C中 | |
| 31 針塚 | 松本市里山辺荒町 | 円 | 2.2 | 3 | 3 | 合掌形石室 | 5C中 | |
| 32 針塚 | 松本市里山辺荒町 | 円 | 2.2 | 3 | 3 | 合掌形石室 | 5C中 | |
| 33 松岡(群) | 松本市岡田松岡 | 円 | 2.2 | 3 | 3 | 合掌形石室 | 5C中 | |
| 34 大塚 | 茅野市ちの塚原 | 円 | 2.2 | 3 | 3 | 合掌形石室 | 5C中 | |

星山2号墳の石室を生み出したであろうとし(文献47)、また同年、土生田純之氏は石棺系の合掌形石室を竪穴系横口石室とした(文献48)。この土屋論文や土生田論文はこれまでの合掌形石室の系譜を探るものの中で一つの可能性を示したものとして評価したい。

善光寺平型合掌形石室の型式分類については、平成8年に筆者が7分類し(文献46)、平成11年に飯島哲也氏が詳細な分類をしているが(文献49)、いずれにしても、初期善光寺平型合掌形石室は横穴式石室ではなく横口式石槨構造と考えることが妥当であろうと考える。

それでは横穴式石室についてはどうであろうか

善光寺平での横穴式石室については、岡林孝作氏の研究成果がある(文献50)。岡林氏の成果等によると、善光寺平における初現的横穴式石室は千曲市森3号墳の横穴式石室(文献51)と長野市布施塚1号墳の横穴式石室(文献52)と考えられている。森3号墳は径6mの円墳で6世紀前半から中頃と考えられ全長4.5mの無袖式横穴式石室である。また布施塚1号墳は残存径9.5mの円墳で6世紀前半から中頃と考えられ、石室の残存状況はさらに悪いが残存規模は羨道と玄室をあわせて4.25mであり、無袖式横穴式石室であ

った。

いずれにしても小形の円墳への石室として採用されている。

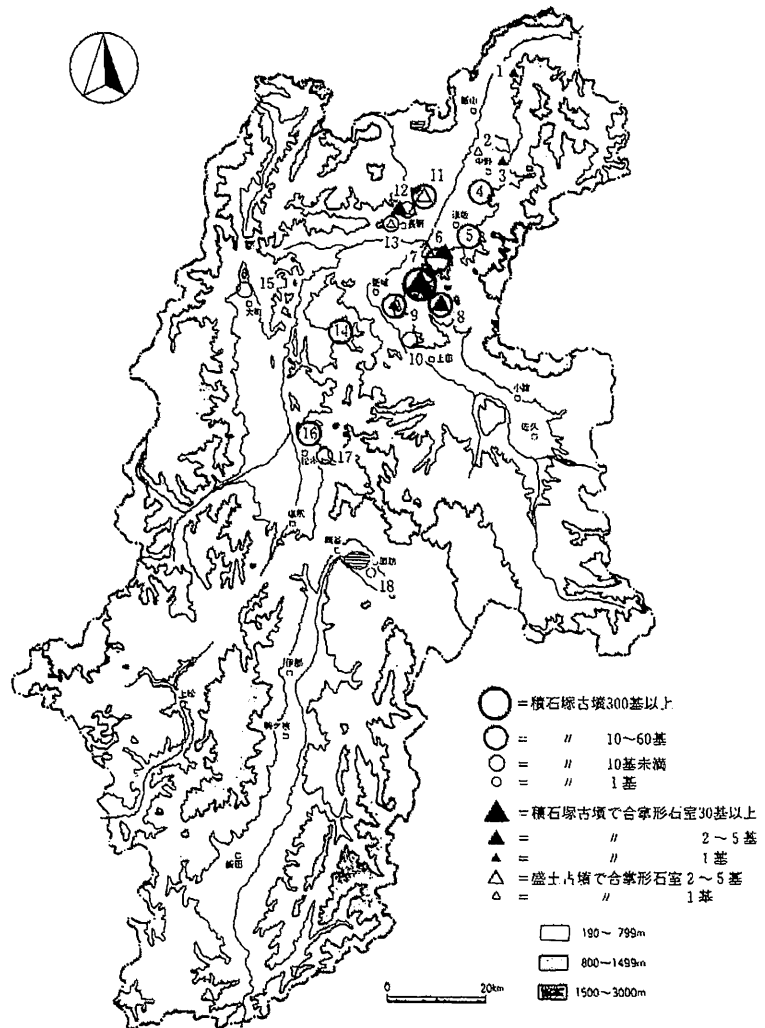
それでは下伊那地域での横穴式石室についてはどうであろうか。

下伊那地域の横穴式石室の分類や系譜については白石太一郎氏の研究成果を参考にしてみたい。

白石氏は石室を4分類し、6世紀前半期においては美濃（東濃）的な石室の影響下によるものを含めて少なくとも5系統の石室が導入されたとしている。また6世紀中頃から後半にかけては畿内中樞部の影響によって、畿内的な石室が構築されていることを明らかにした。これらについて異なる系統の石室や技術集団の影響によるものであるとし、また畿内と関東を結ぶ東山道ルートにおける拠点としての重要性を論じた（文献53）。

白石氏の分類（文献53）を参考に地域相や石室の地域的変遷をみてみたい。

下伊那地域での初現的な横穴式石室は、川路地域の正清寺古墳の横穴式石室であり、6世紀初頭頃の構築と考えられる。古墳の墳丘および周辺調査から下伊那地域における出現期の横穴式石室であることはまちがいなさそうであるが、江戸時代に石室は破壊されたため詳細はわからない。さらに座光寺地域での北本城古墳に下段（腰石）に平石を立て、上段には平石を1・2段平積みにした横穴式石室が構築され（白石氏d類）、6世紀初頭から前半頃と考えられている。同様な石室は、ほぼ同時期あるいは継続的に円墳である畦地1号墳や前方後円墳である高岡1号墳にも採用される。また松尾地域でも、小形の河原石



1 = 和栗古墳 2 = 田畑林畔1号墳 3 = 金鑑山古墳 4 = 雁田山麓古墳群 5 = 鮎川流域古墳群(鎧塚1・2号墳等含む) 6 = 綿内・保科・兵原・十二山・大屋山古墳群(ニカゴ塚古墳・城窪1号墳・十二山1号墳・大屋山2号墳含む) 7 = 大室古墳群 8 = 皆神山周辺古墳群(菅間千塚古墳・空塚古墳・笠塚古墳及び西前山古墳・長礼山2号墳等含む) 9 = 杉山古墳群 10 = 前山古墳群 11 = 吉古墳群 12 = 地附山(上池ノ平)古墳群 13 = 安茂里古墳群(萩平古墳含む) 14 = 安坂將軍塚・追沢・麻績古墳群(麻績塚古墳含む) 15 = 小縣山麓古墳群 16 = 水汲・松岡古墳群 17 = 薄町古墳群(針塚古墳含む) 18 = 大塚古墳

第6図 シナノにおける積石塚古墳と合掌形石室の分布
(土石混合墳も一部含む) (文献28より)

あるいは河原石に近い石材を用いた両袖式石室で平面的にも立面的にも羨道が区別され玄室に対していちじるしく細い羨道をもつ横穴式石室（白石氏c類）が姫塚古墳に採用され、6世紀初頭から前半頃の構築と考えられる。

また、上記の古墳に遅れて6世紀前半から中頃以降、竜丘地域の上川路地区の御猿堂古墳には玄室長さ10.25m、幅2.3m、高さ2.85m、羨道長さ2.7m、幅2.15m、玄室と羨道の高さの差0.75mの横穴式石室や馬背塚古墳後円部には玄室長さ8.4m、幅2.1m、高さ2.7m、羨道長さ3.3m、幅1.8m、現状高さ1.4mの横穴式石室が構築され、これらは大形の自然石を架構した無袖式の細長いもので、平面的には玄室と羨道の区別がなく、立面的に羨道部の天井を下げて玄室区別している横穴式石室（白石氏a類）である。また馬背塚古墳前方部には玄室長さ6.4m、幅3.3m、高さ3.3m、羨道残存長さ5.5m、幅2.0m、高さ1.6mの横穴式石室が構築され、これは大形の自然石を用い、両袖式で平面的にも立面的にも玄室と羨道の区別が明確な横穴式石室（白石氏b類）である（文献53）。ここに見られる巨大な石室はほかでは見られず、畿内豪族層との関係やこれらを構築しえた在地豪族達の力量が想像されよう。

いずれにしても、善光寺平とは異なり、初現的横穴式石室は前方後円墳への採用であり、また石室規模についても、善光寺平での横穴式石室とは比較にならないほどの石室が構築されている。

土生田純之氏は、座光寺地域の北本城古墳、畦地1号墳、高岡1号墳の石室の系譜について、竪穴式石槨をもち5世紀代と考えられる韓国漆谷郡の若木古墳や6世紀前半に下るが板石を同様に隙間なく縦位に並べ、天井石との間に若干の平積み石材を置いたことが窺える竪穴系横口式の石室をもつ金泉の帽岩洞古墳1号墳例をあげ、上記座光寺地域3古墳石室の形状に近い事を指摘し、竪穴、横口を問わず板石をほとんど隙間なく縦位に並べた構造が、大邱周辺の古墳石室の特徴的構造であることから、その系譜を大邱周辺の加耶古墳に求められる可能性を指摘した（文献54）。

以上のことから、6世紀初頭以降の前方後円墳への横穴式石室の構築は、大和政権における東国支配の拠点づくりによる結果であり、この拠点づくりには、5世紀中頃から後半代にかけての馬匹生産を中核とした畿内豪族層との紐帯関係によって力を蓄えてきた下伊那地域の在地豪族達、さらには馬匹生産に直接関わった渡来人・渡来系の人々によるものであると考えられる。

積石塚古墳についてはどうであろうか。その分布は善光寺平、麻績盆地、松本市域、大町市域、茅野市域を示し、下伊那地域には存在しない。特に善光寺平での石のみによって構築された純然たる積石塚古墳については、千曲川東岸の中央部、須坂・若穂・松代地区に分布している。また県内の総数であるが、土石混合墳を含めると600基以上と考えられる（第4表・第6図）（文献44）。

その初現は須坂市八丁鎧塚1号墳と考えられ、4世紀後半の年代が与えられ（文献54）、また5世紀前半には方形積石塚古墳の大星山4号墳や安坂將軍塚1号墳が他に先駆けて築

造される。しかしこの後、長原古墳群や大室古墳群などでは小形積石塚古墳による古墳群形成が5世紀中頃から後半にかけての時期、おそらくは須恵器 TK208 型式（5世紀第3四半期）頃に始まることとなる。また現在確実に方形積石塚古墳として確認されているのは、東筑摩郡坂北村安坂將軍塚古墳群1号・2号・3号・4号墳（文献56）と長野市大星山古墳群4号墳（文献57）を代表例としてわずかにすぎない。しかし方形積石塚古墳が長野県内における初現的な積石塚古墳であることについては今後さらに検討を要する。

また大室古墳群の調査から、大室谷支群の各単位支群では、最初に出現した古墳は皆積石塚古墳であり、しかもそれらの石室は善光寺平型合掌形石室であることが明らかにされている（文献58）。

いずれにしても、下伊那地域では積石塚古墳も善光寺平型合掌形石室はまったく無縁な地域であったのである。

5 馬の殉葬と馬具

それでは馬についてはどうであろうか。

竪穴住居にカマドや間仕切り構造が採用された頃、すなわち5世紀中頃から後半代に下伊那地域には馬の墓が集中して造られるようになる。

現在、長野県における最も古い馬の存在は、長野市篠ノ井遺跡群 SK6042 土壙から出土した4世紀後半の馬歯から考えられる馬の存在である（文献59、60）。

篠ノ井遺跡群での発見と相前後して山梨県甲府市塩部遺跡の方形周溝墓からも同時期の馬の歯が確認され（文献61）、中部高地における4世紀後半の馬の存在を示す資料となっている。しかしこの馬は荷物を運ぶため、あるいは乗馬のために利用された中型馬であったかは不明であり、どのような目的で人間と接していたかについては今後の類似例の発見に期待が寄せられる。

それでは5世紀中頃から後半代にかけてのシナノの馬の存在はどのようなものなのであろうか。

シナノでは日本全国から出土している古墳時代馬具の2割以上が出土しており、またこの内の3割以上が飯田市を中心とする下伊那地域に集中している（文献62）。このような馬具の出土に注目し、東国舎人との関係で論じた岡安光彦氏の論考や（文献62、63）、科野国造と馬の生産や管理を論じた桐原健氏の論考（文献64）は注目すべきものである。

北の善光寺平では5世紀の第2四半期頃のものと考えられている木製鞍や5世紀の第3四半期から第4四半期頃の黒漆が塗られた壺鐙が長野市の榎田遺跡から出土している。また5世紀中頃の木芯鉄板張輪鐙や鞍に取り付ける鉄製覆輪が長野市の飯綱社古墳から出土し（文献65）、長野市地附山古墳群上池ノ平4号古墳からは5世紀後半の鑣轡が出土している（文献66）。これらの事例から5世紀の中頃以降には善光寺平においても乗馬の風習があったことがうかがえる。

南の下伊那地域での馬具の初現は5世紀第2四半期から第3四半期の移行期頃と考えら

第5表 下伊那地域における5世紀中頃から後半にかけての殉葬馬

| 遺跡 | 遺構 | 出土部位 | 所在地 | 時期 | 文献 | 註 |
|--------|-----------|------|---------|--------|-------|---|
| 新井原遺跡 | 馬の墓1 | 歯 | 飯田市座光寺 | 5世紀後半 | 7・105 | A |
| | 4号土坑 | 歯・骨 | 飯田市座光寺 | 5世紀後半 | 7・105 | |
| | SK47 | 歯 | 飯田市座光寺 | 5世紀後半 | 7・69 | |
| 新井原2号墳 | 周溝内70号土坑 | 歯 | 飯田市座光寺 | 5世紀中～後 | 7・17 | |
| | 周溝内71号土坑 | 歯 | 飯田市座光寺 | 5世紀中～後 | 7・17 | |
| | 周溝内72号土坑 | 歯 | 飯田市座光寺 | 5世紀中～後 | 7・17 | |
| 高岡4号墳 | 周溝内1号土坑 | 歯 | 飯田市座光寺 | 5世紀中～後 | 7・72 | |
| 宮垣外遺跡 | SK10 | 歯・骨 | 飯田市上郷別府 | 5世紀後半 | 7・14 | B |
| | SK11 | 歯 | 飯田市上郷別府 | 5世紀後半 | 7・14 | |
| | SK42 | 歯 | 飯田市上郷別府 | 5世紀後半 | 7・14 | |
| | SK68 | 歯 | 飯田市上郷別府 | 5世紀後半 | 7・14 | |
| | SM15周溝 | 歯 | 飯田市上郷別府 | 5世紀後半 | 7・14 | |
| | SM03内SK64 | 歯・骨? | 飯田市上郷別府 | 5世紀後半 | 7・14 | |
| 物見塚古墳 | 周溝 | 歯 | 飯田市八幡町 | 5世紀後半 | 7・18 | C |
| 寺所遺跡 | SK04 | 歯 | 飯田市松尾新井 | 5世紀後半 | 7・16 | |
| | SM02周溝 | 歯 | 飯田市松尾新井 | 5世紀後半 | 7・16 | |
| | SM03周溝 | 歯 | 飯田市松尾新井 | 5世紀後半 | 7・16 | |
| | SM04周溝 | 歯 | 飯田市松尾新井 | 5世紀後半 | 7・16 | |
| 茶柄山9号墳 | 周溝内馬の墓1 | 歯・骨 | 飯田市松尾上溝 | 5世紀後半 | 7・17 | |
| | 周溝内馬の墓2 | 歯 | 飯田市松尾上溝 | 5世紀後半 | 7・17 | |
| | 周溝内馬の墓3 | 歯 | 飯田市松尾上溝 | 5世紀後半 | 7・17 | |
| | 周溝内馬の墓4 | 歯 | 飯田市松尾上溝 | 5世紀後半 | 7・17 | |
| | 周溝内馬の墓5 | 歯 | 飯田市松尾上溝 | 5世紀後半 | 7・17 | |
| | 周溝内馬の墓6 | 歯 | 飯田市松尾上溝 | 5世紀後半 | 7・17 | |
| | 馬の墓8 | 歯 | 飯田市松尾上溝 | 5世紀後半 | 7・17 | |
| 茶柄山古墳群 | 馬の墓7 | 歯・骨 | 飯田市松尾上溝 | 5世紀後半 | 7・17 | D |
| | 馬の墓9 | 歯 | 飯田市松尾上溝 | 5世紀後半 | 7・17 | |
| | 馬の墓10 | 歯・骨 | 飯田市松尾上溝 | 5世紀後半 | 7・17 | |
| 北林5号墳 | 周溝内土坑 | 歯 | 高森町 | 7世紀 | 69 | |
| 北林5号墳 | 周溝内 | 歯 | 高森町 | 7世紀 | 69 | |

註

A=馬具（f字形鏡板付轡・剣菱形杏葉・飾鉾・黄金具）出土

B=馬具（f字形鏡板付轡・面繫金具・鞍・木芯鉄板張輪轡・環状雲珠・剣菱形杏葉）出土

C=馬具（轡）出土

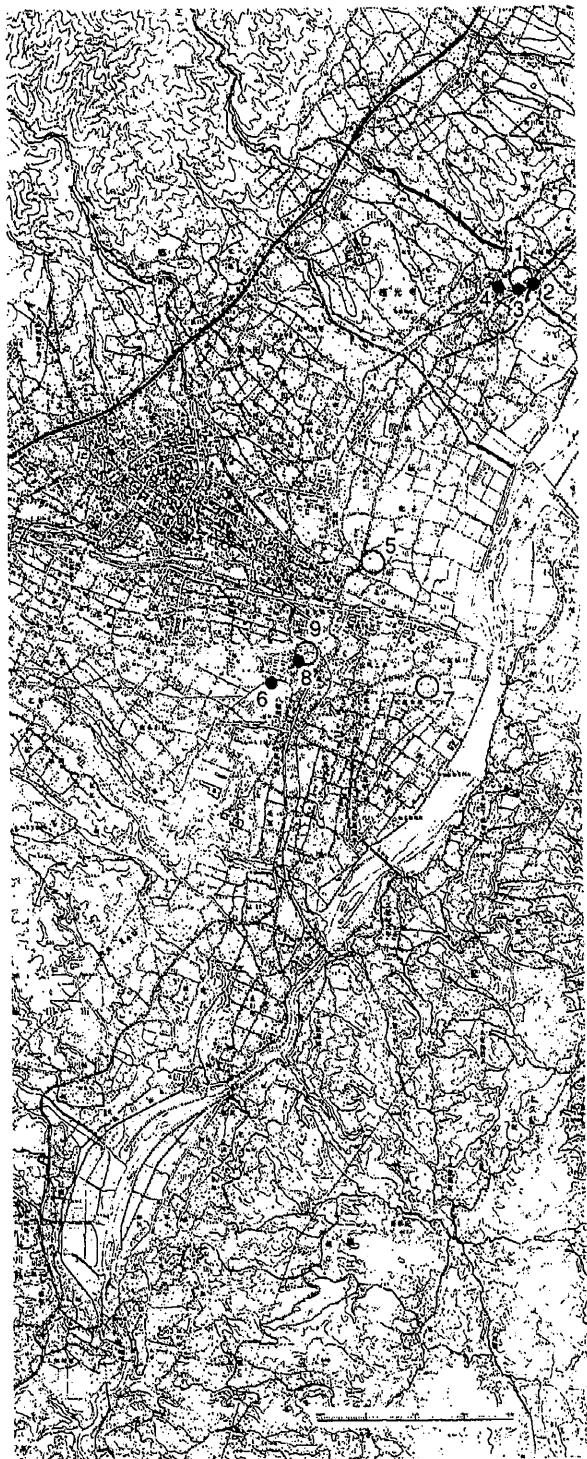
D=馬具（三環鈴）出土

※表の作成にあたっては、飯田市教育委員会滋谷恵美子氏・飯田市上郷考古博物館長岡田正彦氏・同学芸員山下誠一氏のご教示による。

れ、また特筆すべきことは5世紀後半代に集中する馬の墓が確認されていることである（文献8、67）。これら馬の墓は座光寺地域・上郷地域・松尾地域に集中し3地域だけで28例もが確認されている（文献7、11、68、69、70・71）。（第5表・第7図）この馬の墓は殉葬されたものであろうと考えられている。これらについての研究は、桃崎祐輔氏（文献72、73）や松井章・神谷正弘氏（文献74）の業績があり、これらの研究を参考に下伊那の馬の埋葬について簡単にふれてみたい。これまで日本全国で確実に5世紀中頃から後半代の馬の殉葬と考えられている資料数は60数例に過ぎず、下伊那地域以外での発見例では熊本県に20例ほどが集中し（文献75）、残りが他地域に散在している状況である。いずれにしても全国での発見例の半数近くが下伊那地域に集中していることは非常に注目しなければならないことである。

この馬を埋葬する行為は5世紀初頭に東北アジア諸民族から高句麗を経て、新羅や加耶諸国に波及したことが、その分布からうかがえる。日本には5世紀中頃から後半にかけて伝えられたと考えられている（文献72、73、74）。

日本国内における古墳時代の馬の殉葬例は、南は宮崎から北は青森にまでおよぶが、5世紀後半代と言う限られた時期に、一地域の古墳および周溝墓の周溝内・周溝内土壙・周溝近接土壙などの限られた類似方法で殉葬が行われ、さらには一部に馬具を装着したまま殉葬している例が見られることは、熊本県でも類似した傾向が見られるものの（文献75）、



第7図 下伊那地域における5世紀中頃から後半にかけての殉葬馬分布図（文献8より）

下伊那地域の特異性を示すものである。この中で特に良好な資料としては新井原遺跡4号土抗馬の骨・歯とともに5世紀第4四半期頃と考えられるf字形鏡板付轡・剣菱形杏葉・飾鋌・責金具が出土し（文献10、68、76）、宮垣外遺跡SM03内SK64からは馬の骨や歯とともにf字形鏡板付轡・面繫金具・木芯鉄板張輪鐙・環状雲珠・剣菱形杏葉が出土している（文献14）。さらに茶柄山古墳群・馬の墓10からは馬の下顎骨の下部より5世紀後半頃の鉄製輪金具と三環鈴が出土し（文献68、76）、新井原2号墳周溝内土壙3基からは馬の歯が見つかり、同周溝内から5世紀第3四半期頃のものと考えられる木芯鉄板張輪鐙が出土している（文献68、76）。また物見塚古墳周溝からは馬の歯と5世紀第3四半期頃の鑣轡が出土し、装着されていた状況が想定されている（文献68、76）。

馬を殉葬する風習は朝鮮半島を経由して日本に伝えられたことは先にも述べたが、新羅や加耶における殉葬例では馬具などは装着しない皆裸馬のままでの殉葬であることが確認されていることを考えれば、下伊那地域の例を含め、馬具を装着した殉葬の在り方は殉葬の日本化を示す大きな特色であると言える。

当時、鉄と馬（中型馬以上）をより多く入手、保有することは、戦闘手段あるいは生産手段や交通手段で優位な立場となることから、畿内大和政権にとっては非常に重要なことであつたにちがいない。軍馬の調達を目的とした大和政権の指示のもとに派遣された渡来人あるいは渡来系の人々は、馬匹生産に秀でた人々であり、馬匹生産に関わるることにより下伊那地域の政治的・経済的効果の向上に大きく関わったものと考えられる。そして新来文化を積極的に摂取しようとした在地有力豪族達との密接な紐帯関係を保つことで、より在地化し、在地有力豪族達同様に政治的・経済的に力を蓄える結果となったと考えられる。以上のことから、当時軍備品あるいは運搬手段として貴重品であつた馬にあでやかな馬具を装着させて殉葬されたことは、その主体墓に埋葬された人物との寵愛関係を示し、また彼らの威信を示すための行為であつたと考えられる。いずれにせよ、馬の殉葬を伴う古墳の埋葬者は、当地域の政治的・経済的効果を向上させる大きな手段となる馬匹生産に関わり、新来文化を積極的に摂取しようとした在地有力豪族達や、畿内大和政権の指示のもと、当地に派遣され馬匹生産に積極的に関わって力を蓄えた渡来人あるいは渡来系の人々の墓と考えられる。

渡来人あるいは渡来系の人々については、倭人化することにより威信財としての馬具を装着させたままでの殉葬を試みたとも考えられる。またこの後裔達の一部が馬匹生産に関わる主導権を握ることにより新興在地豪族化し、本来の在地豪族達とともに東国舎人の中心的存在として成長していったものと考えられる。

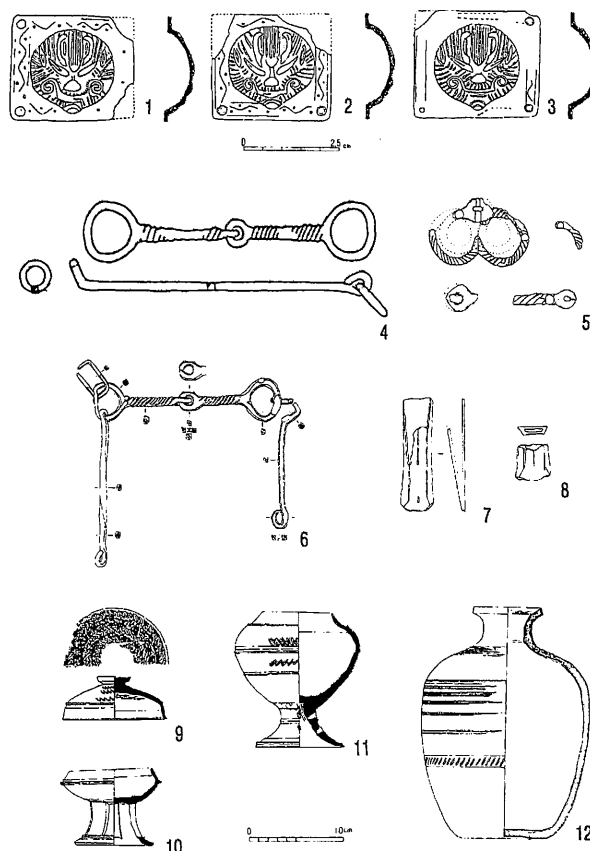
6 渡来系遺物

善光寺平についての渡来系遺物については風間栄一氏がすでにまとめている（文献77）。それを参考に古墳時代における渡来系遺物をまとめてみた。多くが古墳からの出土品である。帯金具や飾金具では、須坂市八丁鎧塚2号墳から鍍銀製銅製獅嚙紋帯金具が出土して

第6表 渡来系遺物一覧 (文献28より)

| | 遺跡名 | 遺物名 | 文献 |
|-------|---------------|-------------|-------|
| 1・2・3 | 須坂市八丁鎧塚古墳 | 鍍銀製銅製獅嚙紋帯金具 | 55 |
| 4 | 中野市林畔1号墳 | 鑣轡 | 100 |
| 5 | 更埴市森9号墳 | 複環式鏡板付轡 | 51 |
| 6 | 長野市地附山古墳群5号墳 | 鑣轡 | 66 |
| 7・8 | 上水内郡牟礼村鍛冶久保古墳 | 鑄造鉄斧 | 101 |
| 9・10 | 更埴市(伝)土口將軍塚古墳 | 陶質土器 | 92 |
| 11 | 更埴市城ノ内遺跡 | 陶質土器 | 51 |
| 12 | 長野市長原7号墳 | 百済系長頸壺 | 102 |
| 13 | 飯田市松尾上溝天神塚古墳 | 金銅製帯金具垂飾品 | 7・103 |
| 14 | 飯田市畦地1号墳 | 銀製垂飾付長鎖式耳飾 | 7・104 |

いるが、この帯金具の類例は奈良県真弓鑑子塚古墳や岡山県牛文茶臼山古墳から出土し、韓国宋山里古墳群2号古墳や高霊池山洞39号古墳などからも出土している(文献78)。飯田市松尾上溝天神塚古墳から金銅製帯金具垂飾品、飯田市畦地1号古墳から銀製垂飾付長鎖式耳飾が出土している。馬具では中野市林畔1号墳や長野市地附山古墳群5号墳からは鑣轡、千曲市森9号墳からは複環式鏡板付轡が出土している。鉄製品では、上水内郡飯綱町鍛冶久保古墳から鑄造鉄斧が出土し、土器類では、千曲市(伝)土口將軍塚古墳や城ノ内遺跡から陶質土器が出土し、長野市長原7号古墳から百済系長頸壺が出土している。現状では軟質の韓式土器は確認されていない。



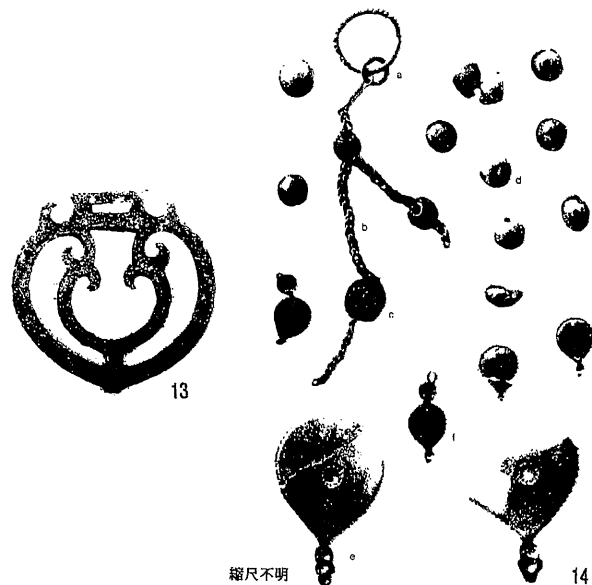
第8図 善光寺平の渡来系遺物 (文献28より)

7 まとめにかえて

シナノにおける前方後円墳を中心とする古墳築造や古墳群形成は、千曲川水系の善光寺平では4世紀前半頃に開始される。そして5世紀中頃を境に天竜川水系の伊那谷南域（下伊那地域）に移行する。このような5世紀中頃以降の前方後円墳を中核とする古墳群形成の地域的移行については、武蔵における南武蔵地域や比企地域から埼玉地域へ、美濃・尾張地域での濃尾平野や犬山扇状地地域から名古屋台地方面への移行ほか、下野や三河などでもみうけられる。

それぞれの地域における様々な状況によるものと考えられるが、シナノにおいては大和政権が国造りを進めるにあたり、‘赤い土器’に象徴される箱清水式土器文化圏の弥生時代以来の有力者達による大和政権への自己主張的権威表現の結果、地域有力者達の高遠山古墳や森將軍塚古墳を初めとする善光寺平の前方後円墳が築造され、さらにその在地有力者達の善光寺平南域への集約化により順次前方後円墳が築造されたものとする（文献8）。そしてこの後、積石塚古墳と善光寺平型合掌形石室は本来直接的な関係があった訳ではないが、「新来文化の担い手」達によって、結果的に千曲川東岸の初期積石塚古墳群において、合体したものとする。

高句麗では国都を集安に置いた4世紀代から5世紀前半頃に積石塚が構造的にも、規模的にも、数的にも発展し、427年の平壤遷都以降、突如として積石塚の築造は衰退して行く。さらに積石塚が百済や新羅において一般的な墓制とはなり得なかったことは考慮しなければならない。このことをふまえば、鎧塚1号墳、後の鎧塚2号墳（文献55）、そして東筑摩郡坂北村安坂將軍塚古墳群1号・2号・3号・4号墳（文献56）と長野市大屋山古墳群4号墳の積石塚古墳の築造方法や形態を考慮すると、4世紀後半から5世紀代の善光寺平を中心とするシナノ北域は高句麗からの人々の渡来による新来文化の伝播があり、この後百済や新羅からの影響を受けながら新来文化を受け入れ続けたものであったと考えられる（文献79）。また積石塚古墳については、韓国東岸の鬱陵島積石塚群が伽耶の墓制の影響を受けていたり（文献80）、福岡県糟屋郡新宮町相島積石塚群は、高句麗積石塚の影響が見られるなどのこと（文献81）をふまえるならば、時代の変化とともに新たな形態の積石塚を受け入れながら、善光寺平ではシナノ的な積石塚古墳を築造し、また合掌形石室は独自の変化を遂げていくこととなるのである。



第9図 伊那谷の渡来系遺物（文献28より）

須坂市八丁鎧塚1号墳から大室古墳群の成立過程と群馬県高崎市剣崎長瀬西遺跡（文献82）や静岡県浜松市（旧浜北市）内野二本ヶ谷積石塚古墳群（文献83）とは、積石塚古墳の形態に大きな違いを見せているが、この違いはそれらを築造した「新来文化の担い手」達のルーツや受け入れ方の違いと考えられる。

また松沢古墳群1号墳・2号墳については（文献84）、千曲川東岸の初期積石塚古墳群を築造した「新来文化の担い手」達の一派が新来文化伝播のために移動した結果であろうと考える。

しかし、5世紀中頃以降の下伊那地域での前方後円墳築造は、その前段階の大形円墳や帆立貝形古墳の築造段階から、東国を視野に入れるための大和政権独自の地域有力者の創出・擁立による結果であり（文献11）、大和政権が意図的に紐帯関係を結んだ在地豪族達や馬匹生産に関わることにより政治的にも経済的にも成長した渡来人あるいは渡来系の人々の墓であったと考えられる。

さらに善光寺平では小形円墳への横穴式石室導入となり、下伊那地域では対象的に前方後円墳への横穴式石室構築となり畿内中枢部的な様相を示す。この横穴式石室の中には座光寺地域での北本城古墳をはじめとする3古墳に百済地域あるいは加耶地域の影響を受けた石室が採用され、また5世紀中頃から後半代の殉葬馬の在り方を考えるならば、同時期の朝鮮半島における加耶地域や新羅地域での殉葬馬の実態から、特に加耶地域からの人々の影響を受けた地域であったことが推察される。

以上、前方後円墳を中核とした古墳群形成、5世紀中頃以降の集落形成、合掌形石室と横穴式石室の導入と積石塚古墳、馬の殉葬と馬具への視点から古墳時代中期におけるシナノの南北の地域性を見てきた。

ここであらためて要点をまとめて論を終わりにしたい。

前方後円墳の築造と前方後円墳を中核とする古墳群形成については、北の善光寺平では大和政権が国造りを進めるにあたり、‘赤い土器’に象徴される箱清水式土器文化圏の弥生時代以来の有力者達による大和政権への自己主張的権威表現の結果、地域有力者達の前方後円墳が築造され、さらにその地域有力者達の善光寺平南域への集約化となるが、5世紀後半以降には大和政権との関わりが希薄化していく。しかし南の下伊那地域では、5世紀中頃からの大形円墳や帆立貝形古墳の築造段階から、東国を視野に入れるための大和政権独自の地域有力者の創出・擁立による結果により前方後円墳が築造されたと考えられる。

横穴式石室の古墳への導入は、北の善光寺平では小形円墳への小規模な横穴式石室導入となり、南の下伊那地域では畿内での状況同様に地域における在地豪族達の墓と考えられる前方後円墳への大規模な横穴式石室の導入となった。

初期積石塚古墳の構造や特徴から北の善光寺平では4世紀後半から5世紀代にかけては高句麗的な文化の影響が見られ、南の下伊那地域では殉葬馬が多く見られることなどから、5世紀中頃以降の5世紀代には加耶地域的な文化の影響が見られる。しかし大きな視野でとらえるならば単純には言い切れない。また北の善光寺平においても南の下伊那地域にお

いても5世紀中頃以降には乗馬目的の中型馬の飼育（生産・管理）が行われ始めていたと考えられる。

北の善光寺平においても南の下伊那地域においても5世紀中頃以降の新来文化を積極的に受け入れた各地域のムラには、5世紀中頃（TK208頃）以降には多くの須恵器が持ち込まれ、また住居内にはカマドや間仕切り構造が導入された。

以上を当論での要点としたい。

シナノの古墳時代中期を語るにはさらに多くの遺物や遺構・遺跡の検討が必要であろうと考える。当論の内容だけでは当然古墳時代中期のシナノを語れた訳ではない。しかし古墳時代中期のシナノを考える上での一視点として参考にしていただけるならば幸いである。

参考文献

- 1 松沢芳宏「有尾古墳群・勘助山古墳」『長野県史 考古資料編』全1巻（2）主要遺跡（北・東信）長野県史刊行会 1983年
- 2 松沢芳宏・田川幸生「蟹沢古墳・高遠山古墳・姥懐古墳」『長野県史 考古資料編』全1巻（2）主要遺跡（北・東信）長野県史刊行会 1983年
- 3 長野市教育委員会『和田東山古墳群 -和田東山古墳群第3号墳発掘調査概報-』1995年
- 4 木下正史「善光寺平南部域における前方後円墳の新成果」『発掘された科野の首長墓』長野県考古学会 2000年
- 5 市村成人『下伊那誌』第2巻・第3巻 下伊那誌編纂会 1955年
- 6 飯田市教育委員会『飯田の遺跡 市内遺跡詳細分布調査報告』1998年
- 7 飯田市教育委員会『飯田における古墳の出現と展開』2007年
- 8 西山克己「下伊那の古墳群形成と伊那郡衙の成立」『長野県の考古学』2 長野県埋蔵文化財センター 2001年
- 9 西山克己「下伊那の馬と富本銭」『長野県埋蔵文化財センター紀要』7 長野県埋蔵文化財センター 1999年
- 10 今村善興・小林正春「新井原12号古墳」『長野県史 考古資料編』全1巻（3）主要遺跡（中・南信）長野県史刊行会 1983年
- 11 西山克己「下伊那地域の古墳群形成の推移と在地豪族達の盛衰」『伊那』第49巻第6号 伊那史学会 2001年
- 12 飯田市上郷考古博物館『溝口の塚古墳の副葬品と殉葬馬』1999年
- 13 飯田市教育委員会『溝口の塚古墳』2001年
- 14 飯田市教育委員会『宮垣外遺跡・高屋遺跡』2000年
- 15 佐藤魁信「妙前大塚古墳」『長野県史 考古資料編』全1巻（3）主要遺跡（中・南信）長野県史刊行会 1983年
- 16 飯田市教育委員会『寺所遺跡』1999年
- 17 小林正春「長野の古墳 -下伊那の古墳時代の埋葬馬」『日本考古学協会1994年度大会研究発表要旨』日本考古学協会 1994年
- 18 飯田市教育委員会『八幡原遺跡 物見塚古墳』1992年
- 19 岩崎卓也・松尾昌彦「4（2）武器・武具」『長野県史 考古資料編』全1巻（4）遺構・遺物 長野県史刊行会 1988年
- 20 大沢和夫「兼清塚古墳」『長野県史 考古資料編』全1巻（3）主要遺跡（中・南信）長野県史刊行会 1983年

- 21 大沢和夫「御猿堂古墳」『長野県史 考古資料編』全1巻(3) 主要遺跡(中・南信) 長野県史刊行会 1983年
- 22 大沢和夫「馬背塚古墳」『長野県史 考古資料編』全1巻(3) 主要遺跡(中・南信) 長野県史刊行会 1983年
- 23 飯田市教育委員会『月の木遺跡 月の木古墳群』 2002年
- 24 飯田市教育委員会『久保田遺跡 久保田1号古墳 餓魔王塚古墳 その2 古墳編』 2003年
- 25 澁谷恵美子「正清寺(久保田1号)古墳発掘調査概要」『発掘された科野の首長墓』 長野県考古学会 2000年
- 26 西山克己「信濃国で須恵器が用いられ始めた頃」『信濃』第40巻第4号 信濃史学会 1988年
- 27 西山克己「信州における須恵器出現の頃」『考古学ジャーナル』316 ニューサイエンス社 1990年
- 28 西山克己「中部高地における新来文化の受容」『第46回埋蔵文化財研究集会 渡来文化の受容と展開 - 5世紀における政治的・社会的変化の具体相(2) -』埋蔵文化財研究会 1999年
- 29 西山克己「下伊那の古墳時代における新来文化の受容」『伊那』第47巻第4号 伊那史学会 1999年
- 30 長野市教育委員会『本村東沖遺跡』 1993年
- 31 財長野県埋蔵文化財センター 他「屋代遺跡群」『財長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』29 1998年
- 32 風間栄一「長野市地附山古墳群上池ノ平2号墳出土の須恵器」『信濃』第50巻第7号 信濃史学会 1998年
- 33 長野県埋蔵文化財センター 他「榎田遺跡」『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』37 1999年
- 34 更埴市教育委員会 他『屋代清水遺跡』 1992年
- 35 長野県教育委員会 他『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書-下伊那郡鼎町その2・天伯A-』 1975年
- 36 長野県教育委員会 他『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書-飯田地区-』 1971年
- 37 飯田市教育委員会 他『小垣外・八幡面遺跡』 1988年
- 38 飯田市教育委員会『龍江大平遺跡』 1995年
- 39 飯島哲也「第5章4 本村東沖遺跡出土の古式須恵器について」『本村東沖遺跡』長野市教育委員会 1993年
- 40 飯田市教育委員会 他『殿原遺跡』 1987年
- 41 飯田市教育委員会 他『前の原遺跡』 1990年
- 42 飯田市教育委員会『井戸下遺跡』 2001年
- 43 飯田市教育委員会『細新遺跡Ⅱ』 1998年
- 44 西山克己「科野の積石塚古墳と合掌形石室」『大塚初重先生頌寿記念考古学論集』東京堂出版 2000年
- 45 斎藤 忠「屋根形天井を有する石室墳に就いて」『考古学雑誌』第34巻第4号 日本考古学会 1944年
- 46 西山克己「信濃の積石塚古墳と合掌形石室」『長野県の考古学』(財)長野県埋蔵文化財センター 1996年
- 47 土屋 積・「大星山古墳群 第3節 大星山古墳群の歴史的位罫」『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』20 (財)長野県埋蔵文化財センター 他 1996年
- 48 土生田純之「長野市地附山古墳群(上池ノ平古墳)について」『専修考古学』第6号 専修大学考古学会 1996年
- 49 飯島哲也「科野の積石塚古墳」『東国の積石塚古墳』山梨県考古学協会 1999年
- 50 岡林孝作「第8章第4節 長野県北部における横穴式石室の編年と系譜」『史跡森將軍塚古墳』更埴市教育委員会 1992年
- 51 更埴市教育委員会『史跡森將軍塚古墳』 1992年

- 52 長野市教育委員会『布施塚1号古墳・2号古墳』 1996年
- 53 白石太一郎「伊那谷の横穴式石室」(1)・(2)『信濃』第40巻第7号・第8号 信濃史学会 1988年
- 54 土生田純之「積石塚古墳と合掌形石室の再検討 -大室古墳群を中心として-」『福岡大学総合研究所報』第240号(総合科学編第3号) 福岡大学総合研究所 2000年
- 55 須坂市教育委員会『長野県史跡 八丁鎧塚古墳』 2000年
- 56 大場磐雄・原嘉藤・寺村光晴・桐原健「長野県東筑摩郡坂井村安坂積石塚の研究」1・2『信濃』第Ⅲ次第16巻第4号・第5号 信濃史学会 1964年
- 57 (財)長野県埋蔵文化財センター 他「大星山古墳群」『(財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』20 1996年
- 58 大塚初重「第5章 古墳群の年代と成果」『(財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』13 (財)長野県埋蔵文化財センター 他 1992年
- 59 茂原信生・櫻井秀雄「篠ノ井遺跡群 成果と課題編 第8節篠ノ井遺跡群出土の動物遺存体」『(財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』22 (財)長野県埋蔵文化財センター 他 1997年
- 60 西山克己「篠ノ井遺跡群 概要・遺構編 第2章第3節古墳時代前期の遺構」『(財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』22 (財)長野県埋蔵文化財センター 他 1997年
- 61 村石眞澄「2、塩部遺跡」『山梨考古』第55号 山梨県考古学協会 1995年
- 62 岡安光彦「馬具副葬古墳と東国舍人騎兵 考古資料と文献史料による総合的分析の試み」『考古学雑誌』第71巻第4号 日本考古学会 1986年
- 63 岡安光彦「東国舍人騎兵の成立と下伊那地方」『伊那』第42巻第6号 伊那史学会 1994年
- 64 桐原 健「科野国造の馬」『伊那』第42巻第6号 伊那史学会 1994年
- 65 岩崎卓也・松尾昌彦「4(3)馬具」『長野県史 考古資料編』全1巻(4)遺構・遺物 長野県史刊行会 1988年
- 66 長野市教育委員会 他『地附山古墳群』 1988年
- 67 片山祐介「附編2 SK 64出土馬具について」『宮垣外遺跡・高屋遺跡』飯田市教育委員会 2000年
- 68 小林正春「伊那谷をはたして先進地か」『長野県立歴史館 飯田・下伊那セミナー 飯田下伊那の先進性』長野県立歴史館 1998年
- 69 山下誠一「(3)埋葬馬について」『寺所遺跡』飯田市教育委員会 1999年
- 70 澁谷恵美子「馬の文化論」『大塚初重先生頌寿記念考古学論集』東京堂出版 2000年
- 71 岡田正彦「南信州の渡来文化 -古墳時代を中心として-」『飯田市美術博物館紀要』第16号 飯田市美術博物館 2006年
- 72 桃崎祐輔「古墳に伴う牛馬供犠の検討 -日本列島・朝鮮半島・中国東北地方の事例を比較して-」『古文化談叢』第31集 九州古文化研究会 1993年
- 73 桃崎祐輔「日本列島における騎馬文化の受容と拡散 -殺馬儀礼と初期馬具の拡散に見る慕容鮮卑・朝鮮三国伽耶の影響-」『第46回埋蔵文化財研究集会 渡来文化の受容と展開』埋蔵文化財研究会 1999年
- 74 松井 章・神谷正弘「古代の朝鮮半島および日本列島における馬の殉殺について」『考古学雑誌』第80巻第1号 日本考古学会 1994年
- 75 島津義昭・高木正文「熊本の古墳」『日本考古学協会 1994年度大会 研究発表要旨』日本考古学協会 1994年
- 76 吉川 豊「飯田市内における随葬馬について」『伊那』第41巻第6号 伊那史学会 1993年
- 77 風間栄一「長野県善光寺平の半島系遺物雑考」『アジアンレター』第3号 東アジアの歴史と文化懇話会 1998年
- 78 小浜 成「第三章 五 帯金具 -その文様と技術からみた東アジアの中の日本-」『黄泉のアクセサリ -古墳時代の装身具-』大阪府立近つ飛鳥博物館 2003年

- 79 西山克己「積石塚の系譜」『長野』第216号 長野郷土史研究会 2001年
- 80 金 元龍『鬱陵島』国立博物館 1963年
- 81 新宮町教育委員会『相島積石塚群』1998年
- 82 黒田 晃「古墳時代の渡来人のむら - 高崎市剣崎長瀬西遺跡」『季刊考古学』第62号 雄山閣出版 1998年
- 83 浜北市教育委員会『内野古墳群』2000年
- 84 山口 明「新たに確認された合掌形石室! - 山形県南陽市松沢古墳群 -」『長野市立博物館だより』第32号 長野市立博物館 1995年
- 85 矢島宏雄・北條芳隆「第3部第2章長野県」『前方後円墳集成 中部編』山川出版 1992年
- 86 土屋 積「七瀬双子塚古墳」『長野県史 考古史料編』全1巻(2) 主要遺跡(北・東信) 長野県史刊行会 1983年
- 87 牟礼村教育委員会『庚申塚古墳発掘調査報告書』1994年
- 88 岩崎卓也「腰村1号古墳」『長野県史 考古史料編』全1巻(2) 主要遺跡(北・東信) 長野県史刊行会 1983年
- 89 岩崎卓也「舞鶴山1・2号古墳」『長野県史 考古史料編』全1巻(2) 主要遺跡(北・東信) 長野県史刊行会 1983年
- 90 岩崎卓也「川柳將軍塚古墳・姫塚古墳」『長野県史 考古史料編』全1巻(2) 主要遺跡(北・東信) 長野県史刊行会 1983年
- 91 岩崎卓也「中郷古墳」『長野県史 考古史料編』全1巻(2) 主要遺跡(北・東信) 長野県史刊行会 1983年
- 92 長野市教育委員会 他『土口將軍塚古墳』1987年
- 93 小平和夫「第3編第1章農業社会の発展 - 古墳時代 -」『下伊那史』第1巻 下伊那誌編纂会 1991年
- 94 佐久市教育委員会『瀧の峯古墳群』1986年
- 95 川上 元「二子塚古墳」『長野県史 考古史料編』全1巻(2) 主要遺跡(北・東信) 長野県史刊行会 1983年
- 96 桐原 健・樋口昇一「第5章 上田盆地と佐久平」『日本古代遺跡 50 長野』保育社 1983年
- 97 桐原 健「弘法山古墳」『長野県史 考古史料編』全1巻(3) 主要遺跡(中・南信) 長野県史刊行会 1983年
- 98 宮坂光昭「青塚古墳」『長野県史 考古史料編』全1巻(3) 主要遺跡(中・南信) 長野県史刊行会 1983年
- 99 柴登己夫「松島大墓古墳」『長野県史 考古史料編』全1巻(3) 主要遺跡(中・南信) 長野県史刊行会 1983年
- 100 小野勝年・横山浩一「林畔1・2号古墳・山の神古墳」『長野県史 考古資料編』全1巻(二) 主要遺跡(北・東信) 長野県史刊行会 1983年
- 101 小柳義男「第2章第2節2(1) 鍛冶久保古墳」『庚申塚古墳発掘調査報告書』牟礼村教育委員会 1994年
- 102 大塚初重・小林三郎 他『信濃長原古墳群 - 積石塚の調査 -』長野県考古学会 1968年
- 103 渋谷恵美子「口絵解説 天神塚古墳出土帯金具垂飾品」『伊那』第40巻6号 伊那史学会 1999年
- 104 今村善興「畦地1号古墳」『長野県史 考古資料編』全1巻(三) 主要遺跡(南信) 長野県史刊行会 1983年
- 105 飯田市教育委員会『恒川遺跡群』1986年